
焔の邂逅 01.能力者達の交わる夜

有華 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焰の邂逅 01・能力者達の交わる夜

【Nコード】

N6336D

【作者名】

有華 桜

【あらすじ】

男子禁制のとある学園 棘薔薇学園に通う一人の少女、紅条焰^{こうじょうほむで}。彼女を取り巻く友人、先輩、そして『敵』。『超能力者』と呼ばれる、ある特殊なチカラを手に入れた人間達と出会いながら、焰は自分自身の『失ったモノ』を探して行く。現代系・超能力バトル小説、『焰の邂逅』！少女達の活躍する戦いに活目せよ！

第一章／能力者達の交わる夜（上）

深夜、とある街外れの廃工場　人工的な明かりはなく、ただ夜空に浮かぶ月の光が建物の中を照らしている　そんな広い空間の中、二つの人影が揺れ動く。

僕こと紅条焰（こうじょう へん）は、死と隣り合わせの境地と呼ぶべき状況にいた。現状を簡単に説明すると、とある殺人鬼を相手に互いの命を奪い合っている。

「冗談じゃない。なんだよあれ、規格外にもほどがある……！」
呟きながらも、僕は駆ける速度を落とさない。

少しでもこの姿が相手の視覚に収まり続けてしまえばゲームオーバーだなんて、まったくもって馬鹿馬鹿しい状況だ。

けれど、これは能力者同士の殺し合い。

真正正銘、互いの命を賭けた　一対一での殺し合いだ。

（状況は相手が確実に有利。僕は相手に接触しないといけないし、どうやって近づくか）

僕の持つ超能力・物体発火（バイロキネシス）は、直に触れなければ対象を燃やす事は出来ない。

だが、そんな僕とは違い、敵の持つ能力は極めて厄介だ。

僕が対象に触れなければ能力を発動できない事に対し　敵の持つ能力は、その視覚で一定時間、対象を認識する事で発動する。

ようは、敵に見つかってしまったら、その視野から一定時間中に姿を隠す事が出来なければアウト　その瞬間、僕の敗北が確定する。

この廃工場はとてつもなく広く、さらに廃棄されたゴミや鉄筋、壊れた車の残骸などが山のように置かれており、敵にはそう簡単に見つかる事はない　はずなのだが、

（……問題は、音だ）

いくら広いと言えど、この空間は密閉されていた。

建物の外を車や人が通っている訳でもないし、この周辺は静まり返っている。そんな場所で物音を立てれば、まず僕の居場所が敵に特定されてしまう。

その為、本当は走る事でさえ避けたいが　状況は、すでに切迫していた。

「逃げ回る事しかできねーみてーだな、オイ！　その程度でオレに勝てるとも思ったのかよ！」

僕の背後を逃さぬまま、敵である能力者が叫んだ。

互いの距離はそこまで遠くないが、両者の間にある遮蔽物に守られ、僕はなんとか逃げ続けているような状態だった。

確かに相手の言う通り、このままでは防戦一方だ。

こちらから手を出す方法が分からない以上、いずれ敵に捕まってしまう。それだけはなんとしても避けなければならない。

本音を言えば、この状況下で勝ち目を見出すのは至難の業である。相手が素人ならばともかく、敵はプロだ。こうした戦闘行動を得意とするエキスパートである。

幸いと言うべきか、互いの身体能力にそこまでの差はない。こうして逃げ続けるだけならばなんとかなる。

しかし、それまでだ。

なんとかしてこの状況を打破する策を考えなければ、僕に勝機はやってこないだろう。

（長期戦になる……いや、それじゃ駄目だ。僕と敵の条件を比べれば、戦いが長引けば長引くほど僕が不利になっただけに決まってる。考える、何かあるはずだ　）

僕は思考を最大限に回転させながら、障害物の間をすり抜けるように走り、^{また}飛び越えていく。

（少なくとも敵は三秒間での能力発動は不可能　けれど、三秒で相手の懐に飛び込んで、なおかつこの手で触れられるのかと言えば……無理、か。たったの三秒じゃ、取れる行動の選択肢が少なすぎる。何らかの手段で敵の動きを封じる、あるいは不意打ち　くそ、

どれも不安定だ。確実に成功させられるとは思えない)

半壊したトラックの残骸に隠れながら、僕は敵の動きを待ちつつ思考を巡らせる。だが、いくら考えても最善策が思い付けない。

全ては一瞬、たった一度のチャンスにかかっている。

その機を逃してしまえば、全てはそれまで。これは、そういう戦いだ。

「あーいい加減つまらねー、飽きてきた。鬼ごっこはイイんだが、どうにも一方的過ぎて困る。これじゃあ単なるレイプショーだぜ。それに、テメエもそろそろ限界なんじゃねーのか？」

ガゴン！ と、背後で大きな物音がした。

「ま、テメエがそうやって逃げ続けられるのも」

振り返ってみれば、背中を預けていたはずの軽トラックの残骸がまるで、プレス機に押し潰されたかのように。へしゃげていた。

「オレが今まで手加減していたからなんだが、な？」

敵の姿が、見えた。

戦いを始めてようやく、僕は初めて対峙している相手の姿を直視してしまった。

黒く短い髪はワックスか何かでボサボサに仕上げられており、耳元には鋭い針のようなものがぶらさがったシルバーのピアスがそれぞれ左右にひとつずつ。

上半身はこの蒸暑い時期にぴったりの涼しそうな黒のタンクトップ、首元には髑髏のような形をしたネックレス。

股近くギリギリの部分まで短くした紺色のパンツに、腰部に巻かれた太いチェーンがじゃらじゃらと音を鳴らしている。

そいつは鋭い鷹のような眼光で僕を睨むと、唐突に後ろを向いた。「ま、落ち着けよ。とりあえずホラ、こうして後ろを向いておいてやる。ああ、テメエが少しでも襲い掛かってくるような気配を感じたら、反撃は覚悟して貰うが……まあいい、本題だ。テメエ、どうしてオレの能力を知っている？」

「それは、答えなければ振り返る、と解釈していいの？」

「別に。答えたくねーんなら、特に答える必要はねーけどよ。普通、気になるだろ。テメエとオレは間違いなく初対面だって言うのに、テメエはオレの視覚から逃れる事を第一に動いていやがった。オレが能力を使うよりも前からだ。初対面にしては、オレの能力について知り過ぎてるとは思わねーか？」

敵の言葉に耳を傾けるべきではなく、それに答えるべきでもない
普通ならそれが正しいはずだ。

今すぐこの場から逃げ出せば、今この状況を元に戻す事は出来る
だろう。

だが、それでは意味がない
結局、あの不毛な鬼ごっこを繰り返す事になってしまっからだ。

だからこそ
僕は今、このチャンスを生かすしかない。

「そうだね。君の能力は、視覚で対象を一定時間認識する事で発動するもの
僕はそう聞いている」

「聞いている、か。ようするに、テメエには後ろ盾がいるってわけだ。それも、オレの能力を知って生きていられる程度の
能力者……か？」

「さあ、ね。僕はただ頼まれただけだから」

「頼まれた……だと？」

「そ。もつとも、まさかこんなに強い相手だとは思ってもいなかったから、今となつては逃げ出したい気分でいっぱいなんだけどね」
「へえ、口先だけは随分と余裕じゃねーか。ま、大体事情は分かつたが……正直、今あんまり乗り気じゃねーんだよ、オレ。テメエが来る前に少し他のヤツと殺り合つてて疲れてるしよ。それに、テメエもそろそろ限界なはずだ。だから、さっさと」

会話タイム終了
第二試合スタート、つてところか。

僕はいつでも相手の視野から逃れられるよう、隠れる為の場所をいくつか横目で確認しておきながら、

「帰れよ。見逃してやる」

まったく、想像もしていなかった言葉を耳にした。

「は……？ それってどういう」

「聴こえなかったのか？ 帰れ、つってんだよ。テメエみたいにハナツから殺意のない奴を相手にするのはオレの性に合わねーんだ。オレが殺しの対象にすんのは、あくまでこのオレを殺害対象として意識している奴だけなんぞでな。テメエ、頼まれて仕方なくやってるだつて？ 殺^やる気がない、逃げ出したいと思うならさっさとそうしやがれ。そういうの、いい加減目障りなんだよ」

両腕を組み、後ろを向いたまま　その殺人鬼は、心底鬱陶しそうな口調でそう言った。

「……驚いた。てつきり見境なく人を殺すのが好きな人なんだと思つてたよ」

「ああ？ テメエ、舐めてんのか。どこのどいつに頼まれたのかは知らねーが、どうやらそいつにありもしねー事を吹き込まれたようだぜ。確かにオレは殺し合いはやって好きだし楽しいが、別に殺す事自体が好きなわけじゃない。純粹に、命のやり取りって奴を楽しんでるだけだ。相手がオレを本気で殺しに来る、オレが本気で相手を殺すつもりで立ち向かう　それが最高なんだよ。勝手に人の趣向を捻じ曲げてんじゃねー」

それはそれでどうかと思うのだが、言われてみれば聞いていた情報とは齟齬^{そご}がある。

確かに、この僕が殺人鬼に個人的な殺意を持っているわけではないし　頼まれてさえいなければ、出来ることならこんな事はしたくない。

頼まれた事を勝手に放棄して逃げ出すというのも悪い気はするが、何より互いに興が冷めてしまった。

相手の言葉を聞く限り、ここは素直に立ち去るのが一番の選択肢だろう。

「……うん。分かったよ殺人鬼さん、ここはひとつ引き下がる。確かに、僕個人が君に殺意を抱いているわけじゃない。それに本来こういうのは不得手だし、何より不本意なんだ。こっちからちよっかいをかけておいて悪いとは思うけど、この場はお言葉に甘えさせて貰う」

「ハイハイ、面倒くせーからさっさと失せろ。……ああ、ひとつだけ言っておくが、オレを呼ぶなら殺人鬼ってのは間違いだ。訂正しやがれ」

「ん、名前で呼べって事？ 実は僕、依頼主から名前までは聞いてないんだけど」

「違えよ、バカ。殺人鬼っつーのは、イメージ的にレイプ魔みてーな感じだろ。そんなんじゃないくて、オレは殺り合うのが好きでな。一方的にいたぶるのは性に合わねー。だから、殺人鬼っつー呼ばれ方はあんまし好きじゃねーんだよ。呼ぶなら、そうだな……戦闘狂、ってのはどうだ？」

戦闘狂 なるほど、一応、自分でも狂っているって自覚はあるらしい。

しかし今更、この僕に呼び方を訂正させるだなんて、何か意味があるのだろうか。

「それじゃあ……、戦闘狂さん。僕はそのまま退散しちゃうんだけど、本当に見逃してくれるんだね？」

「ああ……そうだな、そんなに逃がす代わりにテメエの依頼主に伝えとけ。何のつもりでオレを狙ってんのかは知らねーが オレを殺したいなら本気で殺しに来い、ってな」

あの殺人鬼 改め、戦闘狂との戦いから次の日。

僕 紅条焰は、とある学園の裏庭に呼び出され、一人の女子生徒と会合していた。

「それで意気投合した末、背を向けて退散したと言うわけですか？」
「別に意気投合したってわけでもないんだけど……まあ、そんなところ」

戦闘狂の殺害を僕に依頼した張本人であり、僕にとって一年上の先輩　三年生の百瀬百合花、それが彼女の^{もせゆりか}名前だ。

長い黒髪をふたつに分けた三つ編みで整え、恐らくは美人だろうそれを台無しにするかのような、センスのない大きな丸眼鏡。

服装は、全生徒共通である学園公式のセーラー服　だが、彼女のはスカートが他と比べて少し長い気がする。

色々な意味で、凄くもつたいない人だ　というのが、僕が初めて彼女と出会った時に得た第一印象である。

「そうですか。よろしい、結構ですわ」

「え、はいそうですね、許しちゃうんですか！」

「もう過ぎた事ではありませんか。今更ぐだぐだと責任を追及したところで、何かが変わるわけでもありませんでしょう？　それとも、わたくしが焰さんを叱れば、あの殺人鬼が死んで下さるのかしら？」

「……そうですね、ごもつともで」

僕は昨日あった出来事　あの戦闘狂と対峙した時の事を、洩らす事なく報告していた。

依頼されていたからには、それなりに責任感というものが僕にもあったのだが　こんな返しをされるとは。

「はい。さて、一応あなたが得た情報は聞いておきましょう。会話をしたっていう事は、相手の姿もちゃんと見たのですわよね？」

「見たけど、それが？」

実際は暗がりで繊細には見えなかったけれど、特徴やら服装をこの眼に焼き付けているのは事実だ。

「ええ、一応これだけは確認しておきたくて。その殺人鬼、性別はどちらでしたか？」

「……え？」

「ですから、その殺人鬼の性別を聞いているのですわ。わたくし、

一度だけ対峙した事があるのですが、相手の姿や声は正確に確認できませんでしたから。それはもう、逃げるのに必死で。ですから気になっていたのです。わたくしが得ている情報は、あくまで名前とその能力について　　だけでしたから」

名前。

あの戦闘狂の名前、そういえば聞いていないけど　　知っているのだろうか。

「そうだね。それじゃあ、そいつの名前を教えてくださいるなら、答えてもいいよ」

「……この期に及んで、別の取り引きをしようとしても？」

今まで見た事がないくらい、鋭い眼光で僕を睨みつける百瀬百合花。

「じよ、冗談だって。取り引きとかそんなつもりはまったくないから。っていうか、別に名前くらい教えてくれたつていいんじゃない」

「まあ、それもそうですね。殺人鬼の名前は久峰零次くほうれいじと言います。永久の久に、峰不二子の峰。数字の零ゼロに、次。ですわ」

「……何かひとつヘンというかマニアなの混じってなかった？」

「気のせいですわ」

「まあ、いいけど。久峰零次、か　　」

「それで？」

「ああ、うん。女性だったよ」

「そうでしたか。なるほど……、そういう事ですの」

「とは言っても、実際少し見たただけなんで何とも言えないよ。まあ胸元が結構膨らんでいたのと、顔付きや声色からそう判断したただけで」

「いえ、十分ですわ。ありがとうございます」

「そうですか。で、これから僕はどうすれば？　その久峰さんは何だか僕みたいなのじゃ相手にならないらしいけど。……というか、正直僕だけじゃ彼女に勝てるとは思えないな。何度か能力を食らいそっになっただけ　　なんなのさ、あれは？」

正確には二回。

どれも僕自身が受けてはいないが、相手が能力を行使すると、僕の近くの物がひとりでに動いたり、宙に浮いたり　拳句の果てにぺしゃんこである。

僕のものとはまったく違う種類の能力　その正体が、いまいち掴めない。

「対象に触れないであれだけの芸当が出来るんだ。お手上げだよ、敵わないってあんなの」

触れる事なく対象に物理的な力を行使する事が出来る能力、僕はそう見ている。

物を動かし、潰す　あんな力が人間に向けられたら一体どうなるのか、想像もしたくない。

「確か、殺人鬼は『殺したいなら本気で殺しに来い』と言ったのですわよね？」

「うん。本気で、っていうのは多分、殺すって言う明確な意思を持っていないといけないんだと思う。僕は正直、久峰零次に対して個人的な殺意があるわけじゃないから」

「そうですか。……ですが、それは本当なのかしら？　わたくしが対峙した時、わたくしはまったく殺意の欠片もありませんでしたけれど。別に個人的な恨みがあるわけでもありませんし」

「はい？　それじゃ、どうして僕にこんな依頼を？」

「ええ、あくまでその時は　ですから。一度受けた屈辱は、倍にして返してあげなければ気が済みませんもの」

ようするに一度襲われたからやり返してやる、っていうだけの理由なのか。

なんだかこの人、見かけは大人ぶってるけど　中身は結構、子供なのかも知れない。

「しかし、気が変わりました。女性だと言うのでしたら良いでしょう。それならば、殺してしまう必要ありません」

「必要がない……それは、女だからってだけで？」

「ええ。わたくしは何も一人で行動しているわけではありません。

それはあなたをこうして使っている事からも明白だとは思いますが

…… 実際、他に数人の仲間がいますわ。それも全員が能力者であり

」

「まさか、全員が女だと？」

「その通りですわ」

……、なるほど。

つまり、能力者でありながら同性の仲間をかき集めているってわけか。

どうして同性でなければいけないのかは この際、置いておこう。

「焰さん」

「は、はい？ 为什么呢？」

「一度、前に申し上げているとは思いますが」

「はあ」

「わたくし、あなたの事を愛していますわ」

「それは……、どうも」

「正直、あなた以上の人間はこの世にいないと断言できますもの。それぐらい、わたくしはあなたを溺愛しているのですわ。それは、分かっていただけますかしら？」

そう、以前 この百瀬百合花と初めて会った時、僕はいきなり衝撃的な愛の告白を受けていた。

実際彼女と会ったのはそれが初めての事で、僕はまったく名前すら知らない相手だったから というか、それ以前の問題でもあるけれど 返事は断らせて貰ったのだが、それからというもの、凄いい勢いで付きまとわれている気がする。

それに今更こうして再確認されても、僕としては返答に困るとしか言いようがない。

「ですから、そんなわたくしが危険にさらされようとしていれば、もちろん助けて下さいますわよね？」

「理屈が理解できないけど、まあ……善処します」

「ええ、それでいいのです。それでは今晚、少し付き合っていただけますかしら？」

「今晚……と、いうと？」

「あら。別にえつちな方面のお話ではありませんわよ？」

「前振りからしてそっちに結び付けられるほど性欲に飢えてないんで大丈夫です」

「そうですか。残念ですわ」

どこまで本気なんだ、この人。

「では、そろそろ本題に入りますわ。今晚、その女に会います」

「会う……って、まさか」

「いいえ、戦うわけではありません。仲間に引き入れる為に会うのですわ」

僕 紅条焰の通っている学園は、他には見ない少し風変わりな女子高である。

棘薔薇女学園ひばのばいこ 設立者のセンスを疑いたくなるような名前を持ったその場所には、無駄に広大な敷地 その左半分に校舎、右半分に生徒専用の宿舎があり、正門からまっすぐ伸びた中央にある巨大な噴水が、綺麗に輝く水しぶきを上げている それが、言ってみれば他の学園にはないような、この学園だけの特徴と言えた。

一応なりとも女の身である僕としては、こういった学園生活も慣れてしまえばとりわけ平凡であるべきだと思っているのだが どうも最近、おかしい先輩に付きまとわれるようになってから、僕の日常はすっかり普通ではなくなってしまった。

ただ女の子では体験する事の出来ないような事を、僕は繰り返して経験してしまった。

それも、一度ならず 昨夜の事を含め、これで二度目である。

いい加減まともな生活に戻りたいとは思うのだが、ここまで来てしまふとそう簡単に戻れるとも思えなくなってしまう。

知らなかった世界に足を踏み入れた代償。

普通である事を世間から拒絶された、一人の人間が行き着く結末とでも言うのだろうか。

「うーい、ほむりゃんお待たせー！ 待ったかなー？」

唐突に背後から響く、甲高い少女の声。

聴き慣れたその声　僕にとってそれが誰のものかだなんて、振り返ってその姿を確認するまでもなく分かる。

「遅い。十分以上の遅刻だね、香奈。面倒だからすっぱかして先に寮へ帰ろうかと思っていたところだよ」

しぶやかな
渋谷香奈。

背中辺りまで伸びているであろう茶色の髪を、赤リボンでくくったツインテールに仕上げている。

いつ見ても代わり映えのない、幼さの残った可愛らしい顔付き　顔だけではなく、その身体も同年代にしては小さめであり、僕と並ぶとその背の低さが分かる。

学園指定の制服も、僕のサイズはMなのだが　彼女のものはSサイズである。

いつもは馬鹿みたいに人懐っこい小動物的なイメージがあるのだが、その実、中身はとんでもなくえげつない　主に、学力的な意味で。

彼女と僕の間柄を簡潔に説明するならば、僕にとってのたった一人の理解者、とでも言うべきだろうか。

「あつは、ごめんよー。お詫びにちゅーしてあげるから、許してくんにゃい？」

香奈はいつもの場所　噴水の左隣に設置されている木製のベンチ前まで駆け寄ってくると、座って待っていた僕に対し、これまたいつも通りのふざけた冗談（だと思っ）を挨拶代わりにやってきた。中央広場の噴水場、それが僕と香奈の放課後の待ち合わせ場所

ある。

基本的に、この学園は同学年の場合だと授業終了時刻は変わらず、学年ごとに変わるのだが　僕と香奈は同じ二年であり、お互い部活に入っているわけでもないの、いつもこうして待ち合わせて一緒に宿舎へと帰っている。

「へえ、それは良いね。ならこの広場のど真ん中、噴水の上に立ってお互いに向き合いながらの熱いキスシーンがご要望ですよ、僕は」「うっわそっ、それじゃ皆に観られるよー！　どーせならホラ、裏庭でこっそりとかそういうシチュエーションがあたし的には好みかなー？」

「こらこら、勘違いしちゃ駄目だよ。観られるからこそ良いんじゃないか。香奈はきつとマゾだからさ、そっちのほうが興奮すると思うよ？」

「むむ……。オッケーいいよ、ほむりゃん。やろっ、やりまろうっ」

「やらないよ！　こんなのどっからどう見たってかかってるだけだろ！　香奈もそれぐらい気付こうよ！」

「だってあたしマゾだしー？」

「え、そこ肯定？　適当に言ったのに当たったの僕？　っていうかまがりなりにも僕達は女同士なんだから、そういうのは出来ません！」

「別にほむりゃんならいいんじゃない？」

「……それ、本気で言ってるなら今日は僕一人で帰るよ」

「あう、すいません焰サマ！　すぐく……。冗談です……。許して下さいー」

何をそんなに必死になる必要があるのか、泣きそうになりながら僕にしがみついてくる渋谷香奈（十六歳）。

そういうのもこんな場所でやられちゃうとほら、人目とかね？

「はいはい、分かったから。遅刻してきたの怒ってるわけじゃないから。いつもみたいに一緒に帰ってあげるから」

「うわあ、怒ってんじやーん！ 許してよー、今日は大事な用事があつたのー」

「大事な用事？ え、なにそれ。もしかして……男絡み？」

「……ちよつと見てくださーい皆さーん、まだあたし何も言つてないのにほむりやんの顔面がすんごい事になってますよー」

「僕そんな顔してるかな？ 別に男の一人や二人くらいどうでもいいんだけど、そんなにおかしいかな？ あれ、でも香奈が学業関連で用事があるようにも見えないんだけどな？」

「うわーん、ないないないなあーいつ！ 男とかいましえんからあ！ いつでもあたしはほむりやんしか見えてないからあ、好き好き大好きだからーっ！」

「あ、いやあの……香奈、別にそこまで言わなくてもいいよ……」
これなんて コンビだよ。

そろそろ悪ふざけも自重しないと、拙い噂がこの広大な敷地内を一日足らずで駆け回ってしまうかも知れない。

僕と香奈の仲の良さは、自分で言うのも変だが、かなりの教師生徒に一部内容を大げさにして知れ渡っている事実だ。それだけでも怪しまれているつてのに、このままじゃ一気に僕の株が大暴落である。

いくら女子しかない学園生活だからといって、性欲をもてあました一人の女生徒が同性愛に手を出しました。なんてのは、話題性で言えば最高に盛り上がるだろうが、冗談としては僕にとって最悪な部類の噂だ。

絶対に、それだけは断固として阻止するべきである。

「とにかく落ち着こうよ、香奈。第一、こんな生活をしている僕らが男絡みで用事だなんて有り得ないよ。まだ部活の勧誘とか委員会の雑用とか掃除当番を押し付けられたとか教師の愚痴に長時間付き合ってたとか。そっちの方が、現実味があるってものだよ」

「だよねえ、そうだよねえー？ 実は生徒会長の百瀬先輩にさー、委員会に薦められたのだよー」

「ぶツツッ!？」

「ほえ? どうかした、ほむりゃん？」

「い、いや……なんでも、ないよ……」

生徒会長の百瀬って あのを考えているのか分からない、美人のくせに地味でメガネでもつたない上、同性愛者疑惑まである百瀬百合花ではないか。

(そういえば、彼女って生徒会長だったんだっけ……)

しかし、あの百瀬百合花が香奈を委員会に薦めるだなんて、一体どういう事だろう。

学力や人脈が優秀な香奈を早めに手の内にしておきたい、とかそんな理由だろうか 人を使うのが巧いというか好きそうだからな、あの人。

「それで? 薦められてそのままホイホイ付いてっちゃったわけ、香奈は」

「そつ、そんな事はないよー。ほむりゃんとのこうした日課が崩れちゃうのが一番の苦痛なのです、香奈ちゃんは。一緒に帰って一緒に晩ご飯食べて一緒にお風呂入ってまた明日ってしないと、あたしは死んじゃうのー」

「それはちよつと、いくらなんでもオーバーだよ……」

「そうかにゃ? ま、そーゆーわけで誘いはお断りしましたー。さすがにすっぱり切っちゃうのもかわいそうだったので、休み時間とか空いてる時間は手伝いとかするって言う話にはなっただけだねー」

「へえ、香奈にしちゃ珍しい。僕と同じで、香奈もそういうのって好きじゃないだろ? 部活も入りたがらないしさ」

「ある意味、それがあたしにとつての譲歩でもあったわけなのです。なんてったってあの先輩、色々すごかったからさー。なんてゆーの、威圧感とか?」

「ま、分からなくもないけどね……。あの人の考えてる事なんて僕にはまるで理解出来ないし」

「あれれ、ほむりゃん。もしかして百瀬先輩と面識あったりするのかなー？」

まずい、うつかり言わなくても良い事を口にしてしまった。

「あ、あー……うん。まあね、なんていうか……ちよっと、色々ありまして」

「ふむうー？　なんだか怪しいなー、怪しいぞー。色々って何が色々あったのかなー、香奈ちゃん気になってまいりましたよー？」

さっきの仕返しのつもりだろうか、今度は香奈が詰め寄るようにつつかかってきた。

まさか正直に『先輩に愛の告白されちゃいました』なんてぶつちやけるわけにもいかないだろうし　くそ、どうしたものか。

「うつわ、顔赤くなってるよほむりゃんってば！　ま、まま、まさかこれはウワサの禁断の愛が生まれました的な展開の予感……？」

「えっ？　な……なっ、なんでそんな事わかるんだよ！」

「あれー、図星ー？　これはショックだよあたし、大分きたよ相当きつついよー？　まさかこの香奈ちゃんを置いてそんな事になってたなんて……酷い、酷いよほむりゃん！」

いつの間にか攻守逆転である。

おかしい、今日は調子が悪いのかも知れない。

「とりあえず落ち着こう、香奈。まずは僕の話をして」

「あら、こんな所で何をされていますのかしら。大事な用事つてもしかしてこの事ですの、渋谷さん？　それに奇遇ですわね、焰さん」
なんとか香奈に弁解をしようとしたその時、ふと左隣から声がした。

ナイスタイミングで　いや、僕にとっては正直バッドタイミングだと言いたいようがないけれど　やってきた一人の女生徒、百瀬百合花がそこにいた。

噂をすればなんとやら、なんてのはただの迷信ではなかったらしい。

「も、百瀬百合花……」

「なんですよ、焰さん。いきなりフルネームで呼び捨てにしないで下さいな」

「せつ、先輩っ！ これはその、あのー」

「別に言い訳は結構ですわよ、渋谷さん。前々からあなた方が共に登下校を行っている事ぐらいいは周知の事実ですし、こういう事も想定範囲内ですわ。今更それを目撃されたからといって、まさかわたくしが知らないとも思っていましたの？」

いきなり現れ、いきなり絡んできた百瀬百合花のターンが始まった。

「こちらの誘いを断られる事も予想済みです。大事な用件だとまで言うものですから、つきり別件だろうとも考えましたが いえ、もういいでしょう。それよりも、今はこうして偶然居合わせた幸運を祈るべきですわね」

こうまで言われると本当に偶然なのか、狙ってこの場に居合わせたのではないかとまで疑えてくるが そこまで僕も詮索は出来ないし、する必要もない。

どちらかといえばこの機会を利用して、先程の話をうやむやにするチャンス それを利用すべきだろう。

「で、お話を元に戻しますけれど。あなた達、こんな広場のど真ん中で何をしてらしたのかしら？」

「ああ、それは」

「単刀直入に聴きます先輩。先輩は、ほむりゃん……あ、いや、この紅条焰さんの事をどう思っていますかっ？」

「ちよっ、ばか、香奈それは」

「なるほど……それは確かに率直な質問ですわね。ううん、こんな広い場所でこのような事を堂々と公言してしまっても良いものか少し悩みますが……。ええ、別にいいでしょう。これもまた運命です。ここで高らかにひとつ宣言してみるのもまた一興、ですわね」

僕の必死の抵抗も空しく、二人の少女 渋谷香奈と百瀬百合花は、まるで対立する龍虎のように向かい合って、

「わたくし、先日、こちらの焰さんに愛の告白をしました」

胸に手を当てながら、百瀬百合花は誇らしげに高らかと宣言した。

(うわ、マジで言っちゃったよ……)

「……へーえ、そうなんですか。あれ？ まさか本当だったとは思わなかったかな。ねえどう言う事なのかにやー、ほむりゃん？」

「え、いや別に僕はその」

「あら、ご安心して下さい渋谷さん。その件でしたらわたくし、ものの見事に撃沈しましたので。それはもう、数秒とかからずに即答で」

「即答……？ ほむりゃん、それもどうかと思うよー？ まさか相手が本気だと思わなかったんじゃないよねー？」

「だからあの、まず前提からおかしいわけで」

「ですが、別に諦めたわけではありません。こう見えてわたくし、根はしつこい方ですから。さっぱりすつきり断られた後の今現在でも、この世に焰さん以上の人は居ないと、わたくし断言できますわ」
「ほーう。だってさー、ほむりゃん。羨ましいなー、羨ましいよー。あたしはそんなほむりゃんが羨ましくて仕方がないねー」

もう嫌だ、そろそろ本気で疲れてきた この二人に関しては、真剣に口走っているとは思えないから余計に疲れてしまう。

「ま、いいや。悪ふざけはこの辺にしよう。それよりも、百瀬先輩。さっき、この世にほむりゃん以上の人はいない、とか言いましてよねー？」

ふと、急に真面目な声色になった香奈が、正面に立ちすくむ百瀬百合花に対してそう言い放った。

「ええ、確かに言いましたけれど。それが、なにか？」

「いえー、別にどうって事じゃないんですけどねー。他人の気持ちを探るなんてのは最低のする事だしー。でもね、これだけは聴かせておいて下さい先輩。それは紅条焰の全てを知った上で、本気で言っているんですか？」

「ふふ……なるほど。さすがは焰さんの唯一無二の親友、と言った

ところですかしら。そうですね……その質問に対しては、あえて答えない事にしましょう。あくまで、今は」

なんだろう、この空気　さっきまでとは一転して、なんだか凄く重苦しい　って言うか、もしかしてこれ僕が原因ですか？

「ま、まあ二人とも。とりあえず僕はね、今はそういうの無しだから。うん、そんなわけでそろそろ宿舎に戻　」

「あー、なるなる。なんとなく解りましたよ先輩。あの時にこのあたしを勧誘したのは、そういう意味があったからなんですかー？」

「あら、別にそんなつもりはありませんわ。ただ本当に、あなたの手を借りたいと純粹に思っただけの事ですから。それにわたくし、そこまで姑息な手段を取るような人間ではありません」

まったく聞いてないよ、この二人。

香奈、百瀬先輩の両名をなんとか宥^{なだ}めて宿舎へと帰宅してきた僕は、宿舎内にある食堂で夕食を済ませ、そのまま二人と別れて自分の部屋へと向かっていた。

この宿舎は部屋のひとつひとつが狭い代わりに、生徒一人につき一つの部屋を与えられる　とは言っても食堂の他にも大浴場や大広間など、生徒達は基本的にそういったスペースでくつろいでいる事が多く、言ってしまうえば自分の部屋なんてものは私物を管理する倉庫であり、後は一人で勉強するかテレビ見るか寝るか、それだけの為にある場所と言っても過言ではない。

コンクリートで出来た棘薔薇女学園の校舎とは打って変わり、この生徒用宿舎はどこか田舎にでもありそうな和風の旅館のような作りをしていて、僕はこの宿舎がいたくお気に入りだったりする。

学園に通う生徒のほぼ全ては、基本的にこの宿舎で寝泊りするのがこの棘薔薇女学園における原則なのだが、まれに外から通学してやってくる生徒も少数ながらいるらしい。

だが　それも本当にごく僅かで、ほとんどの生徒達はこの宿舎で暮らしている。

そんな事もあって、この学園は他の学校とは比べ物にならないくらい、生徒間の仲が良い　稀に不良みたいな子達もいるが、そういうのは別でグループを組んでいて、普段は互いに干渉しないし、僕も一部を除いて彼女らとはあまり面識がない。

そう言った関わりの少ない者達を除き、こうして一人で廊下を歩いているだけでも、数多くの生徒が声をかけてくる。

「あら、紅条さんじゃない」

「ん？　ああ、こんばんは。船橋さん」

「聴いたわよ、今日広場で取り合いされたんですって？　羨ましいわね、モテる人は。でも、女の子にモテる女の子って何なのかしら。カリスマ、とか言うやつ？」

「……えつとさ、その噂つてもう大分広まっちゃってたりするのかな」

「そうねー、多分この階のみんなはもう知ってるんじゃない？」

「うわ……。くそ、最悪だ……」

「わわっ、生徒会長とロリートに大人気の紅条焰がいますっ！」

「こ、今度は一之瀬さんか。後ろからいきなり大声出さないでよ、驚いた」

「おお、紅条。百瀬先輩と渋谷に取り合いされたんだって？」

「佐久間さんまで、ちよつと止めてってそういうの……。ほんと、何もないんだから」

次々と現れる三人の少女達　彼女達は通称・三姉妹と呼ばれる

三人組で、僕と同じ二年生である。

一人目　ふなはしゆかり　船橋由香利。

金髪ロングに黒のカチューシャを着用、三姉妹のリーダー的存在であり、いつも会ったびに上から目線でものを話してくる少女。

二人目　いちのせあかり　一之瀬灯。

桃色がかったショートカットと左右に飾られた細長い赤リボン、

三姉妹の三女的存在で、僕の事を一度たりともフルネーム以外で読んだ事がない、おかしな敬語口調で喋る少女。

三人目　佐久間飛花里。さくまひかり

青髪のポニーテールにすらりと伸びた体躯、三姉妹の第三者的というか傍観者的存在であり、女の子とは思えないような男らしい態度や言動をする少女。

どうして彼女達が三姉妹なのかというと、いつも三人でつるんでいるからと言うだけで、苗字の違いを見れば解るように本当の姉妹と言うわけではない。

名前がそこはかとなく似ているけれど、まったく関係ないのでご了承ください承。

ちなみに生徒会長「百瀬百合花なのは解りきつていてとして、ロリートっていうのはあの渋谷香奈の事だ　見た目がロリータで中身がエリートだから合わせてロリート、なんてあだ名で呼ばれている。

もつとも、そんな呼び方をする知り合いの生徒達は少ないのだが

一之瀬さんが命名して以来、少なからず周りの人間も真似をして使い始めた印象がある。

「ふーん？　そんな事はないって、もしかして紅条さん……二人とも蹴ったわけ？」

「蹴った、ってそれはまた悪い言い方を……だからさ、皆はまず前提つてものを　」

「わー、酷いです紅条焰！　女の子の気持ちをなんだと思ってるんですか！」

「あのね、一応これでも僕だって女なんだけど　」

「……紅条。君の気持ちも解らなくはないが、乙女の心と言うものは実に純粹で壊れやすく脆いものだ。それを何の考えなしに蹴り崩してしまったと言うのは、少し感心しないぞ」

「ええい、佐久間さんだって何も解ってないじゃないか……！　まづ僕が女性だという事と、あの二人も同性だっていう事を考慮して

「
ようするに、今日の僕は調子が悪いという事でひとつ。」

僕は、あの三姉妹をどうにか言い聞かせて 本当に納得したのかはさておき 今度こそ自分の部屋へと戻って来ていた。

四畳半程度のワンルームに近い広さの部屋、そのドアの鍵を開けて中へ入ると、畳の上にある布団の上にひとり座りながら、こちらを向いている少女の姿を確認した。

「ふう、ただいま。麗華ちゃん、ちゃんとご飯は食べた？」

くほうれいか
久峰麗華。

枝毛ひとつ見せないすらりと伸びた綺麗な黒髪、他に見ないほどの白い肌は脆く今にもひび割れてしまいそうな卵の殻のようだ。

服装はこの学園の敷地内では滅多に見られないような黒いレースの付いたドレスを纏い、場違いなほどに優雅なイメージを連想させるような落ち着きを持った少女。

年齢は推定だが、恐らく十二、三くらいだろう。

今日の昼休み 百瀬百合花との会合で得た情報、あの戦闘狂の『久峰』という苗字。

こんな偶然なんて本当にあるのか、と現実を疑ってしまうが

「……ご飯は全部食べた。そこに洗った食器、置いてる……」

「そっか、偉いね。この部屋からは一步も出てない？」

「……うん。言われた通りにしてる……」

この物静かな彼女がどうしてここに居るのか、一言で現すと拾ったのである。

それも学園の敷地内、この宿舍のすぐ近くで、だ。

名前は彼女の持っていた携帯を見て把握した と言っても携帯の電池は切れていて、裏側に張られた白いシールの上に書かれた名前を見たのだけだ。

「よし、いい子だ。実は今夜も少し用事があつて部屋を出なくちゃいけないんだけど、ちゃんとここで静かに寝ていられる？」

「……大丈夫。迷惑は、かけないから……」

宿舎近くで倒れていた彼女を拾い、部屋にかくまったのは良いのだが　ここからが問題だった。

「それで……何か、思い出せた事はない？」

彼女　久峰麗華は、記憶喪失だった。

「……ごめんなさい、なにも……」

「いいよ、気にしないで。麗華ちゃんはどこでゆっくり思い出せばいいんだから、ね」

「……ありがとう……」

普通なら、記憶喪失の女の子を拾ったなんて時点で警察やら救急車でも呼ぶべきなのだろうけれど　目を覚ました彼女は一言、僕にこう言った。

『……お願い、助けて……』　と。

彼女を拾ったその日からすでに三日が経っている。

傷も塞がってきているし、疲労も恐らく回復しただろう。

あとは彼女の記憶さえ戻れば、何事もなく彼女を元の生活に帰す事が出来る　そう思っていたけれど、どうやらその時を待つ事もなく事態は解決しそうだった。

何にせよ、これで僕にもあの戦闘狂と会って話す理由が出来たって事だ。

今夜　あの戦闘狂との、二度目の邂逅。

それが恐らく全ての起点になるだろうと言う事を、僕は薄々と勘付き始めていた。

久峰零次は、夜の街を一人孤独に彷徨っていた。

人気のない静かな川沿いの砂利道を、どこか辛そうな表情を浮かべながら、よろよると右肩を左手で押さえながら歩いている。

「ちくしょう、あんの野郎……。一体どこに目を付けてやがるんだ、クソッ！」

その右肩から肘にかけてまっすぐに伸びる赤い筋　ぼたり、と地面に落ちたそれは、真正正銘の血だった。

久峰零次は、とある能力者との戦闘で負傷してしまったのである。この街に住む能力者ならば、ほとんどが知っている『殺人鬼』と呼ばれる能力者、それが久峰零次であり　その呼び名通り、零次はこの街に住む能力者達と片っ端からの殺し合いをしている。

その圧倒的な力の前に、ほとんどの能力者は敗北し殺されるか、運良く逃げ出すかのどちらかだと言っても過言ではないのだが　今日、ついに久峰零次が敗北した。

相手はあまり名も姿も知られていない程度の駆け出し能力者だが、その強さは、零次が今まで出会ってきたそれらどれよりも格段と言えた。

（背後から、確実に気配を隠して近付いたはずだ。だって言うのにアイツ、振り向きもせずにくっちに気付きやがった。しかも、それだけじゃねえ　何なんだ、あの能力は？）

ぼたぼたと落ち続ける血液を、零次は力を込めて左手で止血し続ける。

だが、ここまでやってくるまでもうかなりの時間が過ぎていた　このままでは出血多量で倒れてしまってもおかしくはない。

（……チツ、柄にもなく妹の仇だなんて粹がるからこのザマだ。死んだ人間の敵討ちだなんて、オレはいつの間に正義の味方風情に成り下がっちゃったんだ）

久峰零次には、一人の妹がいた。

その名を、久峰麗華と言う。

今年で十九になる零次とは六歳も離れた十三歳の少女　まだ中学に入ったばかりで友達さえ少ない妹が、つい三日前に殺されてし

まった。

殺された　とはいっても、零次自身が殺害現場を目撃したわけでもなし、死体を確認だってしちやいない。

だが、零次は確かに聴いた。

携帯電話越しに聴こえる、妹の声を。

『助けて』という、麗華のただ一言の叫びを　聴いた。

通話が切れてからは何度かけても繋がらず、最終的には電池切れになったのだろう　電波が届かない云々の機械音声うんぬんが流れるだけだった。

久峰零次が生粋の超能力者であるように、妹の麗華もまた、しない超能力者だった。

零次がこの街で暴れているという噂はすでに町中に浸透していたし、その妹が見せしめに狙われるなんてのは、決して珍しくはないケースだ。

むしろ、力では敵わない零次に対する牽制として、その妹を狙った　と、考えれば筋は通る。

その妹が生きてさえいれば、だが。

あれから三日経った今でも、妹から何の連絡さえない　三日間の音信不通　それは、あまりにも残酷な現実を零次に突きつける。
（……あいつ、笑っていやがった。やってないとは言っていたが…
…あの顔は、このオレと同じ　殺しを楽しんでいるものの顔だ。
今日は上手く逃げたが、明日……今度こそ、ケリを付け　）

久峰零次は、夜の街をその鋭い眼光で睨みつけながら　最後の力を失い、その場に倒れ込んだ。

棘薔薇女学園、その生徒達が一堂に会して暮らしているこの宿舎には、和風な作りの建物にピッタリ天然温泉がある。

建物の一階、その五分の一くらいのスペースを使用した大浴場は、

昼夜問わず宿舎で暮らす少女達にとって憩いの場となっていた。

「うわっ、なんなのこの巨乳パラダイスはー？ あたしの居場所がまるでないよ！」

通称ロリート 渋谷香奈が、真っ先に浴場を見回した感想がそれだった。

「いちいち毎度のごとく叫ばないでよ、香奈……。一応屋外なんだから、ヘンなとこまで聴こえちゃうかも知れないし」

僕 紅条焰は、友人の香奈と偶然居合わせた三姉妹に連れられて、夜の大浴場まで足を運んでいた。

さすがはロリートと言うべきか、ないところは問答無用で皆無である。

仰向けに寝かせて横から見れば、恐らくそこには水平線が見える事だろう。

「……ま、かく言うこの僕もつるぺた同盟の一員なわけだ」

「おー、つるぺた同盟！ いいねー、なんだかあたしの居場所が出来たみたいで心地が良いねー。どうせならこのあたしが入浴する時間帯はつるぺた同盟のメンバーのみしか入れない事にしちゃおうかー？」

「出来るものならどうぞ。僕としちゃ、別に胸が大きkarうが小さkarうが、どちらも同じようなもんだと思うけど。ってか、無いほうが楽そうじゃない？ いちいち重いものを付けて歩くのって、凄く邪魔くさい気がするんだけど」

「なんというポジティブ思考……。ほむりゃんは間違いなく女じゃないねー」

「悪かったね、僕だってこれでも気をつけてはいるつもりなんだよ」
「ん？ あ、いやいや。別に香奈ちゃんはそのという意味で言っただけじゃないんだよー？」

二人、真っ裸で浴場のど真ん中に立ちつつ、他人から見れば何を話しているのか意味が解らないようなトークを繰り返しているうちに、一緒に来ていた三姉妹もようやく浴場へと姿を現した。

「あら。今日も見事なお子様っぷりね、渋谷さん？」

ゆっさゆっさとナイスボディを白いタオル越しにちらつかせながら、三姉妹リーダー・船橋由香利が香奈目掛けて先制攻撃を仕掛ける。

いつもの事だが、何の脈絡もなくケンカを売つてるとしか思えないぐらいの発言をよく出来るものだ　と、少し呆れを通り越して感心さえしてしまった。

「むむむ、貴様は入ってくるな！。あたしと一緒に入っていいのはあくまでつるぺた同盟団員だけなの！」

「あら、胸が無いと女としてどんな得があるの？　言つては悪いけれど、大きいに越したことはないのよ、胸なんて」

ほらほら、と胸元を反らしながら、無駄にアピールを繰り返す船橋由香利。

その度に口惜しそうな表情で、その揺れる果実を睨みつける渋谷香奈。

「ああーっ、紅条焰！　いくら女子だけの場だからといって、仁王立ちで素肌を晒すだなんて唯我独尊にも程があるのです、不潔ですっ！　うあ、そのロリートもまったく同じ格好じゃないですか！　これは酷いです、見るに耐えない光景ですっ！」

次に一之瀬灯の登場である。

僕の姿を見つけるなり、いきなりフルネームで名指したのはどうなんだろう。

「別に、見られて困るものは付けてないつもりだけど？」

「な、ななな……！　付けていない、とはどういう意味ですか！

貴女はそれでも女の子ですか、この性犯罪者っ！」

「……うん、ごめん。今すぐ聞き捨てならない言葉が聞こえた気がする。えっと、何だっけ。僕が、一体何だつて……？」

「ひ……！　食べられちゃいます！　灯、食べられちゃうーっ！」

「くそ、どうして僕はいつもそっち方面のネタに持っていかれるんだ。この、待てっ！」

バスタオル一枚の小さな 香奈ほどではないが、なかなか幼さが残っている 少女を、真っ裸で追いかける僕。

あれ、もしかして結構ヤバイですか？

「おいおい、騒ぐのも控えめにしておきなよ。ここは共有の場なんだから」

最後の一人、佐久間飛花里さんがやってきた。

彼女は長い青髪を下ろしていて、いつものポニーテール姿とは違って変わった印象を受ける。

もちろんバスタオル は、何故か見当たらなかった。

「あああああッ！ 飛花里、飛花里がバスタオルを付けてないですーっ！」

「ん？ ああ、遠目で見てたらなんだか面白そうだったんで、つい」

「……佐久間さん」

「おお、なんだ？」

「バスタオル無着用の僕が言うのもなんですが、そのスタイルでタオル無しは、ちょっと」

「拙いのか？」

不思議そうに首を傾げるその彼女は、鼻屑目に見てもまさか十代だとは思えない程のプロポーションをしていた。

その高くスラリと伸びた身長にぴたりと合う流麗なスタイルは、いくら同性とはいえ誰でも顔を真っ赤にしてしまいかねない代物である。

それをバスタオル無しで堂々とされてしまつては、皆が皆、目のやり場に困ってしまうに違いなかった。

「マズいっていうか、その。そういうのは、僕や香奈だからこそ出来る技というか。佐久間さんがやっちゃうと、裏技の域っていうか」「私としてはなかなか気に入っていたんだが……、たまにはこういうのも悪くはないだろう？ まあ……しかし、確かにこのままだと灯がうるさいからな。素直にいつも通りにしようか」

佐久間さんは真面目な表情で頷き、呟きながら脱衣場まで戻って

いった。

（あー、危なかった。佐久間さんみたいな核弾頭クラスの人があんな行動に出ちゃったら、いくらみんな女だからって目のやり場に困るって……）

僕としては、そもそも恥じらい云々の前に、僕自身の自覚の問題なんだけれど。

「おっと。おや、この時間帯に来られるとは珍しい」

ふと、脱衣場の方から佐久間さんの声が聴こえてきた。

「ええ、少し気が向いたもので。それより、中が何だか騒がしいようです」

（……まさか、この展開は）

「ああ、うちの身内が少し。あいつらはこの私でもそう簡単には鎮められませんので、好まれないのであれば、時間を改めたほうがいいと思いますよ。百瀬先輩」

ぺたん、と、誰かが浴場の石床を踏む音が響き渡った。

「構いませんわ。今日は少し用事もありますから」

（うわ、やっぱり……ッ！）

バスタオルを着用し直して浴場に戻ってきた佐久間飛花里の隣にいたのは、一年先輩で生徒会長、ついでに現在進行形でストーカー疑惑のある百瀬百合花その人だった。

ピンクのバスタオルを胸元に巻いたそれだけの格好で、堂々と腰に手を当てるその場に立っている。

恐らく大浴場にいる誰もが、生徒会長の登場に驚き、目を向けていた事だろう。

だが 彼女の視線は他の誰でもなく、この僕へと向けられていた。

「……あ、どうも偶然で」

「ああんっ、焰さん！」

「うわぁ！ な、何なんだよもうっ！」

僕が返事をする、と、百瀬百合花はこちらへ向かって駆け出した。

ここが浴場である事など、まったく気にしていないと言わんばかりの猛ダッシュで。

「これで今日は三度目ですわね。なんと云う幸運……わたくしは嬉しいですわ、焰さん」

「は、はあ」

僕が地面に尻餅を付いた状態で彼女を見上げていると、百瀬百合花は僕を見下ろしながら気持ち悪いくらいに笑みを浮かべた。

よく見れば、いつもつけている眼鏡がなく、髪も三つ編みではなく頭の後ろで丸めて止めている。

普段見ない彼女の素顔を真正面から見みると、やっぱりというか、かなりの美人だった。もったいない、という僕の得た第一印象は間違っていないかったわけである。

「それにしても、焰さん？」

「……はい、なんででしょう」

「わたくしとしましては、そのような格好ですと誘われているようにしか思えないのですが、そのまま解釈してしまってもよろしいですかしら？」

「へ？」

そこまで言われて、ようやく僕は今の自分がどんな状態なのかを把握した。

「うわ、うわあ！僕は別にそういうつもりじゃ」

「……ほむりゃん。まさかこんな大衆の目の前で堂々とー？」

船橋由香利との言い争いに負けたのか、口惜しそうな顔をして現れた香奈が僕の大胆不敵ポーズを眺めながら呟いた。

「へえ、紅条さんってやつぱりそっちの……」

「わわあ、紅条焰！なんですかその全力開脚モードはーっ！」

香奈に続くように、隣に立つ船橋由香利と一之瀬灯が、それぞれ神妙な向きで僕を注視する。

「いやあの、だからこれはですね」

「ああっ、焰さん！」

がばあっ！ と、百瀬百合花が僕目掛けてダイヴを敢行 この体制では避けきれず、僕は仕方なくそれを両手で受け止める。

瞬間 おおーっ、と言う観客の歓声が沸いた。

「ナイスキャッチですわ、焰さん」

何なんだよ、もう。

大浴場の温泉は、宿舎建設当時に偶然この地に湧き出たと言われている、真正正銘の天然ものである。

突然の百瀬百合花の登場によるハプニングもなんとか落ち着き、僕はその百瀬百合花と二人、夜空の下で湯に浸かっていた。

「相変わらず最高ですわね、ここの温泉は」

まるで天国にでもいるのかと思えるくらい心地良さそうな声色で、隣で湯船に浸かりながら夜空を見上げている百瀬百合花がそう言った。

「……どうでもいいんだけど、もうかれこれ三十分は浸かりっぱなしだよ。そろそろ出ないと、僕も百瀬先輩ものぼせちゃうと思うんだけど」

「百合花、ですわ」

「……はあ。名前なら知ってますけど？」

「くだいですわよ、焰さん。わたくしが名前で呼んでいると言うのに、あなたはわたくしの事を名前で呼んでは下さらないのかしら？」

「いやでも一応、一つ上の先輩なわけだし」

「あら……、焰さん。あなた、本当にそう思っていますの？」

夜空を見上げていた百瀬百合花は、僕のほうへと視線だけ移し、まるで全てを見透かしているような瞳で僕を見つめながら ただ、それだけを口にした。

「それは」

「良いではないですか。わたくしがそう呼んで戴きたいというだけ

のお話ですし。それに、好きな方に名前で呼ばれたいだなんて、乙女らしくて素敵でしょう？」

やはり、僕にはこの人の考えている事だけはまったく解らない。一体どこまでが本気で、どこまでが冗談なのか 何でも解りきっているとしても言いたげな言動は、本当はどこまで理解して口に出しているのか 解らない。

「……解ったよ、これからは百合花さんって呼ぶ。それでいい？」
「ええ、とても素晴らしい響きですね。さん付けも無くなれば更に良くなるのですが、それは今以上に親しくなってから と言う事にしておきましょう」

（やり辛いなあ……、冗談だとは思えない所が特に……）

僕は元々バスタオルなんて着けていない状態でこの大浴場まで足を運んでいる その為、今でも全開の真っ裸で入浴中である。

百瀬百合花はと言うと、バスタオルを付けたまま入浴するなんていう、行儀の悪さは覚えていないらしい 僕と同じく真っ裸で、バスタオルはすぐ傍に畳まれていた。

つまるところ、今の僕達は風呂場とは言え互いに裸で顔をつき合せているわけである。

それだけでも十分に親しい間柄のように思えるし、これ以上彼女との関係が親しくなるなんて事は、出来れば僕としては避けたいところだ。

「さて…… 人も居なくなつて来たところですし、そろそろ本題に入りましたよ」

「それじゃもしかして、ずっと僕を引き止めてたのは」

「ええ、今夜の事についてのお話を。まだ詳しい作戦説明もしていませんでしたので」

三十分もこうして僕を連れて入浴していた理由はそう言う事だったのか。

それならそうだと先に言っておいて欲しいものである。

「 っ て、ちょっと待って。作戦、って…… 最初から百合花さん

は戦うつもりがないんだろ？ それなら、正面からいけばいいだけじゃないか。少なくとも、僕はそう思うってたけど」

「それは出来ませんわ、焰さん。何故このわたくしがあなたを共に連れて行く必要があるのか、お分かりですかしら？」

「それは、僕が久峰零次と面識があるから」

「いいえ。いざと言うときのボディガードになって戴く為、ですわ」

「……まさか、向こうから仕掛けてくる、と？」

「少なくともわたくしはそうでしたから。それに、向こうはわたくしの姿を覚えているはずです。もしもわたくし自身に対し、この間に狙われた何らかの要因があるのだとすれば 前回同様、わたくしが標的にされる可能性だって捨てられませんわ」

それは 確かに、有り得ない話ではない。

僕があのだ戦闘狂とやり合った時は、どちらかといえば僕から先に仕掛けたようなものだった と言っても、僕に彼女の姿は見えていなかったし、あの廃工場へと入っていった僕に彼女が気付き、その姿の見えないまま、

「……テメエ、敵か？ このオレに会いに来たっつー事は、ようするにそう言う意味だよな？」

静寂な建物内に響き渡るその言葉が、戦闘開始の合図となった。

事前に久峰零次の能力発動条件について理解していた僕は、最初から相手の姿を見ようとしなかったし、出来る事なら背後を取っての一撃必殺 それだけを狙い、後手に回っていた。

そして、結局はあのザマだ。

「……こう言ってしまうのも何だけど、僕じゃボディガードは勤まらないと思うんだけどな。正直、昼間にも言った通り 僕じゃ、彼女に勝てるとは思えない」

「謙遜、ですわね。いえ、きっとあなたは未だに自らの持つ可能性に気付いていないだけなのでしょう。……大丈夫ですわ、今回は本当にただの保険として付いて来て戴くだけですから。もし自分の命の危険が迫っていると感じれば、その時はわたくしを見捨てて自ら

の命を優先して下さって結構です」

「いや、それは」

「とにかく、焰さんは万が一の事態に備えて下さればそれで良いのです。後はこちらでやりますし」

百瀬百合花は、怯えの一つも見えない不敵な笑みを浮かべながら、
「このわたくしだって、あなたと同じ場所に立っている一人の能力者なんですわよ？」

夜 九時半になると、この宿舎は消灯の時刻となる。

大抵の生徒は消灯後になると自室で静かに過ごすのだが、ごく僅かにそのルールを守らない不良生徒達が存在していた。

「ねー、濠夜^{ほこや}あ。ここ暗いしさ、早いトコ外いかねー？」

「うつせーんだよ、静かにしてるバカ。まだ消灯時間から一時間も経ってねーんだ、官僚のクソ共が見回りにきたらメンドクせーだろーが。出るにはまだはえーっての」

「ま、あたしは別にいつでもいいけどねー。こうやって暗がりの中でヒソヒソ話して過ごすって言うのも、それはそれでオツなものだと思っしー」

宿舎の中では、消灯時間後でもまだ開いている場所がある。

宿舎を数十分ごとに見回っている官僚がやってくるという危険性もあるのだが　ここ、夜の食堂だけは、他と比べると比較的安全性だと言えた。

何しろ隠れる場所が多く、その空間の広さもあってか、見回りが来たとしても大抵は適当に中を眺めてすぐ立ち去るパターンがほとんどで、厨房にいたってはチェックさえされない始末である。

夜の十時 三人の不良少女達がそこに集まり、夜の街へと出かける為の時間潰しに暮れていた。

「それよりほりちんさ、今日お風呂入ったー？ 何だか匂いますよ

「？」

三人の中で飛び抜けて背の小さい、ピンクのブラウスに短い紺色のスカートを履いた私服姿の少女　渋谷香奈は、隣で身を屈めている黒髪短髪の少女を見下ろしながら、細々とした小さな声で呟いた。

「入ったつっの、このロリアマが。それと何度も言ってる、ほりちんはやめろほりちんは。普通に名前呼びやがれ、ちん付けされると恥ずいんだよバカ」

香奈がほりちんと呼ぶ少女　倉坂濠夜くらしかほつやは、心底うつとうしそうな顔をしながらそう言った。

「恥ずかしいだってさ、聴いた？　いいよー香奈、もっと言ってやれっ」

からかうように声を上げたのは、三人組の中でもっとも背が高く、短い銀髪に他の二人とは違って未だに制服を身に着けている少女、二年の綾峰雫あやみねしずくである。

「チツ、騒ぐんじゃねえくソバ力共が。見つかったら三年のオレがめんどくせー目に合わなきゃいけねーんだ、ちよっとは自重しやがれ」

倉坂濠夜は、この三人組の中で唯一の上級生であった。

この宿舎で何らかのトラブルが起きた場合、基本的にはその原因であるものが複数であれば、その責任は全て上級生が負うルールとなっている。

その為、特に三年生は滅多な事では面倒事に首を突っ込みはしないし、自ら何かをやらかそうなんて考えも起こさない　その為、下級生からしてみれば、それは結果的に模範となり、この宿舎は全体的に平和な風潮で落ち着いているのが普通であった。

だが　彼女ら三人のような不良グループと呼ばれる一部の生徒達に限って、それは関係のない例外だ。

味方の少ないこの宿舎に、彼女達不良グループの居場所なんていうものは滅多に作れたものではない　少なくとも、香奈以外の二

人はそうである。

「ったく。見つかるつもりはねーし、責任取る気だつてさらさらねーけどよ。万が一そうになったら綾峰、テメエもう絶交だなあ」

「えっ……、それは嫌だつて、濠夜あ！」

「そんなら静かにしてろつての。……フン、来やがったみてーだなえ？ と、濠夜の声に気付いて身を屈める二人が、厨房の隙間から食堂の入り口に視線を向けると

「……うわ、あれつて暮^{くれ}屈^なじゃね？ スパルタで有名の美人眼鏡！」
「黙つてろつてんだろ、カス。……しっかしヤベーな、よりもよつてアイツか」

「ふーん。あたし知らないんだけど、あの官僚つて何かあるのー？」
「ああ、アイツだけはこの食堂もしっかりチェックしていきやがる。まさか今日が当番だつたとはな」

「策はー？ ほりちんの事だから、当然考えてあるんでしょー？」
「そりやあるが……この三人じゃ、動くにしても音を立てずにつてのはさすがに無理だろ。チッ、このノツポバカがいなけりや、少しはマシだつたんだが」

「うわ、ノツポバカだつてさ。酷いなー、かわいそうだなー。ねー、しずちゃん？」

「……」

「しずちゃんー？」

「いつまでバカ相手に喋つてんだ、渋谷。……来るぞ」

懐中電灯を片手に、長い茶髪を靡かせ、教職員用の白い服を着た通称・美人眼鏡が、そのライトの光を厨房へと向ける。

「……いいか、出来る限り背を低くしろ。この厨房には出入り出来る場所が二つある。アイツは左側から来るはずだ、それに合わせてこつそり右側から出る。出来るな、渋谷。綾峰」

「オツケー、任せといてー」

「……」

「オイ、綾峰。解つたのか」

「……………」

まるで落ち込んだ子供のように、膝を曲げて顔をうつ伏せにしたまま、雫は返事すらしない。

もう時間がない　濠夜は、その肩を右手で思い切り揺さぶった。
「何してんだよバカ、早くしないと見つかつちまうだろーが。見つかったら絶交だつっただろ、聴いてんのか綾峰！」

「……だつて、黙つてろつて言われたんだもん」

「だーっ！　解つたもう黙つてなくてイイから、とにかく今は逃げる事だけ考えやがれ！」

「……うん」

「ヤバイよー、二人ともー。もうそこまで来てるよー」

「チッ」

こつん、こつんと靴の足音が響き渡る。

「誰か、そこにいますか？」

（マズいな、こりゃ）

倉坂濠夜は考える。

ここに自分達がいる事はもうバレている　あとは自分達の正体がバレないように、なんとか顔を見られずにここから逃げ出す方法を

（……やるしかねーか。チッ、出来る事ならあんまし使いたくなかつたが、仕方ねーな）

濠夜は後ろにいる二人の少女を横目で見る。

「お前ら、オレがここはなんとかしてやる。先に行け」

「へ？　でも、それじゃほりちゃんは」

「いいからいけよ、渋谷。テメエは解るだろ」

「……なるなる。オツケー、あたしに任せとけー」

「ちよつ、ちよつと待つて香奈。濠夜を放つて」

「大丈夫だよー、しずちん。ほりちゃんは最強だからねー」

香奈はそれだけ言つて濠夜に一瞥をくれてから、雫を連れて反対側の出入口へと姿勢を屈めたまま走った。

「……？ 誰です、そこにいるのは！」

さすがに物音に気が付いたのだろう 官僚の美人眼鏡がそちらへと振り返る。

（させねーよ、クソ野郎！）

ガダン！ と物音がした。

香奈と雫は全力で背を向けて走っていた為、その物音が一体何のものなのか、その目で確かめる事は出来なかったが

「な、なんですか、これは……っ！」

「わりーね、美人眼鏡の官僚さん。生憎ながら、こんな事でバレちまうワケにやいかねーんだよ、オレは」

食堂にあるテーブル、その一つが

「そ、そこにいるのは誰ですか！ 生徒ですね、名前を言いなさいっ！」

「アホかよ。バレたくねーつつてんのに、わざわざ自ら名前を言うワケがないだろ。ボケてんのか」

ピタリと、まるでそこにあるのが当たり前かのように

「それじゃ、オレはこれで。お勤め御苦労様。ま、せいぜい夜の食堂には気をつけるこった。何せ、ほら」

厨房の出入り口 食堂の奥側にある場所に立っている官僚と、もう一つある厨房の出入り口 食堂から外へと出る扉の側に立っている濠夜。

まるで、互いを挟んで濠夜の姿を隠すように 食堂の長いテーブルが、彼女達の間横向けになって宙に浮いていた。

「オレみてーなのが出てきちまうから、な？」

ピシヤリ、と言う扉の閉まる音と共に、宙に浮いていたはずのテーブルはその場へと落下した。

「な、何なの……。コレ……」

スパルタで有名な美人眼鏡の官僚は まるで幽霊でも見たかの

ような涙の溜まった瞳で、威厳なくその場に崩れ落ちた。

「それじゃあ、行ってくるよ。麗華ちゃん」

僕　紅条焰は、布団ですやすやと眠っている少女・久峰麗華にそれだけ囁いて、静かに部屋を後にした。

扉を出て、ポケットから取り出した鍵を掛ける。

消灯後の宿舎　それも、深夜の零時前となるとすっかり暗闇に包まれていて、前さえるくに見えない深遠が廊下の向こうまで続いていた。

「さて、と。早いとこ百合花さんと合流しよう」

この宿舎は、夜の十一時まで官僚による見回りが定期的に行われている。

それを過ぎれば、基本的に宿舎内は静寂と闇に包まれただけの空間になり、怖がりの子となると、夜中にトイレに行く事すら億劫になるほどだ。

ちなみに僕は、そういうのは全然怖くないので無問題　どちらかと言えば、窓さえないこの廊下を歩く前の見えない不安感のほうが厳しい。

「ま、今日は備えがあるわけで」

僕は鍵の入っているポケットとは逆のポケットから、一枚の紙を取り出した。

と言っただけのノートから千切り取っただけのもので、何か特殊な細工をしているとか、暗闇で発光するとかそういった代物ではないが

（この紙の先端部分……よし、ここだけを　）

物体発火。

僕の持つ超能力であり、対象が何であろうが触れるだけで燃やす事の出来る力。

僕は持ってきた紙の先端部分を指で摘んで、それを燃やすイメージを脳内で作り上げる。

その直後、すぐに手を離し　その紙は、先端からゆっくりと燃え始めた。

（全部燃え尽きる数秒までの間に、ここを突っ切ろう）

廊下をなるべく音を立てないように走っていくと、曲がり角が見える。

そこを曲がる直前、紙は燃え尽きて灰になり　そして、灰でさえ残らず消えていった。

廊下の曲がり角を左折すると、その先に宿舎の出入り口が見える。僅かな明かりが照らしているその場所へ、僕はまっすぐに向かっていった。

「あれー？　ほむりゃんじゃん、どうしたのー。こんな夜遅くにー」
最悪なタイミングで、友人である渋谷香奈と鉢合わせてしまった。
「香奈、どうしてここに……？」

「もう、先に質問したのはこっちだよー。驚いたなー、まさか不良生徒のお仲間入りでもしちゃったとかー？」

不良生徒　そうだった、香奈はその不良グループと仲が良かったんだっけ。

「いや、僕はそんな香奈みたいに節操無しじゃないよ。ただ、ちょっと用事があつて」

「用事ー？　ふふーん、それは香奈ちゃんも一緒に行っても大丈夫なレベルー？」

「大丈夫じゃないレベル」

「そっかー、それじゃあしょうがないねー。そういえばさっき百瀬先輩と会ったけど、もしかして関係あつたりするのかなー？」

「百瀬先輩？　そうなんだ、全然知らない」

「あら、焰さんったらこんな所にいましたの。もうとっくに約束の時間は過ぎてますわよ」

「……ああ。それは、どうも……お待たせしました」

まさに狙ったとしか思えないタイミングで、宿舍の出入り口からやってきた百瀬百合花。

香奈はやっぱり、と言った顔で僕を睨みつける。

「あら、渋谷さん。またお会いしましたわね」

「どうもー、百瀬先輩。しずちゃんがお世話になりましたねー」

「いえいえ。たとえ数が少ないとはいえ、生徒会長として不良生徒達の指導を務めるのは当然の義務ですわ。とはいえ、あなたも本当に顔が広いですね。彼女もこの間とは違う方でしたし、このわたくしでさえ彼女達の事を管理し切れていない現状ですし、やはりここは委員会のほうにもご参加戴けませんこと？」

渋谷香奈は、普通の生徒・不良生徒問わずとして仲が良い変わりものだった。

彼女がロリート 皮肉にもエリートと言う意味を含めてそう呼ばれているのは、何も頭が良いからという理由だけではない。

その人の良さは友達作りの才能と呼んでも過言ではなく、普通の生徒達ではほとんどが近付く事すら出来ないあの不良グループに何の気兼ねもなく近付ける少女。それが、渋谷香奈だ。

「んー、そっちはだから、もう解つてると思うけどほむりゃんとの日課がですねー」

「ええ。言ってみただけですわ、どうかお気になさらずに。……さて。それではわたくし、その紅条焰さんと夜のデートがありますので」

「うわ、ちよつ、バカ！ なに誤解を招くような事を」

「へえ、そうなんだー。つまりほむりゃんは百瀬先輩と二人っきりで夜のデートがしたいから、あたしに嘘まで付いて誤魔化そうとしたわけだー。なるなるー、香奈ちゃんはやつと解ったよー」

「……いや。あのさ、香奈。だから違うつて」

「いいよー、おやすみほむりゃんー。どうぞごゆっくり！」

ぱたぱたぱた、と駆け足で宿舍の中へと消えていく香奈。

してやったり みたいな顔をしながら、それを見送っている百

瀬百合花。

「……今のはちょっとやり過ぎだと思っよ、百合花さん」

「あら、わたくしは本当の事を言っただけですわ。それに、これ以上付きまとわれて時間が食うのは、あなただって本意ではないでしょう?」

「それは、そうだけど」

「渋谷香奈。彼女があなたの事をどこまで知っているのかは解りませんが、まさか噂の殺人鬼に会いに行く　なんてさすがに言えませんが」

「……彼女は、僕の事なら何でも知ってるよ」

「あら、そうですか。それは……少し妬けてしまいますわね」

「でも……だからこそ、僕は香奈をこちら側へ引き入れたくない。そういう意味で言えば、今のは正しかったのかもしれない。だから、その事についてはもうとやかくは言わないよ、百合花さん。でも」

「

そう　今日、僕がここまで調子が悪い理由。

どうしてこんなに胸糞が悪い気分になるのか、ようやく理解出来た。

「……こんな言い方、本当はしたくはない。でも、駄目なんだ。香奈だけはダメなんだよ、百合花さん。僕は香奈だけは手放せない。香奈より優先するものなんて何もない。もしこれが僕を主人公とした物語と例えるなら、香奈がヒロインでなければならいんだ」

　　瀬百合花は口を開かない。

ただ、僕が何を言っているのか解らない　そんな疑問符を浮かべたような表情で、ただそこに立っている。

「だから」

僕は、言わなければならない言葉を　出来る事なら言いたくはなかった言葉を、紡ぐ。

「この一件が片付いたら、もう僕に付きまとうのは止めて欲しい」

驚いた、のだろうか。

目の前の少女　百瀬百合花は、目を見開きながら無言で僕を見つめていた。

僕の事を　本気かどうかは解らないが　好きだと言っていた少女。

こんな最低な突き放し方、正直したくはなかった。
だが、それでも。

僕にとって、香奈以上に優先すべき事なんてものは、何もない。
「……そうですか。理由をお話しては……下さらない、みたいですね」

「ごめん」

「いえ、謝らないで下さい。元はと言えばわたくしが押し付けたようなものですわ。何もかも……この一件にしても、告白の事だつて

—

今更になつて胸が痛む。

僕には、彼女を突き放す権利などないと言うのに。

「解りましたわ。今回の件が終われば、わたくしは以前と同じあなたと出会わなかった時と同じように戻ります。約束の事も、上手くいけばきちんと取り計らいますわ。それで宜しいかしら？」

「うん。お願いするよ」

それだけ言つて、百瀬百合花は僕から目を逸らし　呟く。

「……あの、焰さん」

「何？」

「もし、これで最後になるのでしたら、その……わたくしの最後の願いを、聞いては戴けませんかしら」

「最後の……？　僕に出来る事なら、善処するけど」

「それでは、こちらまで来て下さい」

百瀬百合花に言われるがまま、僕は彼女の傍へと歩み寄る。
外へ出ると、満月が綺麗に輝く夜空が広がっていた。

「紅条焰さん。わたくしは」

百瀬百合花は、眼鏡を外して髪を解く。

彼女は月の光に照らされ、まるでこの世のものとは思えないくらい綺麗な姿をしていた。

「わたくしは、あなたの事が好きです」

ただその光景に見入っている僕は 何も出来ず、何も言えない。

「これは冗談でも、嘘でもない、わたくしの本当の気持ちですわ。

わたくしは、あなたに出会い、あなたを知ったその時から あなたの事だけを、世界の誰よりも、愛しています」

いつの間にか触れていた彼女の唇も また、いつの間にか離れていた。

「……百合花、さん」

「すみません。ですが、これが最後ですわ。これぐらいの我侭は、させてくれてもいいでしょう？」

「どうして、そんなに……僕を？ だって、僕は」

僕は 女なのに。

「本当にそう思っていますの？」

「え」

「……今だから話しましょう。わたくし達は超能力者です だからこそ、持ちたくなくても持たなくてはならないものがある。……

わたくしはね、焰さん。男性を認識することができないのです」

（な……まさか 精神障害？）

僕達、超能力者には必ずそれぞれ精神障害トラウマというものが存在する。

逆に言えば、超能力者とは精神障害トラウマを持たなければなる事が出来ない存在であり、その精神障害トラウマをそのまま外的要因へと変化させたものが超能力である。

「男性を認識出来ないから、女性を愛するしかない などと言う考えを持っているわけではない、という事だけは先に弁解させて戴きますわね。どちらかと言えばわたくし、人を愛する事を放棄しよ

うとしていましたから」

「人を愛する事を、放棄……」

「ええ。女は男を愛するもの、それが世の常ですわ。だからこそ、わたくしはもう人間として生きていく事は出来なくなった。……いえ、女として生きていけなくなった、が正確でしょうが　そんなものはどちらでも同じ。結局、わたくしはその時点で、普通の人間ではなくなったのですから」

普通の人間ではなくなる。

それは、まるで

「超能力者というものは、少なくとも必ずそういった『人と違う部分』を持っていますわ。ですから、同じ超能力者であるあなたに共感した　と言う理由も、なくはありません。しかし、それはわたくしにとって他の超能力者に対しても言える事。別に、それがあなたを好きになった理由などではないのですわ」

「それだったら、どうして　」

「簡単ですわ。あなたは、自分を一度たりとも女性だと思ったことがありませんかしら？」

「……ッ！」

なるほど　彼女は、本当に何もかも見透かしていたってわけだ。今までの解つてたような言動も、嘘のように聴こえた言葉も、出まかせにしか思えなかった行動も。

全て承知の上だった、そう言う事か。

「さあ、どうなのでしょう？」

「……お手上げだよ、百合花さん。確かに僕は、今まで自分を女だと思ったことはない。だからって同性が好きとかそんな話にはならないし、その程度のものでもないけどね」

「そうでしょうね。ですが、あなたがどんな心構えを持って女性であるのだとしても、わたくしにとっては事実が全て。このわたくしに唯一見える光、それがあなただったのですから」

「でも、言っておくけど、これは僕が持つ超能力とはまったく関係

のない精神障害だ。僕が自分で引き起こした、僕の所為で作られた、僕自身の拭い切れない精神障害に過ぎないんだよ。だから事実、僕は女だし　それ以外の何者でもない」

「ええ、それくらいあなたの能力を知れば解りますわ。ですが、そんな事は関係ないのです。あなたが女であろうとなかろうと、男性を認識できないと言う異常を持つこのわたくしにしてみれば、そんな事はなんて関係ない　あなたが見える、それが重要なのです。

それに超能力者とは精神で通じ合うもの　わたくしはあなたと出会、あなたを知ったその時から、あなたを愛すると決めたのです」

それが、百瀬百合花が持つ精神障害を乗り越える、唯一の方法　つまりはそう言う事なのだろう。

なるほど、確かに異常者らしい。

「それに　それが決定打とは言え、何もそれだけではないのですわ。わたくし、焰さんみたいな方は元々、好みですし」

「へえ。それってどんな部分が　」

「ええ、お恥ずかしながらわたくしどうも生粋のSのようすわね。焰さんとの相性は、勝手ながら最高だと自負していますわ」

……、そうきたか。

渋谷香奈は、寂しげな表情を浮かべながら宿舍の暗い廊下を歩いていた。

この宿舍は四階建てであり、一階には教職員と官僚専用の各部屋、管理人室、食堂、大浴場が存在する。

香奈は一階の廊下　ちょうど大浴場の入り口付近を通りかかったところで、廊下の先にある一つの部屋の扉が開けられている事に気が付いた。

そこから薄らと光が漏れている為、この暗闇の中でも特に目立って見えたのである。

（あそこ、確かセンサーの部屋じゃ？　こんな時間に誰が　）
すでに時刻は零時を過ぎている。

こんな時間に起きているような人間は、この宿舎では滅多にいない　それも教職員となれば尚の事で、部屋の扉が開いているだけでも不思議だというのに、その中には明らかな明るい光が照らされている。

誰かが起きている証拠だ　香奈はそう思い、咄嗟に身を隠そうと近くの柱の影へ隠れる。

これだけの闇の中であれば、扉から漏れ出ている光程度では、自分の姿は見つからないだろう　今ここで見つかると、あの百瀬百合花に見つかる程度では済まない。

（なんだかんだ言って、百瀬先輩は生徒の味方だしねー……。おつと、誰か出てきた）

香奈は身を隠しながら、誰がそこにいるのかを確かめる。

そこにいたのは　あのスパルタで有名な、通称・美人眼鏡こと、くれなきはるみ暮凧遙診だった。

もともと、香奈にとって彼女に対する知識はあまりない　厳しい指導で有名な、三年の美術教師であると言う事だけが記憶にある。食堂の一件で初めて知ったが、まさか官僚まで勤めているとまでは知らなかった。

（何してるんだろー……）

暗がりであまりよく見えないのだが、どうやら誰か他にも人がいるようで、何かを言い争っているらしい。

その部屋は彼女の部屋なのか　それは解らないが、少なくとも彼女は扉の外に出ており、中にもう一人、姿の見えない人間がいる（教師同士の揉め事かなー。うーん、でもこんな夜更けにやる事ではないし。ま、あたしも人の事は言えないけどー）

この位置からでは、何かを言い争っている　と言う事だけしか解らず、会話の内容までは聞き取れない。

いくら静かだとは言え、その場所まではまだ結構な距離があった。

気付かれないよう、少しだけ近付いて聴いてみよう　香奈がそう思い、身を乗り出した瞬間だった。

「……は？」

思わず声が出てしまった。

一瞬、何が起こったのか解らず、まるで電池の切れたロボットのよう

に香奈はその場で硬直した。

ぶしゃあ、と、何か赤いものが光にまぎれて飛び散っている。扉の前に立っていた暮風遙診は、一瞬で全身をバラバラにされていた。

悲鳴などあげられるはずがない。

真っ先に飛んだのは、言うまでもなく　その首だったからである。

（え　ちょっと……、なに……？　待て待て、落ち着け、香奈）

硬直した身体が動かない。

恐怖とかそう言うもの以前に、香奈は未だに何が起こったのか理解出来ずにいた。

目の先にあるのは、完膚なきまでに身体をぐちゃぐちゃに撒き散らした暮風遙診の肉片と、廊下に広がる赤い血だまり　そして。

ぐちゃ　と、まるでそんなものなどハナから眼中にないとかばかりに、扉の中から出てきた一人の少女が、廊下に飛び散ったそれを踏みつけた。

腰辺りまで伸びた髪を靡かせながら、返り血まみれになった顔で

その少女は、立ち竦む香奈へと視線を向ける。

心臓が、破裂しそうだった。

ぺたりぺたりとこちらへ歩み寄ってくるおぞましい少女に対し、香奈は何も出来ない。

足は攣り、指は震え、瞳はその少女を凝視して離せない。関わるな、逃げる　心の中でそう思っても、動けない。

「……あなた、見た？」

ほんの数メートル　その少女は、駆ければすぐに手の届く程の場所までやって来ると、香奈を見つめ、問う。

どうしていいのか解らず、何と言いつ返せばいいのか言葉さえ考えられないまま、香奈は震えた声で問い返した。

「き、キミは……誰？」

「くほうれいか久峰麗華」

即答だった。

普通、自分の犯した殺人現場を目撃されたなら、名前なんて答えるわけがない。

この子がやったのではないかも知れない　そう思いたい一心で、扉の前に散らばっている死体それを見つめながら、香奈は再び問い掛ける。

「アレ……キミが、やったの？」

「そうだけど？」

またしても　即答。

まるで、香奈に知られたところで関係ないと言わんばかりに。

「それじゃあ、本題」

少女　久峰麗華が言う。

血塗れ汚れた白い頬を舐め取るように、綺麗な赤い舌をペロリと出して。

「あなた、わたしが殺やったの見てみたいだし。面倒だから、ここで死んでくれる？」

深夜、零時半を過ぎた頃。

僕　紅条焰は、今日一日限りのパートナーである能力者仲間、百瀬百合花と共に、街外れの廃工場へと再び足を踏み入れた。

この街はどちらかと言えば田舎よりで、棘薔薇女学園のある区画から大体徒歩で三十分程度の場所にその廃工場は存在する。

昨日あの戦闘狂と対峙したこの場所は、久峰零次がターゲットとの戦闘に欠かさず使っているらしく、確かに人気のない場所だけあってその選択は納得出来るものがある。

「……人の気配を感じるね。それも、遠くから何か聴こえるような」
「」

「本当ですか？ まさか、先客がいるのでしょうか」

「解らない。でも、確かに何か聴こえる。……行ってみよう、百合花さん。何か嫌な予感がする」

「ええ、解りましたわ」

この空間は、広いと言えど密閉空間である。

遠くに誰かがいる それは、この建物の中へと足を踏み入れた瞬間から、ひしひしと肌に感じられていた。

僕を先頭に百合花さんに背中を預け、神経を張り巡らせながらゆつくりと残骸の間をすり抜け進んでいく。

次第に音がはつきりと聴こえてくる 間違いない、足音や何かがぶつかる金属音だ。

「……こりゃ、来るのが少し遅かったみたいだね」

「そのようですわね」

僕は横倒れた車の残骸に隠れつつ、その場で起こっている光景に目を向けた。

（あいつは……）

そこにいたのは

「誰だ」

ゴガンツ！ と、車が宙に跳ねる。

瞬間、百合花さんの身体が衝撃に巻き込まれ、その場から吹き飛んだ。

「きゃっ！」

「百合花さん！」

地面に転がる百合花さんへと駆け寄る 暇などは、ない。

僕はせめて百合花さんの盾になるように、その場に立ち上がる。

こちらの存在に気付き、声を上げたのは

「……テメエ、昨日のヤツか？」

「一日ぶりだね、戦闘狂さん」

あの戦闘狂がそこにいた。

「チツ　何しに来たのかしらねーが、今はテメエに構ってる余裕はねーんだよ。ちつと隅で静かにしとけ！」

それだけ言い放ち、戦闘狂はその場から駆け出した。

状況は恐らく、僕の知らない能力者との戦闘の真っ最中、といった所だろうか。

何にせよ、彼女に今こちらを相手しているほどの余裕はないらしい。

僕は後ろに振り返り、倒れている百合花さんの下へ今度こそ駆け寄った。

「しつかりして、百合花さん。ここはどうやら予想以上に危険らしい。とりあえず、今のうちに離れよう」

僕が肩を抱き身体を起こすと、百合花さんは目蓋を開き、こちらを見た。

「彼女は、戦闘中……なのですわね？」

「みたいだね。それも、敵はどうやらかなりの手馴れみたいだ。彼女があそこまで余裕のない表情をするなんて、一度やり合った身としては驚きだよ。とにかく、今はここから逃げよう。さっきみたいに巻き込まれたら元も子もない」

「なるほど……。状況は解りました」

どこか痛むのだろうか、百合花さんは少し辛そうな表情を浮かべながら立ち上がった。

「それならば逆にチャンスですわ。ここはひとつ、彼女にいらない恩を売って差し上げましょう」

久峰零次は、廃工場の中を駆け回りながら必死に思考を回転させていた。

（危ねえ危ねえ。絶妙なタイミングで邪魔が入ったが、そのお陰で助かったとも言うべきか。にしてもあの野郎、一体どこから攻撃を仕掛けてくるのか解ったもんじゃねえ。オレのような視覚認識タイプなのか、またはまったく別のものか……。やっぱ考えたところで答えが解るわけねえか。今はこのオレに流れが向いている　なら、それを生かすしかねえだろうがよ……！）

この廃工場というフィールドは、久峰零次にとって絶好とも言える狩り場である。

物が多いとなると、こうした鬼ごっこになつてしまい、はたから見れば不利のようにも思えるが　実際のところ、零次にはその方が都合とも言えた。

サイコキネシス
物質操作　自分の目で視覚・認識したものを、思い通りに『動かす』事の出来る超能力。

対象となる物が多ければ多いほど、その能力を有効活用する場面が多くなる。

つまり、この廃工場　元々は車を生産していた場所だと聞いている　ならば、その能力は実質最強だと言えた。

敵が物に隠れようが関係はない。

ようは、その物質ごと吹き飛ばせばいいだけの話だった。

だが

（しかし、なんだあいつの能力は……？　まるで鏡でも見ているような……いや、そうじゃない。まさか、このオレと同種類の能力を持っていやがるのか？）

物陰で息を潜めながら、零次は考える。

（解らない。確かにオレの能力とは似ているようだが、何かが違う。発動条件もそうだが、それだけじゃない。もっと本質的なところで、何か決定的な違いがあるような気がするが　やっぱオレに考え事は向かないらしい。ここで麗華がいてくれりゃ、すぐにでも看破し

てくれたんだろうが……な。無いものねだりするのは性に合わねえ。次だ。次で全て終わらせてやる……！)

右手を握り締め、零次は立ち上がる。

足音は聞こえない。

恐らく敵も同じように身を潜めているのだろう、仕掛けるならば今しかない

僕 紅条焰が与えられた指示は、戦闘狂と対峙している敵を倒す、ただそれだけであつた。

敵の居場所は、すでに突き止めている。

後は、気付かれずに近付くだけ なのだが。

(敵の能力の詳細が解らない以上、迂闊に動く事は出来ない。だとするなら、やっぱり背後まで気配を隠して近付く事一点に集中するべきなのだろうけど……)

何せこれだけ物が多い場所である。

大きい物だけではなく、部品やら小さな物が様々に転がり落ちているこの場所で、何も物音を立てずに動くのは至難の業と言えた。

(にしても、戦闘狂の方を任せちゃって大丈夫だったのかな。これ以上邪魔するとキレそうだからなあ……あの戦闘狂……)

百合花さんは『なんとかなりますわ』と言っていたものの、やはり心配なものは心配である。

何の為のボディガードでパートナーなのだろう、と少し自分の存在意義を疑問に思いながらも、不測の事態への対処としてはこれが適切とも思えた。

ここ一番で逃げ出さなかったところが、あの百瀬百合花らしいと言えるだろう。

第一、今日ここへ来た目的を果たしたいのならば 確かに、これが最善である。

ならば、僕は与えられた仕事を全うするだけの話だ。

(……さっさと全て終わらせて、早く帰って香奈に謝ろう。それで、明日からはいつも通りの日常を過ごすんだ。こんな死と隣り合わせの空気は、吸っているだけでおかしい病に犯されてしまいそうだから)

敵との距離はそう遠くはない。

触れるだけ、それだけで決着はつく。

視覚で認識するのに何秒必要だとか、そんなものは僕にはない
触れる事さえ出来れば、後は念じるだけで何もかも燃やし尽くす
事が出来る。

(……男、か。うーん、なんだろう、凄く久しぶりに見るなあ……)
実際、僕は女学園暮らしが続いていて、その間は外にも出た事が
なかった。あの百瀬百合花と出会うまではだが。からか、男を
見るのは久しぶりだった。

(あれが戦闘狂と殺り合ってる『敵』か。ふうん、大体二十歳近く
って所か……どうして彼女と殺り合ってるのか、事情は知らないけ
ど……少なくとも『殺意』を持って対峙しているって事に変わりは
無いわけで。うーん、やっぱりやりにくいな)

殺す、と言う行為には理性を無くす必要がある。

人間には必ずしも理性があり、普段はそれが誰しにも秘められた
破壊衝動を押さえ込んでいる。

だが、理性を無くした人間は、普通の人間では手に負えない。

僕自身、殺害という行為に対しては少なからず抵抗がある。実
際、昨日も本気である戦闘狂を殺すつもりはなかったし、むしろあ
やって話し合いで解決出来た事は僕にとって本望だった。

殺せと依頼されたとは言え、どちらかと言えば『能力者として殺
す』と言う意味合いが強い。ようは、生命を奪うまではせずに、
能力を使えない程度までに痛めつける。そう僕は解釈していたし、
実際そうやって解決させられれば一番だと思っている。

(それに相手は男だ、僕の身体じゃとても力で敵うとは思えない。

決めるなら一発勝負、確実に仕留めなければやられるのは僕、か）
理性の有無、力の差、そして能力の違い　どれを取っても僕に
有利な面は見当たらないし、どうあがいた所で勝ち目が薄い事は目
に見えている。

だが、それでもやらなければならない事に変わりはない。

どの道、僕に取れる選択肢はないのだから。

（まったく、こんな分の悪い賭けに乗るなんて。僕らしいんだか、
らしくないんだか）

時間が惜しい。

決めるのなら一瞬　敵に余裕を与えず、一気に詰めに行くしか
ない。

（距離は数メートル、相手はまだ僕に気付いていない。ならば）
その時。

物陰に隠れている敵が、動きを見せた。

百瀬百合花は、戦闘狂の下へと向かっていた。

数多く散らばっている大小様々な残骸の間をすり抜けながら、し
かし着実に。

（場所が解つていと言うのに、こうも歩き辛いのでは少しばかり
面倒ですわね……。それに、先程の攻撃で左足をやられましたし。

歩けはしますが、これでは先に動かれるとまたフリダシ……ですわ。
早くしなければ　）

がくがくと歩くたびに崩れそうになる左足を引きずりながら、百
合花は遠くに見える戦闘狂の姿を離さない　これだけの残骸が自
分の周りにあるとは言え、それは彼女にとって何の障害ですらなか
った。

クリアボヤンス

透視能力　百瀬百合花は、全ての物質を通してその先にあるも
のを見る事が出来る。

その効果の範囲はそこまで広くはなく、自分を中心に一定の距離までしか見えないものの、戦闘狂との距離は初めからあまり遠くはなかった為、すぐに捕捉する事が出来たのである。

超能力とは、その人間が持つ精神障害トラウマによって生まれるものである。

過去、とある事件によって男性に対する嫌悪心を持ってしまった彼女は、男性を拒絶する　という、心トラウマに出来た一種の精神障害によって、一つの超能力を目覚めさせた。

それが透視能力と呼ばれる超能力であり、彼女は男性を心のどこかで無自覚に拒絶する事により、男性と言う存在、その姿を全て無意識に透視しているのである。

（……それにしても。まったく、上手く噛み合わなかったただけの話だとしても言うわけですか？　事実は小説よりも奇なり、とは良く言ったものですわね。……ですけど、そうなるとやはり焰さんが対峙している『敵』が　と、言うわけですかしら。予想はしていたとは言え、ある意味これは好都合ですわね。驚きはしましたが……まあ、いいでしょう。当初の目的は何も変わりはないのですから）

歩きつつ、戦闘狂の姿を確認しながら　思う。

（力を貸す事を彼女は望んではいないでしょうが、こういったトラブルは常に付き物ですよ。それを、身を持って味わって戴くと致しましょう）

百合花の能力は、決して戦いに向いた能力ではない　少なくとも、単身で戦う分にはまるで不向きな能力だった。

だからこそ、百合花は話し合いで全てを解決させるつもりでいた。あの戦闘狂だけは、言葉で理解させなくてはならない。

紅条焰のいない今　彼女にとって、頼れる武器は己の口先のみだった。

（捕まえましたわよ……！）

じゃり、と、何かを踏み付ける音がした。

それに気がついたのだろう　すぐ近くで身を潜めていた戦闘狂は、百合花の立っている方向へと振り返り、

「お待ち下さい、わたくしは戦いに来ただけではありませんわ」

先手を取ったのは、百瀬百合花だった。

「デメエ、さつき吹っ飛んでやがった」

姿を現した百合花は、嘲るように薄らと笑みを浮かべ、戦闘狂の前に立つ。

「……オイオイ、遠目だったから気付かなかったぜ。まさかデメエだったのか」

二人が向かい合い、互いに笑みを浮かべ合う。

「こんばんは、今宵も星空が綺麗ですわね。そうは思わないかしら、倉坂濠夜さん？」

「チェック・メイトだ、殺人鬼」

僕　紅条焰は、敵の背後からその右腕を掴んで言った。

「な、お前……なにを」

「おっと。こつちを振り向かされると、僕は君をこのまま焼き殺さなくちゃいけない。そういう乱暴なのは好みじゃないんだ。出来れば従ってもらえると嬉しいな」

腕をキツく握り締めてそれだけ言うと、敵は大人しくなった。

僕の隣には、炎上し、今にも灰さえ残さず散っていきこうとする車の残骸がある。

「……お前、何者だ？　その力、まさかオレと同じ超能力者か」

「うん、そうだね。もっとも、僕の場合は君みたいに視覚で認識するタイプじゃなくて、こつやって触れているものに対して作用する超能力でさ。バイロキネシス物体発火、って呼んでるんだけど　ま、その効力のほどは、そこで燃え上がってるヤツを観てくれれば解るよね？」

「チツ、厄介な奴に絡まれたもんだな。お前、何が目的だ。あいつの仲間か？」

「まさか。僕にはあんな物騒な女の子と仲良くなれる甲斐性はないよ。ただ、君にもう彼女を狙う事を止めて貰おうって、それだけの話さ」

「なんだと？……残念だがそれは無理な注文だな、女。オレにはどうしてもあいつを殺さなきゃいけない理由がある」

「理由ね。それってさ、君の妹の事だろ？ 殺人鬼 いや、久峰零次と呼んだほうがいいかい？ 君の妹、久峰麗華の事だよ」

「な」

ピクリ、と、僕が掴んでいる腕が微かに震えた。

「凶星……みたいだね」

「どうしてお前がその事を知っている？ まさか、お前が本当の」

「

「ちよい待ち。それは早計だよ、久峰さん。僕は君の妹を助けた命の恩人なんだよ？」

「なん……だと……？ まさか、麗華は生きているのか？」

「生きているか、だって？ やっぱ死んでいるとか勘違いしてたのか。まったく、どうも短気が過ぎるようだけど 生きているんだよ、君の妹さんはね」

百瀬百合花は、事のあらましを倉坂濠夜に説明していた。

棘薔薇女学園の同級生であり、クラスは違えど互いの存在程度は知っている二人であるからこそ、話し合いの成立 焰に対する根拠のないように見えた自信は、つまりこういう事だった。

「よーするに、オレは殺人鬼ヤローにありもしねー罪を負わされて、勘違いで命を狙われてたっつーのかよ？」

「そう言う事ですわね。焰さんが言うには、久峰零次の妹は生きて

いるそうですし、あなたも心当たりはないのでしょうか？　ならば、まったくの勘違いで起きた争いと言う事になりますわね」

「つまり相手の殺意はオレに向いていて、真実オレに向いていなかった　　っつーことか。うっわ、最悪じゃねーかそれ。なんだよクソ、殺る気失せたっつーの」

濠夜は心底つまらなさそうな表情でそう吐き散らし、

「……って、オイちよっと待てよテメエ。まさか、昨日あの紅条とか言う女をオレんとこへ勘違いでよこしやがったのは　　」

「ええ。お恥ずかしながら、完全に情報不足と擦れ違いが重なっただけの結果、と言う事になりますわね」

「だあッ！　なんだそれ、胸糞悪いにも程があんぞ！　結局オレはこの二日間、無駄に勘違いヤローどもに付き合わされただけ、単なる無駄骨じゃねーか！」

「まあまあ。さすがどちらも無駄な死者なく解決しますし、良いではないですか」

「ちくしょう。せっかく有名なあの殺人鬼と二度も殺り合える、ってはりきってたのに、ただの勘違いヤローだったなんて……幻滅もイイとこだぜ……」

すっかり落ち込んでいる様子の濠夜を横目に、百合花は無事に済んで良かったという安堵を感じつつも　　もう一つの問題が解決しているかどうか解らない、と言う不安を感じ始めていた。

紅条焰と久峰零次　　少なくともその二人は話し合いに持ち込むまで、何らかの衝突は避けられないはずだ。

その時、焰に勝ち目があるのかどうか　　それが解らない。

久峰零次は男である。

百合花が二日前に彼の姿を確認出来ず、性別を判断出来なかったのは、何も逃げていたからと言うだけではない　　単純に、その姿が見えなかったことも理由の一つに当てはまる。

どうして百合花自身が命を狙われたのか、その時には理解出来なかったが　　焰の話を聴いた上で、ようやく理解する事が出来た。

行方不明になった妹、それを拾い助けていた紅条焰。

いなくなつた妹を探しても見つからないとなれば、命を狙われた
と思考するのは間違つてはいない。

ならば、命を狙われるとするならば誰に狙われるのか　そこま
で考えれば、後は解り切っていた。

久峰零次は、この街の能力者にとって畏怖すべき存在と言われて
いる。

能力者が次々と殺されているこの街の裏で起こっている事件、そ
の主犯である久峰零次は、十分に能力者達に弱みを狙われる理由が
存在しているのである。

「しかし、テメエはどうしてそれが久峰零次だつて解つたんだよ？
大体は話を聞いて理解できたが、その二日前　テメエが襲われ
たつて言つたが、その姿も確認出来ずにどうしてそれが久峰零次だ
と割り出せた？」

「あら、そんな事は簡単ですわよ。このわたくしを百瀬百合花だと
知っておきながら、襲い掛かつてくる馬鹿は久峰零次という殺人鬼
以外に考えられませんもの」

「……は。ま、テメエに刃向かおうなんてヤツはいねーだろうけど
よ。それにしても、それが本当だつたとは言え　もし違つた場合
はどうするつもりだつたんだ？」

「あら、それをわたくしに聴くのですか？　まあ、そうですね。
そろそろこの街の能力者の数を減らされるのは癪に障つていたとこ
ろですし、勘違いで死んでもらつても別に問題はありませんでした
わね」

「くはは、良く言うぜ！　言い切つてやろうか。テメエ、襲われた
なんてのは口実だろ。本当は、別の目的であの野郎を追つていやが
つたな？」

解りきつていいると言いたげな皮肉を込めた笑みを浮かべ、口の端
をつり上げながら倉坂濠夜はそう言い放つた。

「……まったく、あなたの洞察力には敵いませんわね。お察しの通

り、わたくしが焰さんに久峰零次の殺害を依頼したのは　ここ数日の間、この街で今までに見ない勢いで能力者達が久峰零次に狙われ続けている、と言う噂を耳にしたからですわ」

久峰零次は、基本的にそれほど害のない能力者相手には手を出さない、どちらかと言えば通り魔ではなく計画犯的な動きを見せる殺人鬼だったのだが　恐らく彼の妹が失踪してからだろう、その対象に見境が無くなり始め、ついには百合花までが狙われるハメとなってしまうた。

百合花は、これ以上に街に住まう能力者達の被害を食い止める為、これまで見放していた殺人鬼の対処を決めたのである。

もつとも、彼を放置していたのは、単純に力の差があったからと言う理由もあったのだが

「そこで出会ったのがあの女……紅条焰、ってわけか。一体何モンだ、あいつ？」

「わたくしにとって唯一愛することの出来る人、ですから」

「そうじゃねーよ。つーかなんだそれ、テメエのいつもの冗談か？」

「あら、冗談などではありませんけれど。……そうすね、彼女は　」

百瀬百合花は、まるで自ら誇らしいものでも語るかのような態度で、

「この世界で唯一、最高傑作と呼べる超能力者の一例ですわ」

僕　紅条焰は、大体のあらすじを久峰零次に説明し終えていた話を聞き終わると、久峰零次はまるで予想外だったとも言いたげに鼻笑いをすかして、

「なるほどな、大体話は理解出来た。全てはオレの勘違いだった……ってわけか。で、今その麗華はどうしてる？　出来る事なら、今すぐにでも返して貰いたいんだが　」

「その前に、一つだけ僕の質問に答えて欲しいんだけど、いいかな？」

話し合いの場となりある程度の和解を得た今でも、僕はその殺人鬼の腕を握りしめたまま 問う。

「なんだよ」

「妹さんを探している間、色んな人達を無意味に襲ったらしいじゃないか。君は……誰か、一人でも殺したの？」

「……なんだ、そんな事か。何を言い出すのかと思えばその程度、お前はオレの事を勘違いしてるようだから先に言っておくが オレは殺人鬼だぜ？ この街でくだらない能力者どもを殺して回る、有名な殺人鬼だ。そいつを目の前にして、誰かを殺したか……だって？ そんな質問はな、意識が正常なヤツにだけ言ってくれよ。吐き気がする」

異常 そんな言葉が僕の脳裏を駆け巡る。

超能力者とは異常者の集まりだ。

そんな事は百も千も承知だし、今更それについてとやかく疑問に思ったりはしない かく言う僕もその一人なのだから。

だが、それとこれとは話が違う。

「そう。それじゃ最後に、差し支えなければ君の精神障^{トラウマ}害ってヤツを聞かせてくれない？」

「質問は確か一回までだったな？ それならその問いには答えねえよ、却下だ。ほら、解ったならさっさと麗華の居場所を」

腕を握る力を 強くする。

もしこれがか弱い少女の腕ならば、千切れてしまうのではないかなと思うくらいに、強く。

「オ、オイ。お前」

「……言いたい事はそれだけ？」

顔が熱くなる。

頭に張り巡らされた血管のひとつが、今にも破裂してしまいそうな程に

「良く聴いておくことね、クズ。貴方みたいな理性も知らない奴がいるから、平気で何の罪もない人を殺せるような奴が存在するから世の中はこんなにゲロ臭いのよ。失望させないで、下種。私はね、貴方みたいな奴にはこの世の空気すら吸って欲しくない」

もう、限界を超えていた。

「……なるほど。結局、お前はオレとやり合いたいってわけか。ハッ、その物言いといい　お前、オレと同類の匂いがプンプンしてくるぜ？」

「黙ってなさい、負け犬。それに、私は貴方とやり合おうだなんて一片たりとも思っていない。これはね、一方的な敗北のプレゼントなのよ」

無意識の内に、手のひらに力を込める。

次第に遠のく意識の中　目の前には、顔面を焼き尽くされ、もがきあぐねる男の姿があった。

倉坂濠夜と百瀬百合花は、廃工場の中を探し回り、ようやく一人の少女の姿を見つけ出す事が出来た　とは言うものの、百合花の透視能力によって存外簡単に見つけ出す事が出来たのだが。

「殺人鬼のヤローがいねーな。……まさか負けたのか、こいつ？」

紅条焰。

赤と言うよりはオレンジに近いセミロングの髪を茶色のリボンで纏め、前髪の左半分をリボンと同じ茶色のヘアピンで留めている。

服装は外出用の私服　可愛い白のブラウスを薄い黄色のキヤミソールの上に胸元を開くように着ていて、デニムのマイクロミニスカートに茶色の皮ベルトを巻いている。

その細い脚を黒のオーバーニーソックスに通して、靴は動きやすそうな白のスニーカーを履いていた。

分解され、もはや使いものにならないであろう中型車的一部分に

もたれかかるように、焰は目を閉じて倒れていた。

「負けたのでしたら殺されているはずですし、恐らくは相打ちか……
あるいは」

百合花が焰の胸元へ耳を寄せ、その心臓の音を確かめながら呟く。
すつ、と言う呼吸音が目の前から聞こえ、思わず百合花はどきりとした。

「ま、生きてるみてーだしイインじゃねーか。とりあえずこいつ、
宿舎まで運ばねーと。この様子じゃ、当分起きそうにねーし」

そんな様子を見ていたのかいないのか、濠夜はすっかり落ち着いた口調でそう言った。

百合花はそれが意外だったのか 少し赤く染まった顔を焰の胸元から上げ、濠夜へと珍しいものを見るかのような表情で振り返る。
「あら。倉坂さん、案外お優しいのですわね」

「あ？ ま、こいつとは知らねー仲じゃねーし。あの渋谷の親友なんだろ？ あいつは顔は広いが、そこまで他人と深い親しみを持つようなヤツじゃねーからな。そんな渋谷の親友だってんなら、オレだって興味も出てくるぜ？」

「そうですか。でしたら、焰さんはよろしくお願い致しますわね。
ちようど、わたくし少し負傷してますので……この脚では担いで帰るのは不可能ですから。ありがたいですわ」

言いながら、どこか含みを込めたような目線で濠夜を観る百合花。
それにようやく気付いたのか、濠夜はマズいと言わんばかりの焦った表情で、

「あ……もしかして、あの時ふっ飛ばした時のか、それ？」

「ええ、そうですわ。突然でしたから受身も取れず、ご覧の通り左足がやられてしましまして。ああ……傷なんて負ったのは、どれくらいぶりですかしら……」

百合花は口調こそ自然だが、濠夜はその言葉の内に秘められた感情に感付いていた。

「ああ、いや……その。悪かった、もうしねーから。あれだ、許し

てくれ」

「もちろん、事故ですし。焰さんを連れて帰って下さるとも言いま
すし、それでチャラにして差し上げますわ」

「……それは、どーも」

濠夜は内心で安堵しつつ、同時に百瀬百合花という少女の恐ろし
さを再確認していた。

元々、濠夜と百合花はそこまで親しい間柄ではない　だが、濠
夜にとって百瀬百合花という存在は、学園の中だけで言えば一番の
脅威と呼べる程の相手なのである。

生徒会長を務め、実質この学園の創始者とも呼べる人物　同じ
能力者でありながら、この街のほぼ全ての能力者を管理する『組織』
のリーダー、それが濠夜から見た百瀬百合花の実態でしかない。

学園では不良生徒として生活している倉坂濠夜にとって、これだ
けの条件を重ね合わせた人物と言うのは、相手をしていて非常に厄
介だった。

「んじゃ、帰るか。……ああ、そうだ。生徒会長さんよ、一つだけ
聴いとしてもイイか」

「はい。何ですかしら？」

「あの殺人鬼、今度見つけたら殺つとしてもイイか？　オレから殺
りに行くのって基本的にや性に合わねーんだが、今はそうしてー気
分なんだよな」

「別に構いはしませんが……出来れば半殺しで、こちらで預かると
言うのが理想ですわね」

「あい、んじゃそーするわ」

そう言うってから、濠夜は地面に倒れている焰の身体を抱き起こし、
それを背中に担ぐ。

その光景を眺めていた百合花が、一つ浮かび上がった疑問を口に
する。

「ところで、何故そんな事を？」

あ？　と、どうでも良さそうな表情で振り返った濠夜は、

「いや。昨日今日と殺り合ってた気付いたんだが、あいつオレとキヤラ被ってたんだよ」

棘薔薇学園　その敷地の入り口に、一人の少女が立っている。

徒歩で帰路に着いていた百瀬百合花と倉坂濠夜は、その場所で待ち受けている少女の姿を遠目から視認すると、互いに顔を見合わせた。

こんな夜遅くに生徒が外に出ている事は、基本的には有り得ない百合花と焰はあくまで仕事と言う名目だし、濠夜はあくまで不良生徒なのである　が、そこにいる人物は、二人も良く知る人物であった。

濠夜は、焰を背中に担いだままの格好で言う。

「オイオイ、ありや綾峰じゃねーのか？」

「そのようですわね。きちんと指導したはずですが……あんな所で何を？」

二人はそれぞれに疑問を抱く。

濠夜は

（あのノッポバカ、オレがいねー時ならまだしも、オレがいる時に見つかるような真似はするなっつてんだろ　それにあんな場所で、まさかオレを待ってたってのか？）

百合花は

（渋谷さん同様、宿舎の方へとお帰り戴いたはずですが。わたくしが出かける事は知っているでしょうし、あんな所にいてはいずれわたくしに見つかる　それくらいは彼女も重々承知では……いえ、まさか　わたくしを待っていたとでも？）

濠夜と百合花は、互いに意識の違いがあるとは言え　何か尋常ではない事態が起きている、そんな予感を抱き始めていた。

やがて、二人が近付いてきている事に気がついたのだろう　学

園の敷地、その入り口付近で誰かを待つように立っていた少女
綾峰雫は、まるで錯乱しているかのような落ち着きのない様子で、
二人の下へと走り寄って来る。

「濠夜あ！ た、大変だよあ！」

「綾峰、テメエ何のつもりで」

濠夜がそこまで言いかけ 百合花が、人差し指を彼女の口元に
当てて制した。

「……綾峰さん。何か あったのですね？」

「あ、ああ。あたいの携帯……これ、見てよ」

雫がポケットから携帯を取り出し、その画面を二人に向ける。

それはメールの受信ボックス その中にある、一通のメールの
内容だった。

『助けて、殺される』

送信者の名前は

「渋谷……だつてのか？」

「そ、そうなんだよ。もう寝ようと思ってたら、いきなり携帯が鳴
ったんだ。濠夜のそこには来なかったの？」

「ああ、オレは基本的に夜は携帯切ってあつからな……しかし、何
なんだそのメールは。まさかあの渋谷が、こんなくだらねー冗談を
言うとも思えねーし」

ふと、そこで濠夜が何かに気付いたような素振りを見せた。

「……オイ。こうしてテメエが外でオレ達を待っていた、って事は」

「うん……ごめん、濠夜。手遅れだった」

「な」

手遅れ それが、一体どんな意味を持つのか。

「綾峰さん、委員会はすでに？」

「ああ。いなくなった香奈の搜索と、一階の部屋の前にあったバラ
バラ死体进行处理してるみたいだった」

「バラバラ死体 だと？ オイ、何だよそれ」

「詳しくは知らないけど、死んでたのは香奈じゃなくて……あの、

暮凧らしいんだよ」

「暮凧先生が……？　こんな一大事、どうしてわたくしの携帯に連絡の一つさえ」

百合花はイラつきながら、スカートのポケットから携帯を取り出して、

「……これ、壊れてますわ」

「チッ　　ったく噛み合わせーな。で、渋谷がいなくなったのはどういう事だ、綾峰」

「あたいにも解らないよ……！　メールを見て、すぐに部屋まで行ったらいなくてさ。すぐ皆にも頼んで宿舎の中探し回ったけど、見つかったのはあの死体だけで」

「殺されると書かれたメール、そして失踪した渋谷香奈　まさか、帰ってきて早々こんな事件が起きているとは……予想外にも程がありますわね」

ガンッ！　と、濠夜はコンクリートで出来た壁を左手で殴りつける。

「クソ！　一体何がどうなってやがる……！」

「八つ当たりをしても仕方ありませんわよ、倉坂さん。今はとにかく、宿舎の方へと戻りましょう。綾峰さん、あなたは部屋に戻って下さい」

「そんな……！　あたいも一緒に」

「これは生徒会長としての指示ですわ。渋谷さんは、わたくし達は何としても探し出します。ですから、今日はもうお休みになして下さい。いいですわね」

「……解ったよ。行こう、濠夜」

口惜しそうな、しかしどうしようもないと言った表情で　雫は俯き、濠夜に促す。

だが、濠夜はその場から動こうともしない。

「濠夜？」

「テメエは先に帰ってろ、綾峰。オレにはまだ、やれる事がある」

「ちょっと、何言つて」

「オイ、百瀬。テメエの話、引き受けてやろうとは正直思ってたが、気が変わった。イイぜ、テメエの仲間とやらになってる」

廃工場からの帰り道　百合花は、今回の目的を濠夜に話していた。

女性能力者を集め、仲間として引き入れている百瀬百合花の話は、濠夜も当然耳にした事はあるし　むしろ、何度か誘われた事もあった。

だが、そのたびに濠夜は必ず断っていた。

今の彼女にあるもの　この学園や、夜の街での楽しみ　それを失わない為に。

「ええ、そう言つて下さると信じていましたわ」

「ちょっと、濠夜……あんたまさか」

「わりーな、綾峰。しばらくはテメエに付き合つてやれねえ。その代わり、渋谷は絶対にオレが助け出す。だから安心しとけ」

「濠夜……」

この時　綾峰雫は、自らに何の力もない事を心底悔やんだ。

百瀬百合花やその仲間　そして、倉坂濠夜のような『特別な力』を何一つ持たない自分は、所詮ただの一般人　仲の良い友人でさえ助け出す事も出来ない、非力なただの人間なのだと。

メールを受け取つたのは、他の誰でもない自分だと言うのに。

結局、助けてと伸ばされた手を掴めないまま

「お気持ちは察しますわ、綾峰さん。ですが、これは普通の人間では手に負えない事態なのです。あなたに出来る事は、渋谷さんの無事を祈る、ただそれだけです」

「それぐらい、あたいだつて解つてる。そんなありきたりな慰めは、いらないよ」

「そうですか。では、各自部屋へ戻ってください。倉坂さんは、焰さんを部屋に連れていった後、宿舎前までお越し下さいな」

「ああ。解った」

そうして、三人は解散した。

雫は何も言わないまま、濠夜に背を向けて宿舎へと戻っていく。

そんな後姿を、しかし濠夜は安堵したような表情で見つめていた。

「……さて、と。何だか厄介な事になりやがったが、とにかくこいつを部屋まで連れてかねーと」

紅条焰　渋谷香奈の親友だと言うこの少女が、この事を知ったらどうなるか。

濠夜は、そんな不安を頭の中で巡らせながら、

「出来る事なら、こいつが起きる前にすべて片付けていられりゃいいんだが、な」

彼女達の夜はまだ終わらない。

次の日が昇るまで、決して終わる事なく続いていく。

第二章／能力者達の交わる夜（下）

久峰麗華。

彼女の兄、久峰零次はこの街でも有名な殺人鬼であり、麗華は彼の事をいたく慕っている。といっても二人は兄妹である為、あくまで恋愛感情などではない。

殺人鬼の噂が流れる以前、超能力者と呼ばれる存在である零次に憧れ、麗華は自分自身も超能力者になりたいと強く思うようになっていった。

憧れ、羨む程に、彼女のそんな気持ちは次第に大きく成長していく。

麗華が超能力者として覚醒したのは、ほんの一ヶ月前の出来事である。

きっかけは、本当に悲惨な出来事だった。

『な、何をするの麗華……！ やめなさい、そんなものを振り回さな　ぐざい』

ぶちぶち、と目の前で解体されていく自分の両親を、麗華は狂うように笑いながら次々に切り裂き、バラバラにしていく。彼女の手に持たれたチェーンソーが、耳を壊すような凄絶な音を立てながらその母親を死に追いやった。

『あは。怖い、怖いよお。おかーさん』

うるさい音だ。麗華がチェーンソーを持って、最初に得た感想がそれだった。

彼女の母親は、一番初めに腹部を両断された時点ですでに絶命している。いくら話しかけても返事など返って来るはずがない。

何故こんな事をしたのか。この行為には特に意味などなかった。母親は別に嫌いではなかったし、むしろどちらかと言えば優しく

良い母親だっただろう　だが、麗華にとってそんなものは虚像に過ぎなかった。

『……すごい。血だ、血がいつぱいだよ。おかーさん』

死んでいる、そんな実感は特に感じない。

自分が殺した　そんな感触さえ、ない。

『おかーさん？』

返事がない、その一瞬で　麗華は我に帰ったかのように、現実を直視する。

足元で自分の母親がバラバラになり、肉片となって散らばっているその光景を。

チェーンソーが、音を止める。

回転していた刃は静かに停止し、こびりつく血と肉を撒き散らしながら床に落ちた。

『何これ、臭い。気持ち悪い』

げし、と、床に落ちているモノを蹴り飛ばす。

同時に血が飛んで、麗華の頬に赤い筋を作った。

こんな光景を、もし父親に見られてしまったら　そこまで考え、

しかし麗華はそんな事など取るに足らないと言う結論に至る。

だって、そいつも殺せばいいんでしょ？

深夜の一時半を過ぎた頃、宿舍内はひとときの静寂に包まれていた　と言うのも、百瀬百合花やその率いる委員会のメンバーによる事態の鎮圧が行われた為、暮^{くれなきはるみ}屈^{くつ}遙^{はる}診^{しん}が殺害された事による騒動も一瞬のうちに収まっていたのである。

一方　紅条焰をその自室へと運び終わった倉坂濠夜は、百瀬百合花に言われた通り宿舍入り口前へと姿を現していた。

「え……？　あ、あれって」

「三年の倉坂さんじゃない？　どういう事かしら。まさか、こちら側に協力するとも言うの？　あの不良生徒の間でも有名な彼女が」
「む。もしや、百瀬先輩が……？」

委員会のメンバーの一員である、三人の少女達　突如として現れた予想外の人物に対し、彼女らは驚きを隠せない。

倉坂濠夜といえば、一部の生徒にとっては恐怖の対象とも呼べる、不良生徒グループを統率しているリーダー的存在である　さらに言えば、この学園に存在する能力者達、その筆頭とも呼べるほどの実力も持ち合わせている　という話を、特に委員会の人間は百瀬百合花から何度も聞かされていた。

同時に、委員会への参加を求めても、幾度としてそれを拒否し、一度たりとも協力姿勢を見せたことがない　と言う事も。

その倉坂濠夜が、これから活動を開始する委員会メンバー達が集まっている場所へとやってきた　これはどういう事なのだろう、とその場に在る誰もが思う。

「お待ちしておりましたわ、倉坂濠夜さん」

ふと、彼女ら委員会メンバーを代表するかのように、先頭に出た百瀬百合花が、濠夜の元へと歩み寄ってそう言った。

「……ああ。にしても、何だこりゃ。まさか、これだけの人数で搜索するつもりかよ？」

濠夜は軽く会釈して、すぐさま周囲に佇む委員会メンバー達の顔を眺め回す。

しかし、そこに在るのは片手で数えられる程度の人数　三人、いや、四人の少女達のみだった　百合花と濠夜を合わせれば、六人という事になる。

「ええ、活動班はこれだけの人数ですわ。学園の出入り口、宿舍の包囲を考え、そちらに人数を回しましたから」

「ふうん。ま、動くなら別に少なくとも問題はないんだが……宿舍の包囲だの、学園出入り口の封鎖　そこまでしているってことは、犯人や渋谷はまだこの敷地内にいると見て間違いないんだな？」

「それは監視班からの確かな情報ですね。監視体制は二十四時間、隙間なく万全に行っていますので。残念ながら、犯人の姿までは解りませんが、どこへ向かわれたのかも皆目検討がつかない、と言う状況ですが……渋谷香奈さん、そして、今回の殺人事件の犯人は確実にこの敷地内、いえ、宿舎または学園校舎内部のどこかにいる事は確かでしょう。それが生きているのか死んでいるのかは別として」「だったら急がねーとマズいぜ。渋谷がまだ生きていると信じるなら、早く見つけ出すに越した事はない」

「ええ、承知の上です」

くるっ、と濠夜に背を向けた百合花は、四人のメンバー達と向かい合う。

「さて、皆さん。聞いての通り、自体は一刻を争います。今回の作戦目的は、まず第一に渋谷香奈さんの保護。そして、それを完遂した後、殺人事件の犯人を捕らえます。あくまで重要なのは、今生きている人間をなんとしてでも助け出すこと。それだけを考え、各自行動を開始して下さい」

「はいっ！」

一斉に散り行く委員会メンバー達　しかし、その中で一人だけが、そこに未だ立っていた。

「……どうしましたか、有栖川さん？」

「いえ、あの……」

あやすがわみやこ
有栖川京。

黒いおかつぱ髪、小さい横長の眼鏡をかけ、肌はこれ以上ないくらいに白い　どう見てもインドア系である彼女は、どうして自分がここに呼び出されているのか理解出来ないといわんばかりの表情をしていた。

そして、当然のように百合花はそれを見透かしていた　彼女が不思議そうな表情でそこに残り、何かを聞いたがつている事も。

「あなたが何を言いたいのか、わたくしには解りますわ。何故、自分がこのような場に出てくる必要があるのか……あなたはどちらか

「例えば、活動班ではなく、監視班や戦術班向きですもの。その気持、いたく理解しますわ」

「そ、それでしたら、どうして……？」

「そうですね。話す時間もあまりなかったので、自分の目で確かめて戴きたかったのですが……いいでしょう、手短にお話致します」

「百合花は仕方がないと言うように、

「あなたには、確か妹さんがいますでしょう。ええと、確か三つ下の」

「えっ？ はい、いますけど……それが、何か？」

「最近、妹さんとお会いしているかどうかは知りませんが、その妹さんのお友達……久峰麗華さんですわね。彼女が、今回の事件の犯人である可能性が高いのですわ」

「ええ……？ ど、どういう事ですか……？」

「有栖川さん、その麗華さんと面識がありますでしょう？」

「はい……。妹が昔、まだ私が実家で暮らしていた時に、何度か連れてきた事があります。妹の親友だ、って聞いていますけど……」

「でしたら、この場で彼女の顔を知っているのは、あなただけという事になるですよ、有栖川さん。あなたが唯一、犯人の手がかりを握っている」

「な、なんですかそれっ！ ま、まさかあの子がこんな……！」

「その可能性がある、と言うだけのお話ですわ。もちろん、真実はそうではないかも知れませんが、ですからこそ、久峰麗華さんの顔を知っているあなたが動くべきなのです。違うか違うないか、それを自分自身の目で確かめて下さい」

「百合花のその言葉に、京は驚いたようで、ただ静かに頷いた。

「……解りました。すみません、貴重な時間を割いてしまいました……」

「いいえ、いいのです。疑念を持ったままでは、作戦行動にも支障をきたすでしょう。それでは宜しくお願いしますね、有栖川さん」

「おっと、ちよい待ちな」

ふと、百合花の後ろからやってきた濠夜が、二人の話に割り込んでくる。

「なんですの？ 倉坂さん」

「ああ、そいつ使えると思ってさ。有栖川……つつたっけ。テメエ、オレと組めよ」

「は……？」

「は、じゃねーよ。オレ自身、渋谷を助けてーのは山々なんだが、その久峰麗華とやらに命を狙われてんだとすれば、そいつを叩くのが先決だと踏んでる。さっきの三人がどれだけ強いのかは知らねーが、少なくとも、そいつらが渋谷を保護したとして、守りきれる保障はどこにもない。オレなら絶対負けねーし、それなら、渋谷の保護はあの三人に任せて、オレと有栖川はその犯人探しをする。そちのほうが効率がイーンじゃねーか？」

なんとという自信だろう　と、百合花は、その言葉に頼もしさを感じていた。

「いいでしょう。でしたら、有栖川さんは倉坂さんと二人で行動して下さい。わたくしは全メンバーの指揮がありますので。何かありましたら、前もって伝えておいた連絡先までお願いしますわ」

「え？ あ、私が……えっ？」

「オイオイ。しっかりしろよ、おかっぱ眼鏡ちゃん。オレについてくるってんだ、それなりの度胸はして貰わねーとな」

「おかっぱ眼鏡……って、いやあの、そうじゃなくて……！」

濠夜、百合花の両名にそう言われ、自分が未だにどうすればいいのか理解し切れず動揺する少女　有栖川京。

かくして、彼女と倉坂濠夜の異種タッグが結成された。

別動班　三人の少女達は、棘薔薇学園校舎内へとやってきていた。

三人組の一人、金髪ロングに黒のカチューシャを着けた少女

船橋由香利は、校舎の昇降口に立つと、おもむろに周囲を見回した。
「うーん、やっぱり人物像が浮かばないと無理ね。少なくとも、犯人のほうはまったく掴めないわ」

「やっぱりですか。由香利の予知能力は頼りになると思ったんですけど」

難しい表情で目を細める由香利に答えたのは、三人組の一人であり、桃色ショートヘアの若干口リ少女、一之瀬灯である。

「渋谷さんのほうは、それなりに掴もうと思えば掴めるのだけれど……何故だか、イメージし切れないのよね。こう、フィルターが掛かっていると言うか……あー、もう！　こんな時に限って役立たずな能力なんだから！」

フューチャーサイト
未来予知　それが、船橋由香利の持つ超能力の名称である。

物事の規則性を把握し、それらを、イメージの中で再現・予想・構築する事による未来の予知　超能力とはいえ、どれだけ先を把握する事が出来るかは限られていて、良くて三分から五分程度が限界だった。

例えば、とある人物をイメージする　その人物の性格や動向、癖などを瞬時に把握できるのが彼女の特性の一つであり、さらにそれを踏まえた上で、対象の人物がこれから行う行動、即ち未来を予測する　彼女の持つ超能力、フューチャーサイト未来予知とは、単にそういった『出来そうで出来ない』事を、普通の人間には備わらない発達された機能を使い、実現する　そういう類の物であった。

もちろん、そうなると『確実性』というものが薄れてくる　今回の件についても、彼女の予知能力には調子の良し悪しがあった為か、どうしても完璧な未来のイメージを作り上げる事が出来ない状態だった。

「……ふむ。だが、それなりにイメージは出来上がっているのだから？」

三人組最後の一人である、背丈の高い青髪ポニーテールの佐久間

飛花里が問うた。

「とは言っても、良くて二十パーセントくらいよ？　なんだか霞んでる感じで、よくは解らないんだけど……まあ、少なくとも、今はまだ生きている　って事は確かね」

「まだ生きてるですね？　ならそれで十分ですよ、由香利。この敷地内にいるって事は解っていますから、後は探すだけですっ！」

「そうね。……はあ、まったく。どうしていきなりこんな事になったのかしら」

「ぼやいてる暇はないですよ！　早く探し出さないと、五分後には香奈が死んでるかもしれないんですから！」

どこか焦るように、灯が言う。

そんな少女の姿を眺めながら、由香利は微笑みとも嘲笑とも取れる笑顔を作り、

「ふうん。やっぱり心配なんだ？」

「当たり前です！　もし香奈が死んだら、紅条焰が悲しむです！」

「はいはい、素直じゃないんだから。……ううん、素直なのかしら

？　ま、そんな事はどっちでもいいとして。じゃあ、二人とも。ここからは別行動にしましょう」

「……本気か？　いや、確かにそちらの方が効率が良いと言う事は解るのだが……いくら何でも危険だろう。渋谷を保護するだけならば問題ないが、もしも犯人と出くわしてしまったらどうする？」

由香利の一見無茶のような提案に、飛花里がささず指摘した。

だが、言い出した本人である由香利は、そんな事など問題ないとしても言いたげな態度で答える。

「大丈夫よ。これはわたしだから言える事かもしれないけれど、良く考えてみて。例えば犯人が渋谷さんにその犯行現場を見られ、口封じの為に殺そうとする。でも、そこで彼女に逃げられ、この校舎へと逃げ込まれた。……そうなった場合、まさか犯人はこの校舎まで追ってくると思う？　わたし達の暮らすあの宿舎から、この学園校舎へは基本的に一本道　だけど、その間にある中央広場から、

この校舎ではなく出口へ逃げる事だつて出来るわ。でも、監視班の情報では、この敷地内から外へ出た人物は存在していない……という事は、わたしの予測だと犯人は未だ宿舎内にいる。普通ならすぐにも逃げ出すところなのに、それがないって事は、つまり、逃げ出す機会を覗っているのよ。そんな人間が、わざわざ一人の生徒に顔を見られた程度でうろつくと動き回るわけがないでしょう」

「……成る程。一理あるな」

「え、えっと。つまり、犯人はこの校舎にはいないんですか？」

「いない、とまでは言い切れないわね。まあ、渋谷さんが死んでないと確信できる以上、犯人が未だに彼女を追い続けている可能性は極めて低いってこと。ようはリスクリターンの問題よ。わたし達は出来るだけ早い内に渋谷さんを見つけ出さなければならぬ。これが最優先事項なのだし、見つければ後は犯人搜索に力を注げばいいだけだしね。と言う事は、ここは予想できるリスクを考えて、リターンを求めにいく……そういう場面よ。リスクって言うのは、万が一、犯人に出くわした場合、その危険性。その可能性の低さから見て、わたし達が手分けして行動する事による、渋谷さんの早期確保。そのリターンを考えれば、十分に実践するべきレベルよ。危険性がないとは言いきれないのが予知能力者としては少し歯痒いけれど、ね」

由香利の意をつくような予測内容に、灯と飛花里の二人は、いつもの事だが　これ以上ない頼もしさを感じていた。

これこそ、船橋由香利が、委員会直属メンバー活動班第一チーム『三姉妹』のリーダーである所以である　その頭の切れに加え、フューチャーサイト未来予知による作戦の予測・提案・指揮などの能力は、あの百瀬百合花でさえも一目置くほどのものだった。

来年の時期生徒会長、いわば委員会の次期リーダーでさえ、彼女に委ねられると言う噂さえ存在している　実際、百合花は彼女の事をいたく気に入っている上、委員会メンバーの中では取り分け待遇がいい　差別だからと本人は断っているのだが。

「というわけで、ここは別行動で渋谷さんを探すのが適切だと思うのだけれど。どうかしら、二人とも？　まだ何か意見はある？」

「ありませんです。由香利に任せますですよ」

「ああ、そうだな。これ以上この場で議論していても時間が惜しいだけだろう。ここはひとつ、その提案に乗るとしようじゃないか」

「ありがと。何だかんだ言って、二人ともちゃんとついて来てくれるから好きよ」

由香利はそれだけ言って、仲間である二人の少女へと目を合わせ、軽く頷く。

それを合図に、三姉妹、三人の少女達がそれぞれ行動を開始した。

倉坂濠夜と有栖川京の二人は、宿舍の中を歩き回っていた。

他の活動班である三人組が学園校舎へ向かったと考えれば、至極妥当な選択である。だが、京は決してそうは思っていないようだった。

「あ、あの……本当にこっちでいいんですか？　『三姉妹』は校舎の方に……」

「あん？　三姉妹、つつーのはあの三人組の事か。なら心配ねえよ、あつちに敵はいねーだろうからな。そいつらもバカじゃねーんだから、わざわざ敵のいる場所まで向かったりはしねーだろ。百瀬の言っていた言葉、忘れたのかよ？」

「……優先事項は、あくまで渋谷さんと言う事ですよね？　それなら私にも解りますけど……でも、もし犯人が校舎側にいたら、どうするんですか？」

「それならとくに捕まってるか、見つかったるだろうが。良く考えてみる、監視班なんていう大層なものがあらながら、まさか今の今まで、犯人の姿さえ見つけられなかったなんて、おかしい話だとは思わねーか？」

「それは……確かに。プライベートスペースである宿舎には、基本的に監視カメラはありませんが……この学園の敷地の外側、いわゆる入り口付近や、出入り出来そうな場所には常に設置されています。基本的に外部からの侵入を防ぐことが目的ですが……」

「事件はあくまでこの宿舎内で起きた。なら、こつから探すのが常套手段つてもんだらうがよ。委員会による騒ぎの鎮圧が行われたらしいが、逆に言えば、その騒ぎに便乗して隠れた可能性だって有り得るぜ。何にしたって、その監視班つーのが報告した内容が事実なら、敵が外へと出てないのなら、まず間違いなくこの中に潜んでいる。それは確実だろうな」

片手に懐中電灯を持ちながら、暗い廊下の道を歩く二人。

京はおどおどしながらも、なんとか濠夜の後ろに付いていた

京は軽度の暗所恐怖症であつた為、辺りをちらちらと見回しながら、肩を震わせていた。

「この宿舎廊下には監視カメラが設置されていない、その事実だけでも十分だろ。敵がそれを把握しているかどうか、そこまではオレにだって解りやしねーが……恐らく、敵はこの宿舎に潜んで、逃げる機会を覗っている。そう考えるのが妥当だな」

「初めから、この宿舎に暮らす人間の犯行だとは考えないんですか？」

「その可能性もあるだろーよ。だが、紅条つて奴が外部の人間を匿っていたつー事実がある。さらにそれがあの殺人鬼・久峰零次の妹で、決定的なのは、その妹である久峰麗華が、匿われていたはずである紅条の部屋に居なかった、つー事だ。それは、このオレが直接部屋まで行って見てきたんだから間違いねーよ。と、なると……一番疑わしいのは、その居なくなつた久峰麗華、つて事になるわけだ」

「……でも、まだ私には信じられないです。私の知ってる麗華ちゃん、いつも舞と一緒に楽しそうに遊んでただけの普通な子で……」
「へえ。で、それはいつの話だ？」

「えっと、私がこの学園に入る前ですから……二年くらい前です」
「二年か。ふん、十分じゃねーかよそんなもん。テメエも能力者なんだったら、ちょっとは理解しとけよ　オレ達の持つこの力は、生まれた時から持つてるもんじゃねえ。ある日突然、おかしなトラウマを擦り付けられて生まれた力……それがオレ達の持つ超能力つてモンだ。二年前にそいつがどうだったのかは知らねーけどな、十分すぎるんだよ。そいつがそいつでなくなるのに必要な時間なんてあつという間だ。二年なんて歳月がありゃ、人間は変われちまうんだよ」

「それは……でも……」

京の言いたいことは理解できる濠夜ではあつたものの、これ以上の問答は無意味でしかない　与えられた使命さえまっとうできない人間など、ただの足手まといでしかないのである。

「ま、とにかく今は犯人をとつと見つけ出しまうことが第一だ。あんま難しい事考えてんじゃねーぞ、おかっぱ眼鏡ちゃんよ」

「……はい、解ってます」

百瀬百合花は、司令室を兼ねている宿舍の総合管理室へと訪れていた。

部屋の中には数名の『委員会』メンバーの少女達が、とある者はヘッドフォンとマイクを使用しながら何かを口にし、またある者はコンピュータを使い、監視カメラの映像であろう　この敷地内の様々な風景を切り取られたパズルみたいに並べられた画面を通して注視したりと、深夜帯にも関わらず休む暇ないとばかりに忙しそうに振舞っていた。

「捜索班、未だに犯人と生徒・渋谷香奈は発見されていないのですかしら？」

百合花は全体を見回しながら、通常よりも少し大きめな声でそれ

それぞれの少女達に問い掛ける。

すると、代表なのだろう　一人の少女が立ち上がり、百合花のもとへと歩み寄ってきた。

「報告します、リーダー。現在のところ両名とも発見できず、校舎内部を『三姉妹』が手分けして搜索を開始したとの事です」

「有栖川さんと倉坂さんの方は？」

「わかりません。報告がないのですが、恐らくこの宿舎内を搜索しているものかと」

百合花は、そこで初めて、今まで見せなかった焦りの表情を浮かべる。

「……監視カメラに何も記録がない以上、この宿舎内部に犯人や渋谷さんが未だに残っている可能性は一番高い……。戦闘能力の低い『三姉妹』が校舎側へ向かった事は良しとしても、この宿舎で新たな騒動が起きる可能性は否定できないですわね。今、他に活動できる人材はいないのでか？」

「外部に回している監視班を回せば、なんとか。ですが、収集には数十分と掛かりますし、外を固めなければ、いつ犯人が隙を見計らって逃亡するか解りません」

「苦しい、ですわね……。こちらにはあの倉坂さんが付いていますし、まだ不安要素はそこまで多くはないのですけれど……。問題は、宿舎に住まう他の生徒達、ならびに教師、官僚の人々が被害を被る可能性がある、という事ですわ」

親指の爪を噛みながら、渋い表情を作る百合花。

元々『委員会』のメンバーはそこまでの人員を持っているわけではない　せいぜい二十数人といったところだろう　為か、現在のこの状況に対処しきれただけの人員をこの宿舎へ集める事は無理難題……事実、これが精一杯の処置であった。

掻き集めても足りず、これ以上増やす事さえ出来ない　そんな状態で、とてもではないが、現状の問題を解決するのは不可能と言っても良い。

だが、それを認めると言うことは、すなわち宿舍内に住まう人々に多少、もしかすれば多大な被害を与えてしまうことを自ら肯定することになってしまう。

何よりそれが、百合花にとって耐え難い事実なのである。

「やはり、焰さんを……。いえ、今あの人を起こすのは最善ではない」

紅条焰　彼女が今、戦力になってくれるのならば、どれだけ頼りになるだろう。

そんな事をぼそりと口に出してしまった自らの愚かさを、百合花は頭を振って後悔する。

紅条焰は今、恐らく過労によって倒れていた。

そんな彼女を無理やりに起こしたところで、一体どれだけの力になるというのだろうか。

さらに彼女の性格を考えれば、渋谷香奈が窮地に陥っていると知れば、例えどんな身体であろうとも無茶を通そうとするだろう。それだけは、百合花にとっても不本意なことではない。

だからこそ、今、ここで彼女に頼ることはできない。

「……頼りになるのは、やはり倉坂さん……ですわね。上手くやって下さる事を祈るしかありませんが……」

倉坂濠夜　彼女には少し、厄介な点がいくつかある。

それを踏まえての戦力投入だということは、誰よりも自分自身がよく解っていると百合花は思う　が、不安要素が拭い切れることはない。

百合花は、自分にできる最善の行動を取る。

それこそがリーダーであり、『委員会』メンバーを導くものとしての責任だ。

ここで指示を取ることが一番だとは理解しているし、それが自らの役目だということも把握している　だというのに、身体は疼いて止まらない。

自分の力がこんなにも役に立たないことに、齒切りする。

「……リーダー、私達に構わず行って下さい」

考えふけっている百合花に、ふと報告係の少女が口を開いた。

「え……？」

彼女だけではない　部屋の中にいる少女達、『委員会』のメンバー全員が、顔を揃えて百合花へと視線を向けていた。

「私達は大丈夫です。ある程度なら、リーダーがどこでこういった指示をするのか……なんて、大体把握していますから。何て言ったら、リーダーの透視能力は人物搜索クレアポヤンスに関して言えばトップクラスの性能じゃあないですか？」

「ええ、それはそうですね……。ですが、わたくしは」

「気にしないで下さい。これも連携、チームワークのひとつですよ、リーダー。リーダーの指示が必要ないとは言いません。ですが、今の状況をどうにかしたいと思っているのは、他の誰よりもリーダーのはずなんです。そうですね？」

百合花は　思わず自らの目を疑った。

そこにいるのは、いつも以上に頼もしさを感じさせる『委員会』のメンバー達　自分が必死に呼びかけ、仲間として集めた少女達の心強い眼差し。

そして、何よりも疑ったのは、自分の心。

行わなければならぬ義務を放り捨て、自らが戦場に赴くことに対する高揚感。

これが本当に自分なのか、百合花はそう確かに感じていた。

「……ありがとう、皆さん」

だから、否定はしない。

それが正しいのかどうかではなく、ただ今どうしたいのか、自分の心を偽らない為に。

「今回のこの騒動……必ず平穏無事に収めなければなりません。皆さんには苦勞をかけるでしょうが、わたくしも死力を尽くしますわ。ですから、この場はお任せします」

百合花がそれだけ言つと、もはや誰も返事はしなかった。

ただ一つ頷いて、各自の作業へと向かい戻っていく。

これが、自分の作り上げた、掛け替えの無い『チーム』なのだと、百合花は笑みを浮かべながら感じ取り 即座に部屋を後にした。

彼女の本当の戦いは、ここから始まるのだから。

三姉妹 その一人である一之瀬灯は、外面では強がって見せるものの、その実、内心はかなり怖がりである その事を知っているものは恐らく誰もいないし、三姉妹の残り二人でさえ知らないはずだ。

そもそも灯は、能力者ではない。

三姉妹リーダーである船橋由香利のような力を、彼女は一切持ち得ていなかった。

それでも、いつもこうした場所に恐怖しながらも立っている理由は、由香利や飛花里への信頼と、厚い友情があるからに違いなかった。

しかし、今回はそれだけではない。

灯には 一人の想い人がいた。

想い人、と言っても、相手は自分と同じ女性だ その想いが成就するはずもないし、するとも思っていない……ただ、由香利や飛花里への友情とは違う、何か別の「気持ち」が自分の中に存在している ということだけははっきりとわかっていた。

その想い人に辛い思いをさせるわけにはいかない 今回の騒動において、灯の持つ一番の行動理由はそれである。

「……、うう。でも、怖いものは怖いんですよう……」

灯は今、深夜の学園校舎内を徘徊していた。

共に訪れた仲間である由香利と飛花里とは別行動 つまるところ、彼女は今、一人なのである。

別に暗いところが怖いというわけではないが、彼女にとって、何

よりも怖いもの　それは、孤独だった。

由香利はそのことを知らないし、知らせるつもりもない灯は、当然今回の作戦において、それを理由に内容に意見を言うことも出来なかった　だからとは言わないが、こうして一人で校舎内を徘徊する灯にとって、今の状況は最悪に等しい。

由香利が悪いわけではないし、実際、この作戦は良い提案だと踏んでいる　だが、それ以上に孤独を嫌い恐怖する灯は、段々と歩む脚の速度さえ衰えて、いつの間にか地面にへこたれてしまっていた。

「ど、どうしよう……。脚が、震えて……」

ガクガクと震える自分の脚を両腕で抱えながら、その場で縮こまる灯　思わず、自分の情けなさに口惜しくなり、齒軋りをする。

「……みんなだって、一人で頑張ってるのに……。どうして、動けないんですか……!」

その瞳には涙がにじみ出し、寒い校舎の中で、次第に自分の身体までが震えだすのがわかる。

このままでは役立たずだ……。そうは思うものの、身体は心に反して恐怖で引きつっている　どうすればいいのかわからないまま、灯が嗚咽をあげようとした、その時だった。

「そこにいるの……。誰？」

ふと、少女のような声がした。

聴こえてきたのは廊下の向こう側　灯がこうして膝を抱えている教室の扉、その教室の反対側の扉の辺りに、一人の少女が立っていた。

「……え？」

見たことのない少女の姿に、思わず灯は絶句する　まさか、今回の事件の……。

（嘘……。こっち側にいるはずがないのに。ううん……。そうじゃない。まさか、本当は　!）

黒く、長い髪を靡かせながら、その少女が　見た目的には十二、

三歳程度だろうか　こっん、こっん、と廊下に足音を響かせながら、灯のもとへと歩み寄ってきた。

「ッ……！」

絶対絶命だ　　そう思い、灯は思わず目蓋を強く閉じた。

船橋由香利は、自分の担当である三階を大体のところ調べつくしていた。

他の三姉妹　　佐久間飛花里と一之瀬灯には、自分の担当の調査を終えたら、一階の昇降口にて集合、と伝えていた。

「うーん。灯は二階だから、先にあの子の様子でも見に行こうかしら。あの子ってば、どうにもトロいところがあるし……まあ、本人に言ったら怒られちゃうから言わないけれど」

一人呟きつつ、窓の外に見える夜空を眺める。

今宵は満月の夜だ　　こんなに綺麗な月夜だと言うのに、どうしても事件というものは起きてしまうのだろう。

そんなことをふと考えながら、すぐに思考を入れ替える由香利。

「予知能力……か。未来を知る力なんて、所詮は曖昧なものに過ぎないわよね」

ただそう口にして、由香利は二階へと降りる階段へと向かっていった。

「ご、ごめんなさい……。驚かせるつもりは、なかったの……」

目蓋を閉じていた灯は、唐突にそんな言葉を耳にした。

思わず目を見開いて、目の前で申し訳なさそうにこちらを見下ろす少女の顔を凝視した。

「……え？」

「あの……香奈さんの、お知り合いの人……？」

恐る恐る少女がそう問う　香奈の名前が出たことに灯は驚き、今までの恐怖心などどこかへ飛んだように立ち上がった。

「香奈を知ってるですか……？」

「は、はい。ここに……その、隠れてるの」

少女が言いながら指差したのは、まさしく灯が目前にしている教室であつた。

「この中に……香奈が」

灯は突然の事態に戸惑いを隠せない　この見慣れない少女は一体どこの誰だろう？

もしかすれば、この少女は演技をしているだけで、これは罠という可能性だって否定はできない。

だが

「……中に入っても、いいですか？」

「香奈さんが、入れて欲しいって……言ってるの。だから、私が出てきたの……」

少女の言葉に、偽りがあるとは思えない。

香奈の名前を知っているだけでも十分だといえるし、ともかく、今は彼女の言葉を信じる他に、灯に打つ手などなかった。

灯は黙って頷き、教室の扉へと手を伸ばした。

ガラガラと音を立てながら、スライド式の扉がゆっくりと開かれていく。

扉を開き、教室の中へと脚を踏み入れて　ふと、ツンと鼻をつく嫌な匂いがした。

教室の中心に、ひとつのバラバラ死体があつたのである。

一気に背筋が凍る感覚を得ながら、灯は思わず吐きそうになった口元を手で押さえる。

「……くすくす。驚いた？　お姉さん」

背後からは嘲るように笑う少女の声。

一之瀬灯は、今度こそ絶対に絶命な状況へと陥った。

倉坂濠夜と有栖川京は、一階の浴場へと脚を踏み入れていた。

食堂や手洗い場といった、人の隠れやすいスペースは、ほぼ調べ尽くした。一階で残っているのはこの場所しかない。

「……わかりました。はい、そうします……はい。では」

通話を終えた京は、折りたたみ式の携帯電話をしまつと、濠夜のほうへと向き直る。

「百瀬先輩は二階の調査を終えたみたいです。……さすがは透視能力、ですね。指揮のほうは問題ないみたいですから、あとはこの浴場を調べるだけです」

そんな京の言葉に耳を貸していたのかいないのか。浴室の中心で辺りを見回しながら、濠夜が明らかにつまらなさそうな表情を作った。

「チツ……なんだよ、結局コッチは外れだったってことじゃねーか。オレの予想が外れるなんてな。これじゃ、犯人は校舎側にいるってことが確定したようなもんだぜ」

大浴場　　といつても、その実、隠れるような場所は限られている。

濠夜は、他の生徒よりはこの宿舎の構造を理解しているつもりだが、それも毎晩、抜け出す為に色々調べたからなのだが。だからこそ、この大浴場にさえ誰一人として隠れていないことぐらいすぐに解る。

あまりに予想外な展開を前に、濠夜は本当に面白くないと言いたげな顔をして、

「ま……予想は外れたが、宿舎が殺し合いの場になるってのはどうも気が散ってならねーしな。人の気配がしない夜の校舎のほうが、

確かに戦場にや相応しいけどよ」

「……、ひとつ聴いてもいいですか？　倉坂さん」

「あん？　なんだよ」

「どうしてあなたは、そんなにも戦いたがるんですか？」

唐突な京の質問に、ただ濠夜は鼻笑いをすかして返す。

「そんなもん、楽しいからに決まってるだろーが」

濠夜にとっての行動理由なんてものは、基本的にそれだけしかない。今回は他意もあるが、根本的なものは何ひとつ変わりはないのである。ただ戦い、殺し合い、本能的な部分が、そういった『スリル』を追い求めている。

倉坂濠夜とは、あくまでそういう人間だ。

周りからは不良生徒だのと呼ばれているが　彼女にとっては、そんな呼び名さえ生ヌルい。

それこそ、彼女はただの『戦闘狂』なのである。

「……そうですか。それじゃあ、楽しければ人の命を奪ってもいいと、思いますか？」

「それはオレに道徳を説いて欲しいってー意味で言ってるのか？　それなら答えはノーだし、楽しいだけで人殺しをやってる奴つてのは、正直なところ狂ってると思うぜ。ま、オレ自身、相当狂ってるって自覚はあるけどよ」

「狂っている……ですか。……そうですね。人を殺しておいて、笑っていられる人間は、やっぱりおかしいですよね」

濠夜は、そこでようやく、目の前の少女の様子がおかしいことに気が付いた。

「……何が言いたいのだよ」

「いえ、別にたいした意味じゃないんです。ただ、そうした人間を庇おうとしている人間っていうのも、やっぱり狂っているのかなあ……って、そう思うんですよ」

瞬間、何かが濠夜の首筋に触れ　言葉もないまま、濠夜はただ目を白くしてその場に倒れた。

有栖川京は、その手にスタンガンを握り締め、それを濠夜の首筋へと撃ったのである。

「……ごめんなさい。でも、あの子がこっちにいないってことはわかったし、あなたはもう邪魔にしかならないから」

無表情のまま、京は手に握っていたスタンガンを上着のポケットへと仕舞う。

ぴくりとも動かない濠夜を背に、彼女は踵を返し、大浴場を後にした。

一之瀬灯は、背後の少女に対して何もできないまま　ただ、息の詰まる空気を感じていた。

目の前にあるバラバラの死体　教室の中は明かりも無く、それが誰の死体かは把握しきれないが　ただひとつだけ言える事、それは、灯の背後に立っている少女こそ本当に今回の事件の犯人である　と言う事だ。

「……、どうしてこんなことをしたですか」

灯は恐怖心に耐えながらも、苦し紛れに言葉を紡ぐ。

いつ殺されてしまってもおかしくないこの状況では、もはやできることなどこの程度の時間稼ぎくらいだろう　そんな灯の思惑を知ってか知らないでか、背後に立つ謎の少女は、どうやら灯の言葉に耳を向けたようだ。

「こんなこと、って言うのは一体どのことを指してるの？　お姉さんがいま見ているその死体のこと？　それとも……」

ふと、背筋を上から下に指でなぞられる感触を得る　灯は思わずうめき声をあげてしまう。

背後の少女は楽しんでいるのか、そんな行為を繰り返しながら、「あの教師を殺したこと？」

間違いない　灯は確信する。

まさかこんな場所、タイミングで犯人と出くわしてしまうとは思ってもみなかっただけに、灯の心臓は強く脈を打ち続け、緊張の汗が額から流れ落ちる。

灯の心身が伝わっているのだろうか 背後の少女はくすくすと気味悪く笑いながら、その指を灯の首筋までゆつくりと這わせた。

「ッ……。灯を、殺すですか」

「うーん。死にたくないのはわかるんだけどね？ ほら、やっぱりわたしもこんなところで捕まっちゃうわけにはいかないし。現にこうして一人殺しちゃってるから、どうあがいたって有罪で豚小屋行きになっちゃうんだもの」

「一人……？ 二人じゃないですか。その……その人と、暮風先生。二人もの人間を殺しておいて、今更逃げおおせようだなんて……」

「……ああ。勘違いしてるみたいだから、誤解は解いておくけどその教師を殺したのは、わたしじゃないんだよ？」

「は？」

「殺したのは久峰麗華。わたしはその現場に居合わせただけに過ぎないし、その時に麗華に殺されかけてた渋谷香奈さんを助けたのだから、わたしなんだから」

背後の少女の腕が、灯の背中から抱き締めるように絡み付く

その指は灯の胸元をさすり、少女は震える灯の耳元で囁くように、「勘違いして欲しくないなあ。わたしはただ、殺人鬼の妹を殺しただけなのに」

パチン、と、背後の少女はもう片方の手を使い、教室の扉付近にある電灯をつける為のスイッチをオンにした その瞬間、灯の目の前にあるバラバラ死体の全貌が明らかになる。

「な……。これって」

そこにあつたのは、見るも無残な少女の死体。

見知らぬ顔、見知らぬ服装 それは、間違はなく渋谷香奈のもものではなかった。

「ほら、やつぱり勘違いしてた。それはお姉さんの探し人じゃなくて、このわたしが探し出してようやく殺した殺人鬼・久峰零次の妹、久峰麗華なの」

「久峰……麗華……。それじゃあ、あなたは」

灯は、思わず背後の少女へと視線を向けた。

「わたしは有栖川舞^{ありすがわまい}。この学園でお世話になってる、有栖川京の妹だよ」

有栖川京は、宿舍の廊下を一人歩いていた。

暗所が苦手な彼女にとって、こうして一人で歩くのは精神的にキツイ。だが、もう後戻りはできないところまできてしまったのだ……怖いなどとは言っていない。

「あの子は……、舞は大丈夫かな……」

有栖川舞。京の妹であり、今回の事件に関わっている人物。

京は最初から、この事件の犯人が妹の舞と関わっていると言うことに気が付いていた。百瀬百合花の口から『久峰麗華』の名前が出るとは予想外であったものの、それを踏まえれば、今日の夜、唐突に妹の舞が京の自室へと姿を現したことに納得がいく。

突如としてやってきた舞は、京にとある『お願い』をした。

それは、今夜だけ委員会・監視班による監視を緩めて欲しい、とのことだった。

京は元々、監視班の代表とも言える存在だった。そのことを話した記憶はないが、少なくとも、京がこの学園を仕切るグループの一員であるということを理解していた舞は、唐突にそんな話を切り出したのである。

昔から、京は妹のお願いだけには弱い面があったのだが、今回はかりはそんなことを軽々しく引き受けるわけにはいかない。京にも、今、自分が受け持つ仕事へのプライドというものが少なからず

あつたからだ。

だが、それ以上に舞の眼差しは真剣そのものだった。姉として、妹の決意を尊重せざるを得ない。悪いことだと解つていても、久々に会った妹の頼みを簡単に無下にできるはずもない。結局、京は舞の願いを聴きいれ、指定された時間帯の監視カメラの記録を改ざんしたのである。

そして、この事件が起こった。

まさか殺人事件などという物騒な事態に陥るとまでは予想できなかった京は、なんとか事件に巻き込まれているのであろう妹を助けようと、監視班の目を盗みながら、カメラ越しに彼女の姿を探そうと必死になっていたのだが、そこで、思いもよらない事態が起こる。

百瀬百合花が、この有栖川京を捜索班へと移動させたのである。

最初は、自分のしたことがバレたのかと思った。だが、実際はそんなことではなく、今回の事件の犯人が『久峰麗華』である可能性があるということ、そして、その少女と面識があるのは京ただ一人であるということ。それが理由だった。

安堵しつつ、しかしこれではいつ監視カメラに妹の姿が映し出されるか解らない。

京は戸惑い、どうすればいいのか思考し、流されるがままに倉坂濠夜という初対面の能力者に連れまわされながら

ようやく、一つの解答に辿り着いた。

（舞が探していたのは、きっと久峰麗華……。もし本当に麗華ちゃんに犯人なのだとしたら、舞は？ ……もしかすれば、舞は最初から、麗華ちゃんの）

そう。考えれば考えるほど辻褄が合う。

舞が親友だと言っていた少女、久峰麗華。そして、その少女が今『危ない』のだと言っていた。

それを助け出す、という事は、最初から舞は殺人者である麗華に協力している。そう考えるのが自然だし、監視カメラの件だって、

麗華を逃がす為の退路を作りたかっただけなのではないか？

そして今、彼女達が見つかったという報告はない　つまり、まだ敷地外へは逃げ出していないということ。

「待っててね、舞……。あなただけは絶対に、お姉ちゃんが助けてみせるから」

それは結果的に殺人鬼の妹をも助けるということであり、同時にこの学園を敵に回すということでもある　京はそれを承知の上で、それでもかけがえのない妹を助ける為に前へと進む決意をしたのだ。

例えその先に、百瀬百合花が立っていたとしても。

「……一人でどこへ行こうというのですかしら、有栖川さん」
一人、宿舎の玄関口に立ち尽くす少女　百瀬百合花が静かにそう言い放った。

「っ……、離して下さいです！」

一之瀬灯は、背中にくっつく少女　有栖川舞を振りほどくように、強く身体を回転させる。

勢いよく舞の身体を引き剥がし、向かい合うように舞の顔を睨みつけた。

「……事実がどうかは知らないですが、あなたも立派な殺人者です！　いくら事件の犯人だからといって、殺してもいいと思ってるですか！」

先ほどまでの怯えていた姿はどこへやら、急変した灯の態度に舞は少しむくれながらも、気持ちの悪い笑みを浮かべたまま返答を口にする。

「うん、そうね。別にわたし、自分が悪くないなんて言った覚えはないけど。それに、殺した理由なんてこの際どうでもいいし」

「なっ……！」

「あなた達の目的はあくまでその久峰麗華と、失踪者の渋谷香奈さんだよね？　香奈さんならそのロッカーの中で眠ってるし、ケガもないから安心して。少しだけお話したけど、あの最後まで怯えてたなあ……あはは。ま、ともかく、わたしはここであなを殺して逃げ出さないと、やっぱり殺人者扱いで捕まっちゃうから

とりあえず、死んでおいてくれない？」

ビクッ、と灯が反応したが　そんな隙が許されるほど、相手は素人ではなかった。

一気に距離を詰められ、灯の顔面めがけて少女の掌が伸び「そうはさせないわよ！」

不意に聴こえる声が少女の注意を逸らした　その聞き覚えのある声に、灯は思わず涙を浮かべてその名を呼んだ。

「由香利ーっ！」

危機一髪　ナイスタイミングで駆けつけた船橋由香利のハイキックが、舞の後頭部に直撃した。

「きゃあッ　！」

見事に決まったその一撃が、舞の身体を勢いよく床に転がせる。すかさず由香利が灯の元へと駆け寄ると、怯えきった灯の姿を自らの背後へと守るように隠した。

「由香利……ごめんなさいです……。灯が弱っちいせいで……」

「何言ってるのよ、灯は十分によくやってくれたわ。だって、こうして時間稼ぎをしてくれたんだもの」

由香利は微笑んで、灯の髪を撫でながら囁いた。

それが今は嬉しくて、何よりも頼もしく感じられた灯は、次第に湧き上がっていたはずの恐怖心が消えていくのを感じていた。

「さてと、それじゃあ反撃開始とさせてもらうわよ。殺人姫さん？」

宿舍の玄関口と、そこから続く廊下の途中に立つ二人の少女

百瀬百合花と有栖川京は、互いの姿を一度たりとも見逃さないと
言わんばかりに見つめ合い、もしくは睨み合っていた。

いくらなんでも行動が早い　そう思う京をよそに、百合花は毅然とした態度でそこに佇んでいる。

まるで最初から、こうする事を知っていたかのように。

「どうしてわたくしがここにいいのか、不思議そうな顔をしていらつしやいますわね」

「っ……………」

京は百合花の顔をしっかりと見る事ができない　外の月光だけが頼りなこの空間で、百合花からは京の顔がわかるのかもしれないが、京からしてみれば、光を背負ってそこに立つ百瀬百合花の姿は、まるで影そのもののような存在に見えた。

「別にそこまで驚くようなことでもないでしょう？　わたくしの超能力は透視ですもの。二階にいれば、一階の様子ぐらい簡単に把握できるのですから。……まさか倉坂さんがあんな不意打ちにやられてしまうとは、少し予想外というか、期待外れではありますけれど

まあ、問題はないですわね。わたくしに不意打ちは通用しませんわよ？」

「そこを退いて下さい、百瀬先輩。早く行かないと、私の妹が危ないんです……………」

「ええ。知っていますわ」

百合花の思いもよらない返し言葉に、都は思わず絶句した。

「…………、どういう意味ですか」

「知っているですよ。わたくしは最初から、貴女が監視カメラのデータを改ざんしていたことも、妹である有栖川舞さんと宿舍内で会い、話をしていたことも…………全て知っていたのです」

「そんな…………！　じ、じゃあ、どうして私を…………？」

「貴女も不思議に思いましたでしょう？ 元々、監視班向きなはずの自分が、どうして捜索班に選ばれたのか……と」

「それは、私しか麗華ちゃんの顔を知らないから……」

「いいえ、違うですよ。あれは真実を隠す為の誤魔化しに過ぎません。本当は、貴女を監視班から遠ざける為の処置でしかないのです」

「私を……。なるほど、そういう事だったんですね」

そんな百合花の事実の証言に、京は納得せざるを得ない だが、それでもまだおかしな点はいくつも存在している。

「ですけど、それなら…… どうやって私と舞のことを知ったんですか？」

「簡単なことです。目撃者がいたからですわ」

「……目撃者？」

くれなぎはるみ

「暮風遙診先生ですよ、有栖川さん。彼女はこの宿舍の官僚も勤めています。丁度、今日は彼女が見回りの日だったのですが、その見回りの途中…… 偶然にも貴女と舞さんの会話を聞いているのですわ。そして、当然その報告を耳にしたわたくしは、同時に暮風先生からもう一つ報告を受けています。それが、有栖川舞という少女を敷地の入口付近で保護し、預かっている というお話ですわ」

「舞を…… 暮風先生が……？」

「そうですね。というより、おかしいとは思わなかったのですかしら？ まずこの敷地内に入るにはそれなりの手続きが必要です。それもなしに突然やってきた少女が、委員会や教師、官僚の目に留まらないわけがありませんでしょう？」

京はハッとする。

確かに言われて見ればそうだ 例え侵入できたとしても、すんなり宿舍の中までやってこられるとは限らない。

監視カメラのデータ改ざんは完璧だったが、それはあくまで映像記録上での話でしかない 直にその姿が見つかってしまえば、それは監視カメラ以前の問題ということになる。

「ですが、一つ問題がありました。暮風先生が貴女達の会話を聞いたのは事実ですが、消灯時間を過ぎた宿舎内では、暗闇であり姿が見えませんが、会話内容から貴女と舞さんだということは推測できますが、確証はない。ですから、貴女を一旦泳がせたのですわ。本当に細工を行うのかどうか、会話の真実を見極める為にも」

「……そうして、事件が起きたんですね」

「ええ……わたくしとしても予想外でした。まさか一日足らずの間にこんな事件が起きてしまうとは。暮風先生が殺害されたと聞いたとき、今回の事件の真相については予測できませんでした……まさか、本当に貴女やその妹さんが関わっているとは思いませんでした」

百合花はどこか悲しげな表情　　といつても暗闇ではつきりとは見えないが　　を作りながら、静かにそう呟いた。

「わ、私達は事件の犯人ではありません！　今更、こんなことを言っても信じては貰えないかも知れませんが……。舞は……。ただ……」

「もちろん、それも理解しているつもりですわ。舞さんは探し人を求めてこの場所へとやってきた……。それが誰であるかは聞かされていないようですけれど、大体予想はできます。そうでしょう？」

「……まさか、それも最初から気付いて？」

「久峰麗華。少し調べれば、貴女方との接点も見つかりました。……逆に言えば、調べなければ接点があることなど解りはしませんでしたけれど。紅条焰さんが匿っているというお話をしていた少女それが久峰麗華さんであり、今回の事件に貴女方が関わっているのだとすれば、必然的に久峰麗華を追ってきた有栖川舞、今回の事件の犯人はそのどちらか　という事になるのですわ」

ようは、友人同士の喧嘩にでも巻き込まれてしまったのでしょうか　と、百合花は笑えない冗談を付け加える。

京は驚きながらも、確かに辻褄が合うことに納得さえしていた。

「……そうですね。私もそう思って、舞を……できることなら、間

違いを犯してしまった麗華ちゃんも……救おうと思ったんです」

「この学園を敵に回してでも、ですかしら？」

「はい……。私にとって、妹は生き甲斐とも呼べるくらい、大切な存在なんです」

百合花はその言葉を聞き、少し沈黙した。

焦燥感が募る中、京は文字通り手に汗を握る状況で、

「お願いします、ここを通して下さい……！早くしないと、妹が舞が……！」

「……はいそうですか、と聞いて差し上げても良いのですけれど。

残念ながら、わたくしだけの判断で首を縦に振れる状況ではないようですわよ？」

「え……？」

暗闇の中からでもわかるくらいに不敵な笑みを浮かべながら、京の姿を見つめて言い放つ少女、百瀬百合花。

否、彼女が視ているのは京ではない。

「パートナーをポイ捨てして一体どこへ行くつもりなんだよ、おかつは眼鏡？」

京の背中、その背後 廊下の後ろから響く足音と共に、倉坂濠夜が何事もなかったかのように登場した。

「く、倉坂さん……？ どうして……」

後ろを振り返り、宿舍入口から照らされる光によって微かに見えるその姿を確かに直視した京は、一体何が起きているのか理解できないまま、ただそう問い掛ける。

「どうして、つてのはオレを甘く見過ぎじゃねーのか。まさか、あの程度の攻撃でオレが本当にやられるとも思っただのかよ？」

「そ、それは」

「まー確かに不意を突かれたのは認めるが……別にあの程度なら大したことじゃない。慣れてんだよ、そういうのにはさ。とにかく

く、話は大体聞かせて貰った。犯人がコッチにいなーってのも解ったし、いつまでもこんなところでグダグダやってる暇はねーだろうがよ」

濠夜はそう言いながら何の躊躇もなく京の隣を通り過ぎて、その先に佇む百合花へと一瞥をくれた。

「オイ、百瀬。テメエもいい加減に後輩をイジめんのはその辺にしとけ。事情は把握できたんだ、オレとおかつば眼鏡はさっさと校舎まで行かせて貰うぜ」

「……ええ、それは構いませんけれど。ですが、彼女を連れて行く理由はもうありませんでしょう？」

当然の事だと言いたげな百合花の態度に、京は内心苛立ちを覚えていた。

確かに、この状況では彼女にとって京は敵でしかない。そんな相手に情けなんてかける必要はないだろう。

だが、それでも京にとつて有栖川舞という存在は大切なものだから、それは解って貰えてもいいはずなのに。

「……ッ」

そんな気持ち胸中で渦巻いているのに、言葉にできない。

脚はその場からくっついて離れず、手に握られた汗は増えるばかり。京は自分の情けなさを同時に恨みながら、ただ黙していることしかできなかった。

「連れて行く理由、だと？」

そんな彼女の心境を知ってか知らずか、目の前に立つ少女、倉坂濠夜は、京が裏切り地味な行爲をした事など忘れたのか、それとも気にも留める必要がないのか。ただ自分の思うがままに、その口を開く。

「そんなもん簡単だろ。オレがコイツと組むって言った瞬間から、コイツはオレのパートナーなんだよ。……そんなにテメエが納得できないってんなら、納得できる理由をつけてやる。このおかつば眼鏡がもしおかしい行動に出やがったら、そんな時はオレが全力で止め

る　それでいいんじゃないのか？」

「……解りました。倉坂さんがそこまでおっしゃるのでしたら、わたくしにも止める理由がありませんわね」

観念した、といった表情で降参のポーズを取る百合花。

先程までの緊張や苛立ちはどこへ行ったのか、京はただ嬉しくて、濠夜の元へと歩み寄った。

「あ、あの……私……」

「なんだよ、おかつぱ眼鏡。……ああ、言っとくけど勘違いすんだよ。このオレにスタンガン一発くれやがった事は別に忘れちゃいねーし、許してもいいねーんだ。その借りはしっかり返させてもらう。」

全部、終わった後にな」

棘薔薇学園、その校舎　二階にあるひとつの教室の中で、二人の少女が睨みあう。

一人の少女は地面に尻を付かせ、目の前に立ち塞がる金髪黒力チユーシャの少女を見つめ　その少女は、自分が蹴り飛ばした長い綺麗な黒髪の少女に向かい構えを取る。

「随分と派手なご挨拶ね、お姉さん」

黒髪の少女　有栖川舞は、さも皮肉めいた言葉を挑発じみた口調で吐きかける。

「わたしに直撃を入れた事は褒めてあげたいけど。……お生憎様、わたしって他人に邪魔をされるのが凄く嫌いなもの」

立ち上がりながら舞はそう言い放つ　表情こそ穏やかではあるものの、その口調からは相当の苛立ちを感じられた。

そんな少女の態度を見つめながら、だが金髪黒力チユーシャの少女　船橋由香利は恐怖心のカケラも見せず、ただ余裕綽々に凜然とした態度で答える。

「あら、人殺しなんて他人に邪魔されるべき行動よ？　そうでなけ

ればこの世はとつくに殺人者で埋め尽くされてるわね。まあ、貴女みたいな幼い子供相手ともなるとさすがに論外なんだけど。とにかく灯に手を出そうとした事は戴けないし、貴女が今回の事件の犯人じゃないとはいえ、そこに転がってる死体については言い逃れできないのも事実よね。観念しなさい殺人姫、貴女はここで捕まるのよ」

「……威勢だけは良いみたいだけど。お姉さんだけで、このわたしに勝てるのかな？」

「そうね。やってみれば解るんじゃない？」

「ッ……舐めた口をつ！」

二人の少女が動いたのは同時　否、若干ではあるが、由香利が先に脚を踏み出した。

そのまま前屈みの体勢で、突進するかのように一気に相手との距離を詰めにいく由香利に対し　だが、舞はただ両手を突き出して受け止める形を取っていた。

にやり、と舞の口元が歪む。

このまま舞が由香利の身体をその両手で受け止めてしまえば、それだけで全てが片付いてしまう。

舞の持つ超能力、その発動条件は、

「お馬鹿さんにもほどがあるわよ、お姉さん！　わたしのチカラはね」

「相手に触れれば発動する、でしょう？」

ピタリ、と由香利の身体が動きを止める。

その瞬間、舞の後頭部に強烈な打撃音と共に不意の一撃が加えられた。

「な、ど、どうし……て……」

勢いはなく、ただ一度天を仰ぎながら舞はゆっくりとその場に倒れ込んだ　その背後にはいつの間にもやら、長身青髪ポニーテール

の少女　佐久間飛花里が立っていた。

「良いフェイントだったな、由香利。……気配を消していたというのに、良く気付いたものだ」

「よく気が付いた、なんて……冗談はやめてよね、飛花里。わたしからしてみれば、こんなのちよつと前から視ていた結果でしかないんだから」

「そうか、予知能力……よちのうりょく。戦闘で使うところを見るのはこれで初めてだが、なんとも存外強力なチカラだな」

「ま、予測に近いけれどね。この教室に飛び込む前に連絡しておいた飛花里の行動力とその脚の早さ、行うであろうパターンを考えれば、丁度これくらいのタイミングで来るだろうっていう結論に至っただけなのよ。……まあ、それも能力によって予測できるチカラを強化されているおかげなのだけれど」

一仕事終え、軽くため息をつきながら由香利は呟く。

後ろで見ていた灯にとっても、これは予想だにできないほど呆気ない結末だった。

「それだけじゃないです。由香利は、その子……有栖川舞の行動パターンさえも予測していた……」

「ん？　まあ、そうでもしなきゃ今みたいな一発勝負はできませんしょう。正直、わたしって賭け事はあまりしたくないし、リスクはなるべく犯さないタイプだから。さっきのだって余程確信が持てなければやらないわね、普通」

「それを成し遂げてしまうのが由香利の持つ未来予知、フューチャーサイトなのだろう？」

「やつぱり凄いです、由香利」

「やだ、何よ二人とも。そんなにおだてたって何も出ないわよ？

……それに、まだ事件は片付いていないんだから。気を緩めちゃ駄目よ」

由香利の言葉に、灯と飛花里は同時に頷いた。

そうして、飛花里は倒れる舞に触れ、気絶していることを確認

灯は教室の奥にあるロッカーへと駆け寄り　由香利は室内に腐臭を漂わせている原因、バラバラになった一人の少女の死体へと歩み寄った。

「……香奈？　しつかりするです、香奈！」

「う……うつん……」

「き、気が付いた……？　良かったです……香奈……」

ロッカーの中、膝を抱えるように突っ込まれていた少女　渋谷香奈は、灯の呼びかけに反応し、うつすらとその目蓋を開いた。

「……あかりん？」

「あ、あかりんって呼ぶなですっ！　……つと、あ……ごめんです、香奈。どこか痛いところはないですか？」

灯がその声をかけた瞬間、何かおかしなモノでも見たかのような表情をして、目を覚ました香奈が返答する。

「な、なにー？　なんか気持ち悪いよー、あかりん。どしたのー？」

「……。軽口が叩ける程度には、大丈夫みたいですな」

「香奈ちゃんは大丈夫だよー。もしかして、助けにきてくれたー？」

「そうです、灯達に感謝して欲しいです。……ま、まあ、灯としては別にどうでもよかったですけど、香奈がいないと困る人がいるですし」

「そうだねー。でもねー、残念ながらほむりゃんはあたしのだよー？」

「なっ……！　べ、別に灯は」

そこまで口にして、灯は背後から聴こえるおかしな音に気が付いた。

ぐちゃ、

ぶちぶち、

どさり。

何かが引き千切れるような音と、それが落ちて転がる音　。

「……え？」

背筋に走る悪寒に絶えながら、灯は震えた。

「どしたのあかりん？ 怖い顔して」

「み、見ちゃ……駄目ですよ、香奈」

「何……何を言ってるの、あかりん……？」

「いいから！ お願いですから何も見ないで全力でここから逃げ出してください！」

それだけ言い放ち、灯は香奈の身体をロッカーから引き出すと、そのまま隣の扉を開いて外へと押し出した。

すぐに扉を閉め 取り付けられている鍵を閉めてから、灯は後ろへと振り返る。

ドンドン！ と扉を叩く音が二、三だけ聴こえたが、それから先はもはや音など聴いている余裕などない 目の前の惨劇と呼べる惨状に、灯は身を震わせ恐怖していた。

「ひ、飛花里……。飛花里いいいいっ！」

そこには、佐久間飛花里の飛び散った肉片と。

その中心で、血まみれになって佇む少女の姿があった。

「灯！ 貴女も早く逃げなさい！」

その少女 有栖川舞に立ち向かうように、由香利は後ろを振り向かずただ叫び放つ。

だが、今の灯にはどんな言葉さえ届きはしない。

恐怖心 目の前でバラバラ死体になった飛花里の亡骸に、灯の意識は釘付けにさせられてしまっていたからである。

「……うふふ。侮ったようね、お姉さん。これで貸し借りはチャラ、つてところ？」

「なんてことをしてくれたのよ、貴女……！ 飛花里は……飛花里は、わたし達の大切な……ッ！」

激情をあらわにしながら叫ぶ由香利と、愉悦と恍惚で満たされた表情で頬についた血をぺろりと舐める舞 一刻前と完全に立場が逆転した二人の間に、言いようもない殺伐とした空気が漂う。

「ともだちねえ。結局は赤の他人でしかない相手なんて、そこまで気にかかるほどのものなの？ 少なくとも、わたしからしてみれば……ともだちなんてものは所詮、虚像でしかない」

由香利と舞の間にあるもう一人の少女のバラバラの死体 有栖川舞が殺害した少女、久峰麗華 その成れの果てを、どこか哀愁のようなものが含まれた表情を浮かべながら、舞はそれを見下ろして呟いた。

このとき、背後で彼女らの様子を覗っていた灯は、正気を取り戻しつつあった それと同時に、由香利の勝利を確信さえる。

(……由香利は、灯達にとって一番頼れる立派なリーダーです。一度破った相手を、二度破れない事は絶対でない……！ 未来予知で相手の動きがわかる由香利なら……、由香利なら必ずあの子に勝ってくれるはずです……！)

しかし、未だ不安定な精神状態である灯には気付かない 否、気付けない。

自分のその考えが、ただ一つの願望から生まれていることに。

船橋由香利が勝たなければ確実に自分は死んでしまう、その事実から逃れたいが為の一種の現実逃避が、彼女にとある現実を知らしめない。

激情に身を任せ、精神が不安定であるひとりの少女に、そのチカラはあまりにも手に余る存在だということを。

「わたしねえ、解るんだよお姉さん。 未来、視えないんでしょう？」

「な………」
フューチャーサイト

「未来予知、だなんてご大層な名前を持った能力みたいだけど。所詮のところ、今のお姉さんには過ぎたチカラ。とてもではないけれど、そんなお姉さんに負けてあげられるほど、わたしってヒマじゃないのよね」

まるで見透かしたかのような少女の発言に、驚いたのは由香利ではない 灯であった。

「ど、どういことです……？ 由香利、どうして黙っているんですか？」

「……ッ」

「由香利いつ！」

返事は無く　ただ悪魔的に微笑みながら、その右手を広げて突き出す舞だけが、その場からゆっくりと歩み始めた。

灯は依然として動くことが出来ず　由香利もまた、迫り来る魔手さえ払えずに、

「……、灯。最後のお願い。逃げて……早く」

ただ懇願するように、背後で見守る少女に向けて別れの言葉を告げた。

「な……何を言ってるですか、由香利！ 由香利なら……未来が視える由香利なら、そんな相手一人ぐらいどうとでもなるはずです！
なのに、どうしてそんなこと……！」

「視えないのよ。……おかしいことにね。その子の言う通り、もう今のわたしには何の未来も視えていない」

「そ……んな……」

「だから勝ち目はゼロ。今のわたしや貴女は、ただ何の力もない普通の女子高生と変わりはない。……そんな人間が、二人して殺人姫に勝てるわけがないでしょう。逃げることもね。だからせめて、灯だけでも逃げて」

「ゆ、由香利は……？ 由香利はどうなるんですかつ！」

「死ぬんだよ。今ここだね？」

そう言い放ったのは、他の誰でもない　有栖川舞だった。

それと同時に、由香利はその場から跳ねるように舞の胸元へと跳び込んで、

「逃げなさい！ 灯っ！」

「い……、いやあああああああああああああつ！」

その刹那　由香利と舞の身体が触れ合うその直前の時　灯の中から理性が失われ、感情が失われ　ついに、恐怖心さえもが消

え去った。

叫ぶと同時に　いや、叫ぶ前からかは灯自身も覚えてはいないが、彼女の脚は本能と掛け離れて動き出す。

駆け出したことさえ記憶にないまま、自分が何をしたのかわんて、そんな些細なことさえ気付かずに。

「……、え？」

そうして、気付けば由香利の服を掴んでいた。

そうして、気付けば由香利を思い切り引っ張った。

そうして、気付けば

一之瀬灯が、絶命した。

「は……？」

由香利は何が起こったのか理解できないまま投げ飛ばされ、教室の端で仰向けになりながらその一部始終を目撃した。

最初は、どうして自分が死んでいないのかと疑問に思った。

次に、強烈な衝撃が背後を直撃した。

最後に、目の前で一之瀬灯が死んだ。

膨らませた風船が破裂するかのように、赤い血しぶきを飛び散らせ、グロテスクな肉片を撒き散らしながら。

「あら、ちっちゃいほうが先に死んじゃったね。弱虫だと思ってたけど、結構やるじゃない。……ま、それで死んでちゃ意味ないんだけど。あははは」

由香利は、自分でもわかるくらいに強く音を立てて歯軋りをした。許せない。

目の前の殺人姫さつじんぎのことが。

そして、何よりも。

親友を守れなかった自分の不甲斐なさが、許せない。

「……わたしのすべきことが決まったわ、殺人姫」

ゆらりと立ち上がり、いつよりも冷静に　先ほどの激情の欠片

も覗えず、ただ微笑さえ浮かべるほどの余裕を見せつけて。

「な、なに？ 二人も殺されて、ついに頭おかしくなっちゃった？」

「おかしいのは最初から貴女のほうよ。……面白いわ、面白過ぎて
ついついニヤけてくるもの」

「……、まさか」

「視えたのよ、殺人姫。 貴女之最期って言う未来がね」

百瀬百合花は、薄暗い廊下の中を歩きながら、監視班のもとへと
向かっていた。

これからは自分の出る幕ではない 相手の居場所がわかった以
上、今度こそ総員の指揮にあたるべきだ。

万が一、ターゲットを逃すことがないように 自分のすべき善
処を尽くす、そうでなければいけない状況に今、彼女は立っている。
（三姉妹や渋谷さん、倉坂さん達……。皆さん無事に帰ってきて下
さると、わたくし信じていますわ。ですから……）

祈るように思いふけながら、百合花は歩みを止める。

百合花の透視能力は、基本的に暗闇さえも透視する だが、そ
れは意識すればこそその話であり、実際に普段は能力を使っていない。
その為か、最初はその先に誰かが居るとは思わなかった。

ふと気配に気付き、能力を行使してその姿を確認して 初めて、
そこにいる人物に気が付く。

そこには、

「こんばんは、生徒会長さん。 なんだかお困りのようですね」

紅条焰が いた。

綺麗なオレンジ染みたセミロングの髪をほどいて下ろし、いつも
とはまるで違う雰囲気 少女然としたものを漂わせながら。

「焰……さん？　いいえ、あなたは」

「ん、私は焰ですよ？　なんだったら、香奈つぼくほむりやんでも別に構いませんけれど。とどのつまり、あくまで私は焰でしかないんです。……まあ、私、というよりは、私達……と言ったほうが解りやすいかも知れないですけど」

「私達で焰、ですか。……それはまた、面白い言葉遊びですわね」

「遊びもなにも、そのままの意味と受け取ってもらえれば結構です。正直な話、ずっと起きてこない兄の不甲斐なさ少し頭にきたんですよ、私。一応、あの戦闘狂さんにおぶられている間にある程度のは話は聞きましたけど。妹が出てきて良い事になってるのは、あくまで兄の感情が不安定になった時の抑止力……という状況だけですから、出てこようかちょっと迷いましたけど」

「……やはり、あなた方は」

百合花は確信めいた言葉を紡ごうとして、不意に焰の人差し指が百合花の口元をそつと押さえた。

「秘密は、最後まで取っておくのが筋つてものです。ね？」

「……わかりました。今は、そのお力をお借りできますかしら？」

「ええ、もちろん。その為に無理して出てきたんですから」

焰は、今まで見せたことがないくらい気持ちのいい笑みを浮かべて、

「さてと。それで、どこにいますか？　せいぜい廃棄物処理場にでも送られるのがお似合いな、生きている価値もないゴミ屑は」

船橋由香利は、馬鹿だとは思えない自分を心底嘲笑うしかなかった。

彼女の未来予知は、フューチャーサイト行使する人間の精神状態に大きく依存するというのも、基本的に相手を冷静に分析し、その未来を予測しな

ければならない能力である為、予知能力者は常に安定していなければならぬのである。

だが、今の由香利に精神を保つことなど無理難題　　つまるところ、今この瞬間でさえ、彼女には対峙する敵の未来なんて見えていなかった。

けれど、ここで負けるわけにはいかない。

彼女には果たすべき役割ができた　　親しい友人、自分の片割れ達と言っても良かったほどの少女達が二人殺され、由香利の生きる目的なんてものは全て崩れ落ちた。

だからこそ彼女は戦い、勝たなければならない。

狂った殺人姫さつじんきのやり方を否定する、否定しなければならない一人の能力者として。

見境がなくなった、などと言われてしまっても言い訳はできないだろう　　未来が視える、という虚偽を騙ったのだから。

「……未来が視えるだなんて、平然と言えるものじゃないのに、ね

—

今現在、彼女の近くにあの殺人姫さつじんきはいない　　予知能力の復活はあまりに分が悪いと判断したのだろう、窓から飛び降りたのである。この教室は二階にあるため、そこまで痛手にはならないだろう　　だが、由香利にそこまでの身体能力は無く、当然飛び降りた先で待ちつけられる可能性も考慮して教室の扉から飛び出した。

だが　　この未来でさえ、敵からすれば由香利には視えたはずだ。それでもそれを予測できず、窓から逃げるといふ行為を見逃した瞬間から、由香利の予知能力復活説は怪しいものになってしまふ。

「これでもう恐らく後はないわね……、まずは落ち着いて本調子を取り戻したいところだけれど。……ああ、無理。絶対無理よね　　未だにこれが夢なんじゃないかって疑うくらいなもの」

一人、学園の廊下を勢いよく走りながら、せめてまずは救援を求めに戻るべき　　とまで考えて、しかしそんな当たり前の思考を止めた。

口調こそ冷静に見える彼女の胸中では、有栖川舞という殺人姫さつじんきを討つことばかりが渦巻いていた。復讐の悪鬼にも似た憎悪を握り締め、ただ敵を追いかけて捕まえる為だけに走り続ける。

自分の命など問題ではない。今すべきことは、あの敵を捕まえて死よりも苦しい人生を歩ませるといふ未来を掴み取ることだけだ。（ごめんなさい、飛花里……灯……。貴女達の弔いは、全てが終わってからきちんとするわ。だから今は……少しだけ、待っていて）後ろ髪を引かれる思いをしながらも、由香利は背後を振り返らない。

ただ決めたから。自分の成すべきことをまっとうする為に、彼女は駆け抜ける。

階段を飛ぶように降り、一階の廊下を突っ走って昇降口から外へと繰り出した。

外に人の気配はない。恐らくは裏側だろう。

冷たい夜の風が吹き付ける中、由香利は間髪いれずに行動を再開した。

棘薔薇いばらびばらの園その、と呼ばれる場所がある。

校舎の裏側に位置するその場所は、その名の通り棘と薔薇に包まれた庭園だ。

校舎の半分程度ではあるが、それでも広大な裏庭として有名であるその庭園の中に、殺人姫の少女は姿を隠していた。

二階の教室、その窓から飛び降りた先に待ち受けていた棘の群れ。それらに予想だにしない傷を負わされた少女は、血の流れ出る二の腕を右手で抑えつつ、花陰に隠れて外の様子を探ろうと必死になっていた。

未来予知能力者。上手く騙されたものだ、と少女は思う。

冷静になって考えてみれば、この時点で自分の未来を見透かされ

ていないことが解る。

ようは相手の口先にまんまと惑わされた、ということ。

そして、焦って動いた結果がこのザマだ　あまりに滑稽な自分の姿に、少女はつい肩をすくめて苦い笑みをこぼす。

状況は一気に不利なものになった。

恐らく、あの予知能力者は強力な増援を呼ぶだろう　そうなたとき、果たして自分に勝機があるのだろうか、と想像する。

「……ふふ。嫌なものね、勝ち目の薄い未来を予測するのは。あの未来予知のお姉さんにしてみれば、全ては当然の出来事でしかないんだろうけれど」

それでも、と少女は思う。

この学園から逃げ出す　ただそれだけで、自分の役目は全て終える。

目的は達成した。

あとは、自分を待つ人のもとへと帰るだけ

「ようやく見つけたぜ、お嬢ちゃん」

不意に背後から声がした。

聞き覚えのないその声色に、思わず少女は振り返る。

「あ……貴女は？」

黒い短髪をボサボサと仕上げた少女　倉坂濠夜は不敵に口の端

を吊り上げて、

「ああ、気にすんなよ。ただのしがない戦闘狂ってヤツさ」

目の前の少女がそう言い終わった直後、舞は眉を顰めてその場から飛び退いた。

迷いもせず背中を向けて駆け出す少女を眺めながら、濠夜は頭を

掻きつつ呟く。

「……オイオイ、せっかちな。こんな身動きの取り辛い場所で追いかけてこてもやるうってのか？」

面白エ　と付け足して、濠夜は少女の後を追いつける。

この棘薔薇の園は思ったよりも広く、生い茂った草花たちがまるで生きた迷宮のように複雑な道を作り出している　その為か、あの廃工場と同じく、障害物だらけの空間での戦いになることは必死に見えた。

「にしても悪趣味な場所だな。こんなモンを裏庭に作るうなんてよく思えたもんだ。ま、あの百瀬の野郎ならやりかねないっちゃあそうなんだが」

そんな場所で、濠夜にとって何より厄介なことは　この障害物が「生きている」ことである。

廃工場にあった障害物はただの有機物であったが、今回のモノは生物だ　これらを濠夜の能力でどうにかするには、いささか加減が必要になる。

殺さずに済むよう手心を加える　というのは、彼女にとってはなかなか難題なのであった。

「教室に転がってあった死体はおかつぱ眼鏡に任せるとして、さつさとあのガキを捕まえて終わらせたいんだが。ハッ、やっぱオレにこう言うのは向か　」

ずきん、と。

突如として、濠夜の脳天に割れるような痛みが襲った。

「　ッ、が、はア」

ぐらりと視界が揺れ、立っていることすらままならず　濠夜は無意識のまま、地面に膝をつけていた。

右手でこめかみを押さえながら、苦い表情を浮かべて軽い舌打ちをひとつ。

「チッ……もうそんな時間かよ」

慥むような声色で呟きながら、未だ痛みの治まらない重い頭を上

げる。

面倒くせえ 胸中で吐きつつも濠夜は立ち上がり、逃げ去った少女が向かった先へと視線を向け、揺らすことさえ辛いはずの頭を抱えながら歩き出した。

「なーにやってんだろーな、オレは……」

渋谷香奈 濠夜の友人である彼女はもうすでに助かった。

校舎入口で鉢合わせた彼女は間違いなく生きていたし、怪我一つ負っているわけでもなかった 濠夜にとって今回の事件に首を突っ込んだ理由は彼女の救出だし、それ以外のことなどはどうでも良かった。

だから、本来こうして殺人鬼の少女を追いつけ回すような行為は、彼女には無意味でしかない いつもなら、関係ないからと放っておくだろう。

だが、それでも濠夜がこうして立ち上がった理由 それは。「渋谷はこつち側にいてイイ人間じゃねえ。アイツはあつち側にいるべき存在だったんだよ。ソレを無理やり引きずり込みやがったヤツがオレの目の前にいる……ハッ、確かにこのオレが動くにや十分な理屈か」

濠夜にとって、渋谷香奈という存在は普通の友人とは少し違うよく共に活動する綾峰雫やその他不良グループメンバー達とは一味違ったその少女は、あくまで濠夜とは違う場所において、だが同じ空気を吸うことのできる唯一の人間だ。

その少女が今、自分と同じ場所に立ってしまおうとしているそれは濠夜にとって決して望ましい事態ではない。

濠夜は手遅れだと解っていても、無関係なモノを巻き込んだ存在を許さない。

自分を巻き込もうとするモノ、自分と同じ場所に立つモノには容赦しないが 関係のないモノには絶対に危害を加えないし、加えようとするモノにこそ手加減しない。

それが 倉坂濠夜という少女の持つ、異常に佇む能力者として

の本懐だった。

「……さあて。時間もヤバくなってきやがったコトだし、そろそろ遊びの時間は終わりだぜ」

いつの間にか歩んでいた脚の速度は増し、棘に囲まれた庭園を駆け抜けて　ようやく、目の先に殺人鬼の少女の姿を見つけ出す。

三秒、四秒　五秒。

五秒間による視覚で対象の認識　これが濠夜の持つ能力の発動条件であり、彼女の能力はその空間に存在し、視覚で認識し得る物質全てに効力を影響させる。

そのチカラとは

「堕ちろよ、小娘。オレの目の前でその身体ごと地面に這い蹲りやがれ……！」

がくん　と、逃走に全力で駆けていたはずの少女の身体が崩れた。

まるで重い錘が押し掛かったかのように、その場で両手足を使つて四つん這いの格好で当惑と苦悶の表情を浮かべる少女　有栖川舞。

「な、なに……？　一体、なにが……くあつ！」

「どうだ、初めて味わう感覚だろ？　テメエの背中には別に何もありませんねーんだぜ」

グラビテーション

重力制御　対象の空間内に存在する物質へと掛かる重力量を自由自在に変換し、操る超能力。
ベクトル

質量だけではなくその方向さえも操作するこのチカラは、こと戦闘においては発動条件こそ厳しいものの、一度相手を捕捉してしまえば関係なく思うがままに蹂躪してしまう。

対人において、これほどまでに便利な能力はない　人体の耐えられる重量を超過させて死に迫いやることもできるし、動けない程度に捕縛して殺さず捕らえることも可能である。

もちろん相手を五秒間以上視覚で認識しなければ発動はできない
紅条焰や久峰零次は廃工場のスクラップを盾に身を守っていた

が、この庭園にはそこまで身を隠せるほど密度のある物質はあまり存在しない。

相手の姿さえ確認できれば問題はないのだから、この勝負、初めから濠夜にかなりの分があつたという事になる。

それでもここまで相手を自由にさせていたのは、それだけの自信があつたからこそだった。

「重い……、わたしに一体なにをしたの……ッ」

「んなもん教えるわけねーだろ、バカ。　ああ、こうして加減をするのは久しぶりだから、死なねー程度には我慢しといてくれると助かるんだが」

「……あくまで殺す気はない、ってこと？　あは、甘いね」

「殺さないことが甘さに繋がるだとか勘違いしてやがんなら、 teme のほうがよっぽど甘ちゃんだと思うがな」

「知つたような口を……！」

庭園を抜けた先　校舎が隣に見える裏庭の敷地に、有栖川舞は身動き一つ取れないまま挑発するように濠夜へと視線を向ける。

殺されないと知つたからかどうかは解らないが、濠夜にはその光景がまるで滑稽にしか見て取れなかった。

「temeエさ、オレが言うのも何だが　狂つてるぜ、心底な」

「……能力者なんて所詮は異常者の集まりでしょ。こんなチカラを手に入れて、真つ当な精神（まこと）でいられるヤツのほうがいいと思うわ」

「そうやって被害者ぶつてりや気が済むのかよ、temeエは。……自分が能力者だからって節度を持って生きてるヤツつてのは、オレの周りにや少なからずいてやがんだ。オレ自身がそうだとか自惚れたことを言うつもりもねーが、そうやって生きる術を見出して、正常なヤツらと同じ空気を吸おうって……それでもこつち側には巻き込まないようにようつて、それがオレ達の唯一掲げられる『正義』つてヤツじゃねーのか？」

「正義……？　はっ。子供みたいな理想しか掲げられない大人が、

本当の子供の気持ちなんて解るわけない」

「ああ、わからねーよ。テメエの気持ちなんざ知ったこつちやねえ、どうでもイイねそんなことは。それより大事なのは……テメエを許せねー理由はただひとつしかねーよ。オレ達の理念に土足で脚を踏み入れて、関係のないヤツらまでも巻き込みやがった。理不尽なんだよ、テメエのやつちまったことは。絶対に許されることじゃねえ」

そうして、濠夜は一步步舞の元へと歩み寄る。

もう喋る気力さえなくなしたか、観念したのか。舞はそれ以上何も喋らず、抵抗さえ出来ないまま地面に這い蹲って目蓋を閉じた。

「悪イが少し手荒にさせて貰うぜ。さっさとテメエを捕まえて、あの百瀬の奴に」

どくん　と。

強く心臓の跳ねるような鼓動音が、唐突に濠夜の脳裏に響き渡った。

「が……は」

目眩が襲い掛かり、刹那　視界がブラックアウトする。

その瞬間。

有栖川舞に掛かっていた重力の枷が、何事もなかったかのように解かれた。

「っ　しまっ……！」

一瞬で自由を得た舞は、背後で立ちくらむ濠夜の姿を見て　先程までの苦悶の表情など消し去ったかのように、口元をひどく歪めて駆け出した。

「あははははは！　なんだか良くわかんないけど！　詰めが甘かったみたいだね、お姉さん　！」

舞はその右手を伸ばし、飛びかかるように濠夜の頭部を、

「倉坂さん！」

ガシツ、と。

飛び入るように現れた船橋由香利の左手が、舞の右腕を掴んだ。

「ッ……、あなたはどこまで私の邪魔をすれば気が済むの……！」

「お生憎様。仇は自分の手で取らなきゃ気がすまない夕チなのよ……！」

由香利はそのまま押さえつけるように舞の身体を地面へと叩き付け、その左腕も封じ込める。

顔を地面にへばり付かされ、舞は憎らしげな表情で　だが、口元を歪ませたまま。

「ああ、そう。それはとても素晴らしい心意気だとは思っけど。

残念ね、お姉さん。あなたはこのわたしに触れた時点で、すでに死んでしまっているの」

え？　と、由香利は疑問の表情を浮かべる暇さえなかった。

最初に崩れ堕ちたのは自分の腕。

ボロボロと、自らの肉片が零れ落ちるようにバラバラに落ちる。

そして連鎖するかのごとく、船橋由香利の身体は一瞬にして破裂

し　血飛沫ごと、舞の背中へと飛び散った。

濠夜は、朦朧とする意識の中でその光景を見た。

自分の目の前で無残に死に行く少女の姿。

そして　もうひとつのモノを凝視する。

血塗れになり、黒い髪が赤く染まった殺人鬼　愉悦の表情を浮

かばせて、ぺろりと舌で頬の血を舐める異常を。

「く……そ。なんで……こんな、ときに……ッ」

力も入らず、ただ地面に身を委ねるかのように　濠夜はその場

に倒れ、意識を失った。

有栖川京は、教室に散らばる死体を見てもいられず、扉の外で百瀬百合花の到着を待っていた。

転がっていた三人の死体　こんなものを任せられても、彼女にはどうすることもできない。

有栖川京は、その実ただの一般人であつた。

超能力など持ち合わせていない彼女にとつて、今回のような事件において出来得る事など限られている　それこそ監視班などがお似合いだというものだが、今回ばかりにおいて、彼女には『動く理由』ができた。

妹である有栖川舞の救出　しかし、事態を見ればもはや手遅れだつたということは一目瞭然に等しい。

こんな結末を認めたくは無かつた　が、現実には彼女に辛い事実を突きつける。

「舞……どうして、こんな……」

できる事なら、こんな結末を目の当たりにしたくはなかつた。

部屋に転がっているその死体を直視して、それでもなお、これは虚像に違いないと何度も心の中で頭を振り続けた。^{かぶり}

だが、それでもその光景が消え去ることはなかつた。

あふれ出る涙が京の視界を塞いだことが、かろうじて彼女の精神を崩壊させずに済んだものの　教室を飛び出した後に残る彼女の心中では、認めざるを得ないその現実を確認しなければならぬという責任感が渦巻く。

けれど　果たして自分は、その現実を受け入れられるだろうか？
京は思う。

この扉をもう一度開いたとき、自分は正常のままでいられるのだろうか、と。

それに、それだけではない。

窓から照らしつける月の灯りだけが頼りな夜の校舎　その廊下に一人立っているだけでも足が震える思いだというのに、そんな状況下で恐怖すら凌駕するモノを直視などできるわけがなかつた。

「　なんて、いつまでも逃げてちゃいけないよね……舞」

その時　京は、自分でも何をしているのか理解していなかつた。

ただそうしなければならぬ、と言う感情が彼女の身体を無意識に動かせる。

怖いはずだ、悲しいはずだ、苦しいはずだ　けれどそんなものを通り越して、彼女の中に断固として貫き通したい意地がある。迷いはない、後悔するはずもない。

今、自分がこの目に焼き付けようとしている光景は、まさしくこの自分が引き起こしたといっても過言ではない惨状　その成りの果てを見届け、責任を負うことが自分にできる唯一の事。

だから　身体が動く。

怖くても、悲しくても、苦しくても。

その先にある光景が、全ての終わりへと繋がると信じて。

そうして　京は、震えたその手でゆっくりと扉を開いた。

「　ああ。やっぱり、だめだった」

教室の中心にあるもの　ただそれを視界に納めてから、彼女はぐたりと床に膝をつく。

外した眼鏡が転げ落ち、ぽろぽろと零れ落ちる涙が止まらない。

ただ懺悔するように、京はそこにある死体をしっかりのその瞳で確かめながら呟いた。

「ごめんね……何の役にも立てないお姉ちゃんで、ごめんね　舞」

教室に転がり散らばっているバラバラ死体の数は　三。

その内の二人　『三姉妹』のメンバーである少女、佐久間飛花里と一之瀬灯。

そして。

最後の一人、その少女の名前は　。

「　こんにちは、殺人鬼のお嬢さん」

背後から聞こえた聞き覚えの無い声に、殺人鬼の少女は思わず振り返る。

そこにいたのは、オレンジに近い紅色の髪の少女　気配さえ気付けなかったその相手に、殺人鬼の少女は咄嗟に身構えた。

「な、何者……？」

「私は貴女がそこに転がした女の子のお友達。　で、貴女は誰？」

「……ふん、増援つてわけ？　そんなに必死になって、たかが一人の子供を捕まえたんだ」

「御託はいらないし、話を逸らさないで。私はキミが誰なのかって聞いているのよ、お嬢さん？」

敵意のない笑みで、敵意のある言葉を放つ紅髪の少女。

それに少し気味の悪さを感じながら、殺人鬼の少女は答える。

「……わたしは有栖川京。この学園に通う有栖川舞の　」

「ねえ、久峰麗華さん。口先だけのごまかしはどうでもいいから、一体それがどういう事なのかを教えてください？」

「ど……どういう意味？　わたしは　」

「久峰麗華さんでしょ？　久峰零次の妹。殺人鬼の妹の殺人鬼。うん、真実の殺人鬼って言ったほうがいい？」

「……、は。はは　」

とたん、殺人鬼の少女は口元を吊り上げ　笑い出した。

「あはははは！　凄いいねお姉さん、あなた何者？　誰にも話したことはないのに、誰もが騙されているはずなのに　まさか知ってる人がいるなんて！」

「……別に何者でもないけれど。ねえ、真実の殺人鬼さん　人を殺し続けるのって、そんなに楽しい？」

「ふん、行為に快樂しか求めないなんてのは大人のやることだよ。わたし達子供はね、いつだって純粹無垢であるべきなの」

今更言うまでもないが　久峰麗華は、生粋の殺人鬼である。

己の両親をその手で惨殺してから　兄に庇われ、共に逃亡生活を続けてきた彼女の中には、いつの間にか人を殺すことへの快感　純粹な破壊衝動が宿っていた。

それから一年と経たないうちに、麗華はいつの間にか備わってい

た力を使い、街で殺人を犯した。

そうして行為を繰り返し、街では次第にとある一つの噂が広まる事となる。

殺人鬼、久峰零次の存在。

だが、それは正確に真実ではなく

「それで上手く正当化したつもり？ そのツケを支払っているのは貴女のお兄さん 結局は大人なんだってことを自覚してる？ ……

ま、言うておくけど私って屑には容赦しないから。痛い目に遭いたくなかったら、それが一体どういう事なのか早く説明しなさい」

「……どうもこうも、わたしが本物の久峰麗華だった。それだけのことでしょ？」

「そんな事、他で聞いた話から考えればすぐに推測できるわ。最初に死んだ暮風先生の死因と、そこに転がってる死体の死因がまったくの同一だし。犯人は統括して同じ人間 殺人鬼の妹である久峰麗華がこの宿舎に潜んでいて、それを探しにやってきた只の一般人である少女が有栖川舞。 うん、そこまでは解るんだけど」

紅髪の少女は淡々と語り、そして殺人鬼の少女 久峰麗華を見つめ、

「どうして、同じなの？」

ただ、それだけを言った。

「……ふうん。頭の良さそうなお姉さんでも、そこだけは解らないんだ はは、いいよ。特別に教えてあげる」

少し勝ち誇ったような顔をして、麗華はあざ笑うかのように語り始めた。

ドッベルゲンガー

「多重存在、って言うてね。つまるところ、わたしと有栖川舞は同じなの。と言っても姿形や声色、年齢が同じなだけで中身はまったく違うわけだけど。……知ってる？ 多重存在^{ドッベルゲンガー}って、出会った瞬間から相手に抱く感情が決まってるの。

相手を消したい、相

手を破壊したい。そういう衝動に苛まれ続けるんだよ」

久峰麗華と有栖川京の会いは、何の変哲も無い　夜の街での邂逅である。

いつもの日課を済ませた麗華が偶然道端で見かけた少女、それが有栖川舞であった。

「……まるで廃れた都市伝説を聞かされている気分ね」

「信じる信じないは自由にすればいい。……で、ここからが本題。」

わたしは元から殺人鬼だったから、舞に対して抱くこの衝動が、果たして何の所為なのか解らなかった。舞はそんな感情と向き合ってたみたいけど、わたしにしてみればそんなのは滑稽でしかない。

わたし達は、出会った瞬間から辿る運命を決められているんだもの」

最初に舞を目視したとき、麗華は鏡を見ているような錯覚を覚えた。すぐにそれが勘違いだと気付いた麗華は、自分と瓜二つの姿をした少女に思わず声を掛けていた。

その瞬間から溢れ出すような破壊衝動に襲われていたが、それこそ慣れたものだ。

その日はすでに事を済ませていた麗華にとって、その衝動をセーブすることは容易いことだった。むしろ、こんな感情は常日頃から得ているし、違和感を覚えることがない。

自分と同じ存在　多重存在トッベルゲンガーという言葉を知るのは、舞と出会ってからしばらくしてのことになる。

「舞はね、言ってた。わたし達は友達だから、こんな気持ちはきつと間違いだ。って。それから、二人してお互いの姿を出来る限り違えるようにしたの。髪型を変えたり、服装の趣味もまったく違うものにして……まあ、それでパツと見は全然違う女の子二人に見えたと思う。……でも、そこまでしたって舞は相変わらずだし、わたしは殺人鬼をやめられなかった。結局出した結論は、もう二度と会わない。それが一番お互いの為になる、そう舞が言い出したの」

思い出すたび、麗華は冷静に保っていた表情を歪ませる。

もう殺した相手のことだ　何を気にする必要がある？

そう思い、だが 思い返すたびに、苦しい気持ちが麗華の胸を痛めつけた。

「その時のわたしの気持ちがお姉さんに解る？ 結局、わたしは自分が得ていたこの感情が、本当にただの殺人鬼だったから得たのか解らないままだった。もしそれだけが原因だとするなら、舞はどうしてあんなにも苦しんでいたのかって。先に声をかけたわたしのことを、本当はとてつもなく嫌悪していたんじゃないかって……ね」

「……ドッベルゲンガー多重存在、ね。それで、どうして貴女は舞さんと同じ姿に戻ったわけ？」

「わたしが戻したわけじゃない、あの子がそうしたんだよ。わたしと瓜二つの昔の姿に戻って……二度と会わないって約束してから一年経った今になって、舞はわたしの前に現れた」

麗華の前に再び姿を見せた少女 有栖川舞は、街で殺人を繰り返す久峰零次の噂を耳にしたと言い、麗華の身を案じたのだろう約束を破ってまで彼女を助けようとしてきたのである。

だが、麗華がその時に得た感情は

「舞は知らない。わたしが街で殺人を繰り返していること、わたしの兄は本当の殺人鬼ではないってことも。あの子はわたしを助けるって言ったけど そんなのは結局、殺し合うことしか知らないわたしと舞では無理な話。相容れない二人の多重存在は、最後の最後まで手を取り合うことができなかった つまるところ、これはそういうお話」

「……そうして、結局貴女は舞さんを殺す決意をした。つまり、先にこの学園へやってきたのは久峰麗華じゃない 有栖川京だったのね？」

「そう。まあ、あの様子じゃわたしが手を出さなくてもいつか精神のほう^{こころ}が先に折れちゃうんだろうけど。 うん、殺す前にはもうすでにイカれかけてたし。わたしを見ても何とも言わない上に、ただ怯えるような顔をしていただけだったから。確かめすらしなかつ

たけど、アレじゃまるで記憶喪失みたい」

麗華は口調こそふざけているが、その辛辣な表情は隠しきれるものではなかった。

そんな彼女を眺めながら、紅髪の少女は呆れた態度で溜め息を吐く。

「みたい、じゃないけれどね。私が保護したときには確かに記憶を失っていたから、彼女」

「……は？」

「言葉の通りだけど。私が保護したのが久峰麗華ではなく、有栖川舞だったのだとしたら　保護していたのが、記憶喪失のフリをしていた久峰麗華という推測はなくなり、本当に記憶を失っていた有栖川舞をこの私が助けた……ということでしょう？」

「……じゃあ、なに？　あの子は最後の最後で、結局わたしへの憎悪さえ抱くことを忘れたまま……　一方的な殺意を持ったわたしの手で死んだって言うの？　……なに、それ。冗談じゃない」

「ようするに、彼女もまた殺人鬼・久峰麗華の餌食の一人に過ぎなかった、ただそれだけね」

「……っ！　それは　」

麗華は思わず否定の言葉を口にしかけ、そこで唇を強く噛んだ。全ては確かだった　殺人鬼である自分が持っていた有栖川舞への破壊衝動、それは確かに存在していたのだから。

だとしても、麗華は心のどこかで殺人鬼である自分を退けたかった。

せめて、もう一人の自分と言っても過言ではない少女　有栖川舞の前でだけは、普通の女の子としていたかった。

だが　二人は同一、互いを壊しあう存在に過ぎない。

自分が殺人鬼として彼女に接しているのか、それとも二重存在の枷として破壊衝動を持っていただけなのか　その違いがわからない以上、麗華は決して舞に心を許せるはずがなかった。

そう　仕方が無い、で済む問題のはずだったのに。

「……は、はは。あはははッ！」

麗華は狂うように叫び笑う。

記憶喪失だから？

記憶がなくてもその存在が同一なことに変わりはない。

結局のところ、麗華は舞をただ純粹に憎んでいた　殺人鬼として他人へ常に抱く負の感情を、麗華は友人である舞にでさえ得ていたのである。

耐え切れなかったのは、舞のほうだったのだ。

二人が多重存在ドッベルゲンガーだからではない　ただ単純に、舞は友人から向けられ続ける強い殺意に耐え切ることができなかったただけなのだろう。

舞が苦しんでいた理由を知らずに、麗華はただ自分勝手な独りよがりやを彼女に押し付け　拳句の果てに精神さえ崩壊してしまった　儚い少女の身体を、その手でバラバラに解体して殺害した。

「やつぱり屑ね、貴女。ま、平気で人を殺せる人間が屑じゃない訳がないけど。とにかく事情は大体把握できたし、もう聞きたいことは何もない。それじゃ、大人しく捕まって貰うとしましょうか」

「ッ……うわああああああ！」

嘆くように涙を流しながら、久峰麗華は捨て身の覚悟で目の前にいる紅髪の少女へと走り出す。

こんなところで捕まるわけにはいかない。

友人を失った今でも、わたしにはまだ待つてくれている人がいる　そう自分に言い聞かせながら。

「残念だけど……早く終わらせないと兄が起きてきちゃうし、仲良しお喋りタイムはこれまでよ。お礼代わりに、貴女には圧倒的な敗北をプレゼントしてあげるわ」

その瞬間　有り得ないことが起こった。

麗華の目の前にいたはずの少女の姿が、一瞬にして完全に消えたのである。

そして、

「ぐ、あ……ッ」

視界が暗転し、麗華の身体がどさりと地面に倒れた。背後から攻撃を受けたのである。触れられたことにさえ気付けないまま、麗華はその場にうつ伏せになり、次第に気が遠くなっていく。

その時、何か言葉が聞こえたような気がした。

「さようなら、真実の殺人鬼さん。そしてようこそ、死よりも苦しい牢獄の世界へ」

そうして、夜が明けた。

学園で起こった連続バラバラ怪奇殺人事件は、その犯人の捕獲と死体の隔離にて事態の收拾を得ることとなった。

委員会リーダーである百瀬百合花の指示のもと、今回の事件に関わっていない人間達には、教師・暮風遙診の死のみしか知られないよう情報操作が行われ、また、関わった者達を召集し、朝一番に会合を開いて事の顛末を報告しあう事となった。

生徒会室　学園の三階にあるその部屋に、数人の少女達の姿がある。

「で？　いくつか腑に落ちねー点があるんだが、聴いてもイイか？」

真つ先に挙手したのは倉坂濠夜　不良生徒でありながら、今日の会合には時間通りにきっちり顔を出した少女である。

それを受け、囲まれた席の一番奥に座る百瀬百合花が答えた。

「ええ構いませんわ。どうぞ」

「ああ、まず一つ目。監視カメラに渋谷や有栖川舞、久峰麗華の姿が映らなかつたのは、常時おかつぱ眼鏡がデータの改ざんをしてやがったからだ　ってのは解るんだが、そのデータの改ざんを頼んだ人物つーのは結局のところ有栖川舞と久峰麗華、どっちなんだ

よ？」

濠夜の視線は百合花ではなく　彼女がおかつぱ眼鏡と呼ぶ少女、有栖川京へと向けられていた。

「……多分、あれは舞じゃなかったんだと思います。紅条さんの話が確かなら、舞は記憶を失っていたんですから。私と会ったあの子は、舞と同じ姿をした麗華ちゃん……ってことなんじゃないでしょうか」

「姉のテメエでも見分けがつかねーくらい、その多重存在ドッベルゲンガーつつーのは似てるモンなのか。けどよ、それならどうして一度会ったときに似ていると気付かなかった？」

「私が初めて麗華ちゃんと会ったとき、二人は全然違いました。少なくとも、私の目からみれば……髪型も、服も。背丈や声は似ていたのかもしれませんが、当時の私からしてみればそんなことは些細なことだったんだと思います。気付けるはずがありませんでした」
京は暗い表情のまま、辛いのであろう気持ちを抑え　今、自分が果たすべき事をやり遂げる為にここにいます。

思い返すほどにもうこの世にはいない妹のことが恋しくなり
それでも、姉として責任を真つ当しなれば、それこそ妹にあわせる顔がないというものだ。

「成る程ね。……じゃあ次だ。なあ渋谷、テメエはどうやってあの殺人鬼から逃げ出せた？」

唐突に話を振られ、戸惑う渋谷香奈。

だが、隣に座る焰に手を握られ、香奈は呼吸を落ち着かせながら答える。

「……うん、単純に言えば暗かったからかなー。暗いから隠れやすいし、追いかけれにくい状況だったからねー。それに実際のところ、あの麗華ちゃんはそのままで運動できる子じゃなかったんだと思うー。あたしはそれなりにやってる方だから、逃げるだけなら簡単だったんだよー。あと決定的なのは、ほむりやんの部屋に逃げ込んだら違う子がいて、その子が舞ちゃんだったってことだねー。麗華

ちゃんは舞ちゃんを狙っていたみたいだから、あたしのことなんて忘れたみたいに舞ちゃんを狙い始めたんだよ……。さすがに二人で逃げるのは難しくなって、二階の教室で舞ちゃんが麗華ちゃんに向かつて言ったの。『この人は関係ない、わたしはどうなってもいい』ってねー。そこから、麗華ちゃんに気絶させられてあたしは口ツカーの中……。舞ちゃんは」

一度口を開けば饒舌な香奈でも、舞のことに関してはこれ以上話そうとは思えなかった。彼女の姉である京に氣を使ったのだろう。……あんまり気にすんじゃないぞ、渋谷。テメエは別に何も悪くねーよ」

「あはは、まさかほりちんからそんな言葉が聴けるとは思わなかったよー。珍しいこともあるもんだねー」

「うるせえよ。……ま、オレが氣になったのはこんくらいか。じゃ、後は勝手に進めてくれて構わねーぜ」

濠夜の言葉に百合花は無言で頷くと、その視線を今度は焰へと向ける。

それに気付いて、焰は静かに口を開いた。

「……じゃあ、今度は僕の番だね。正直な話、ずっと氣を失っていた僕からしてみれば、今回の事件に関して氣になるってこと自体は特にないけれど、そうだな、しいて言うなら百合花さんへの質問がいくつかあるよ」

「あら、わたくしにですか？ どうぞ、遠慮なく聴いて下さい」

「それじゃお言葉に甘えて。ねえ百合花さん、本当のところ貴女は知っていたんじゃないんですか？ この街で起きていた連続殺人事件の本当の犯人が、久峰麗華だったって事を」

「……何故そう思いになるのかしら？」

「うん。これは憶測なんだけれど、僕に久峰零次の始末を任せたのが久峰麗華が彼の元を去った後、つまり、彼が街の能力者達を疑い始め、次々と襲うようになってからの時期と被ってる。どうして百合花さんが今になって久峰零次を狙ったのか、それは別に今ま

では大目に見ていたとか、そんなことじゃない。ただ単純に、久峰零次が犯人ではなかったから……違うかな」

「……正解率五十パーセント、といったところですかしら」
百合花が答える。

「確かにそれはその通りですが、全貌ではないですわね。わたしは、最初から久峰零次が街の連続殺人事件の犯人だとは思っていませんでした。そして久峰麗華が犯人だとも確証はなかったです。ただひとつ、犯人が女性であるということだけは掴んでいたのですけれど」

「……もしかして、だから僕に久峰零次の性別を？」

「ええ。女性だった、と聞いたときはまさかと思いましたわ。そもそも以前から起きていた街の連続殺人事件と、今回の久峰零次が起こしていた事件はまた別件です。わたくしは、あくまで久峰零次が「ま、結局それはオレだったんだがな」

濠夜が誰にともなく呟いた。

「でも、勘違いとはいえ 久峰零次が女性だという情報を得て、百合花さんは街の連続殺人事件の犯人が久峰零次なのかもしれないと睨んだ。噂ではそう言われている。っていうのは、証拠もない上で久峰零次がただそう言いふらしているからだ、ってことか」「そうですわね。妹を守る為とは言え、あれでは自分が犯人ではないと言いながら歩いているようなものでしたから」

「つまるところ、久峰兄妹は二人して殺人鬼と成り果ててしまったってわけか」

両親を殺し、そのトラウマから純粹にして生粋な殺人鬼となった妹 久峰麗華と。

壊れゆく妹を守る一心で汚名を被り、助け出す為に本物となった兄 久峰零次。

二人の兄と妹は、そうして『殺人鬼』という穢れた仇名を持つに相応しい存在となったのだった。

「……さて。それではそろそろ開門の時間ですし、会議はこの辺にしておきましょう。倉坂さんと有栖川さんはわたくしと一緒に来てください。焰さんと渋谷さんはここで別れですわね。また放課後にでもお会い致しましょう」

「あ？　なんでオレが百瀬と」

「手続きがありますから。　まさか、お忘れではありませんですわよね？」

「……別に、何でもねーよ。チクショウ」

「あれー？　ほりちんって百瀬先輩に弱いんだー。これまた意外ー」
「……渋谷、アイツらにチクったりしたら殺す」

「それでは皆さん、失礼しますわ」

そうして、百合花と濠夜、京の三人は生徒会室から去って行った。二人取り残された焰と香奈は、互いの手を握り合ったまま　しばらくの間、静かな時を過ごすことにしたのだった。

「　さてと。紅条と渋谷を二人にさせてやったのはテメエの氣遣いだとして、別にオレとおかつぱ眼鏡を連れ出したのには他に理由があんだろ？」

校舎内の廊下を歩きながら、ふと濠夜が口を開いた。

「ええ。どうも血生臭いお話になりそうだったので、あのお二人には退席して戴こうかと思ひまして」

「ふうん。で、どんな話だよ？」

「久峰麗華の持っていた能力のことですわ。　気になりますでしょう？」

「ああ。触れただけ　いや、多分アレは自分に触れたモノに対して発動する能力なんだろうが……一瞬で人間をバラバラに解体できちまうチカラなんて、一体どんな能力なのか　ってのは、オレも割と気になってた」

「私も……舞や三姉妹のみんなをあんな風にしてしまった力について、知りたいです」

濠夜と京が頷いて、百合花がそれに応える。

「恐らく、アレは超能力ではありません」

「……なんだと？　どういう意味だ、それ」

「解らないのですわ。わたくしにも、アレが一体どんなチカラなのか。人と触れ合っただけでそれを分解してしまう能力　わたくしはそう見ていますが、そんな能力なんて見たことも聞いたこともありませんから。正直な話、アレはわたくし達の手に負える存在では……」

一瞬、百合花が影のある顔を見せ　それに気がついた濠夜は、思わず百合花の肩をその手で掴んだ。

「オイオイ、血生臭い話っつーのは……ようするにそういうことかよ？」

「……恐らく、あの少女は拘束しようが牢に閉じ込めようが　自らに触れるモノ全てを破壊してしまうのであれば、そんなことをしても意味がないでしょう。次に目を覚ましたとき、わたくし達はあの殺人鬼の少女を止めることができない」

二人の会話から、ようやく京も話の内容を理解できたのだろう　驚いたように目を丸くして、百合花の目の前まで駆け寄り向かい合った。

「まさか、麗華ちゃんを殺すつもりですか……！」

「そうしなければ、彼女はとも容易く脱走し……今回の事件のように、また死体の山を築き上げるでしょう。それだけは、なんとしてでも止めなければならなのですわ」

「おかっぱ眼鏡に話したのはケジメだろうが、オレに話したっつーことは　殺しをオレにやらせる、っつー意味で受け取ってイイのか？」

「倉坂さんっ！」

「黙ってろ、おかっぱ眼鏡。……で、どうなんだ百瀬」

三人の間に不穏な空気が漂う。

百合花はどこか躊躇いをもった表情で目線をそらしていたがやがて観念したかのように、静かにその問いへの返答を口に出す。

「可能であれば」

二階のとある教室　三人の少女の死体が散らばっていたはずの場所へ、焰と香奈はやってきていた。

今となつては跡形もなく、血痕ひとつ残さず綺麗になったその部屋を　二人は口惜しさと悲しみを込めた表情でただ眺めていた。

「……ここでさー、あかりんがあたしを助けようとしてねー。自分も一緒に逃げ出せばいいのに、あの二人を置いていけなかったんだろうね……あたしだけを外に追い出して、カギまで掛けちゃってさー。その時、あたしどうしていいのかわかんなくてねー。だから逃げ出した。うん、その時は必死に助けを呼び戻るつもりだった宿舎で百瀬先輩とほむりゃんに会って、その時すごくホッとしたんだよねー」

ただ独り言のように呟く香奈の言葉を、焰はただ無言で聞いている。

「あたしは助けられただけで、あかりん達を助けることはできなかったんだよ……」

「……倉坂さんも言ってたじゃないか。香奈は何も悪くないんだって」

「それでも……あたしは……」

しばらく俯きながら、ふと香奈は鼻をすすった。

「あかりんがさ、言ってたよー。あたしを助けた理由が、あたしを助けないと困る人がいるからだ……って。あの子、きっとほむりゃんが好きだったんだよ」

精一杯の笑顔を作って、香奈は焰に向けてそう言った。

だが　その時、平静を保っていた焰が表情を崩す。
まるで何か的外れなことを言われたような顔をして、

「　違うよ、香奈。一之瀬さんが好きなのは僕なんかじゃないんだ」

「え……？　ど、どういうこと？」

「少し前にね、相談を受けたことがあったんだ。彼女は自分が女なのに、同じ女の子を好きになっちゃったって。その時、僕はそういう話は苦手だから　　ってあまり話を聞かず仕舞いだっただけだよ。その相手ってさ、香奈のことなんだよ？」

その時。

今まで強がりですぐ耐え続けていた香奈の涙腺が崩壊し、泣き崩れるようにして焰の胸元へと飛び込んだ。

「一之瀬さんって、ああだからさ……多分、面と向かって素直に言えなかったんじゃないかな。それによく考えてみなよ、もし僕を好きだったのだとしても、そんな僕が悲しむからって理由だけで、命を賭けてまで香奈を助け出そうとするはずがないだろう？」

「うん……、うっ……！」

香奈を抱きかかえるようにして、焰は彼女の頭を撫でながら言う。

「それに、一之瀬さんだけじゃない。佐久間さんも船橋さんも、みんな香奈が好きだったよ。みんなで香奈を助けたいと思ったから、今がある。善悪でいえば香奈は悪くはないけれど、彼女達の賭けた命を背負うことはしなくちゃならない。僕なんかが言うことじゃないかもしれないけれど　　香奈は彼女達の分まで生きなければならぬ義務を背負ったんだ。僕や倉坂さんみたいな人間がいるこちら側に、香奈はいるべきじゃないんだよ。解るよね」

「っ……でも、ほむりゃんは　　」

「僕は、もうすでに壊れてしまったから。香奈と同じ場所には立てないから。だから、僕にできることは　　香奈を守るってことだけなんだ。こうして同じ空気を吸えるだけで、僕にとっては十分幸せ

なんだよ」

「う……、うああ……っ！」

嗚咽を混じらせ、声を上げて嘆く香奈の身体を抱き締めながら
焰は髪を解いた。

「そう……香奈はこちら側にはきてはいけない。貴女は私達を踏み
とどませられる枷かせでもあるのだから」

少女達は、交錯する道を互いに別れ歩んでいく。

その道がいずれ繋がり、ひとつになることを夢見ながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6336d/>

焰の邂逅 01.能力者達の交わる夜

2010年10月8日14時36分発行